

I はじめに

反省、回顧の榮	新	田	純	興	1
新たな飛躍を期待して	前部長	田	村	三郎	3
技術、闘志、そして風格	部長	安	藤	良雄	5
監督八年目の弁	監督	浅	見	俊雄	7

II 回想、随想、助言

スポーツと闘魂	中	村	陽	吉	10
私の現役時代	竹	腰	重	丸	14
なぜ優勝しない	大	内	孝	弘	18
キチガイの必要性	小	林	孝	正	20
旧制サッカーインターハイと東大ア式蹴球部	高	月	東	一	22
迷監督奮戦記	安	達	二	郎	24
現役諸君へ	嶋	田	厚	二	28
無題	北	川	薫	樹	29
サッカー——私を駆り立てるもの	黒	沢	秀	樹	30
	中	根	雅	子	31

III 部 史

一九三六 (昭和十一年) ～一九四一 (昭和十六年)	横山陽三	33
サッカー部のおもいで―昭和十三年より十六年まで―	横山陽三	41
一九四二 (昭和十七年) ～一九四六 (昭和二十一年)	須賀敏孝	38
雑感	須賀敏孝	45
一九四七 (昭和二十二年) ～一九五五 (昭和三十年)	岡野俊一郎	48
一九五六 (昭和三十一年) ～一九五九 (昭和三十四年)	岡野俊一郎	58
二部転落の頃	小山富士夫	59
一九六〇 (昭和三十五年) ～一九六二 (昭和三十七年)	小山富士夫	65
一九六四 (昭和三十九年) ～一九六六 (昭和四十一年)	小山富士夫	69
最弱チームの主将から	小川恭二	72
一九六八 (昭和四十三年)	小川恭二	74
昭和四十三年度をふりかえって	藪内俊和	75
一九六九 (昭和四十四年)	藪内俊和	76
.....	武田厚	77
一九七〇 (昭和四十五年) ～一九七三 (昭和四十八年)	武田厚	78
四十八年度リーグ戦の思い出	笠原昌行	81
昭和四十六年度リーグ戦雑感	笠原昌行	86
京大戦全記録	宮路康利	88
.....	宮路康利	90

IV 追 悼

亡き友を偲ぶ	高崎達也	91
沖邦雄君を悼む	見米紘一	92

V サッカー部この一年

昭和四十九年度サッカー部活動報告	105
部員意識調査	95

VI 現役部員から

サッカー部生活を終えるにあたって	佐々木順孝	108
“背番号2”	天野裕	118
サッカーと私	荒川吉彦	119
卒業するにあたって思う事	磨井祥夫	121
無題	遠藤讓	121
	大高松男	123
	尾崎哲男	124
	柴田敏之	125
反省	兵頭圭介	127
今思ふこと	山中馨	128
	山辺福二郎	129
“言わずにこした事”	吉沢伸明	129

ある無名選手の思い出と決意 新主将 池森俊文 132

蹴った、削った、触った。―記憶に残る名場面集 植村祐幸 135

無題 小野田荘平 135

影本 杉浦裕浩 136

多田 多田均 137

田中 田中靖 138

ノコサンの話 谷本篤信 138

駄文・雑文・愚文 新主務 茅野浩一 139

私とサッカー部とのかかわりについて 陽野浩一 141

思うままに 陽野浩一 141

「考える」という事 南谷尚志 144

サッカーと私 宮武尚志 144

無題 池田吉彦 145

..... 加藤重信 146

..... 田中裕之 147

判断力について 森井太一 148

..... 青山研一郎 149

..... 猪熊康夫 150

スポーツの王様ハサッカーV 大矢隆司 151

..... 加川隆実 151

感謝と反省をこめて 西山由美子 152

東大ア式蹴球部に入っの感想 本庄孝志 153

試験を一例にして考えたこと 山崎隆志

Ⅶ ロッカーーム

新年会はこわいよんんの巻 堀井茂

結束固き「狂気集団」 史

私の青い鳥 武史

つれづれぐさ 真一

仁義なき(？)戦い 弘

対談・放談 淳

駒場の冬 脇田

作文「奉仕隊の御勧め」 健一

Ⅷ 決算報告

編集後記 牧野尚雄

I はじめに

反省・回顧の栞

大正一一年卒 新田 純 興

一九一八（大正 七年） 第一回関東蹴球大会の招待試合に八高OBで編成の東大チームが参加。

一九二〇（大正 九年） 第三回関東蹴球大会には八高OB以外の者も参加して東大チーム編成。

一九二一（大正一〇年） 第五回極東選手権大会の日本代表はじめて公式に海外遠征。HBに野津謙活躍。

一九二五（大正一四年） 第七回極東選手権（マニラ）の日本代表に竹腰重丸補強選手として参加。

一九二六（大正一五年） 東京カレッジ・リーグに東大初優勝（六連勝の第一年目）。

一九二七（昭和 二年） 第八回極東選手権（上海）に竹腰重丸（春山泰雄、近藤台五郎等）補強選手として参加。海外初勝利。

一九二八（昭和 三年） 上海へ東大チーム初遠征。確信と自信を得てリーグに臨む。

一九三〇（昭和 五年） 第九回極東選手権（神宮）の日本代表の過半数は東大。竹腰重丸、竹内悌三、篠島秀雄、高山忠雄、手島志郎、若林竹雄、阿部鵬二、春山泰雄。中国と同位とはいえ立派な極東の覇達成。

一九三一（昭和 六年） 全日本選手権に東大LB優勝。東大のレギュラーはカレッジ・リーグに優勝。東西リーグ代表同士の試合では関学と二：二引分。

一九三六（昭和一一年） ベルリンオリンピック日本デレゲーションの旗手は竹内悌三、選手に種田孝一、高橋豊二、監督コーチ陣に竹腰重丸参加。

一九四一（昭和一六年） 関東大学リーグで早大と同位優勝。

一九四二（昭和一七年） 関東大学リーグで東大単独優勝。

一九四六（昭和二一年） 復活第一回全日本選手権大会に東大LB優勝（於御殿下）。

一九四八（昭和二三年） 関東大学リーグに東大優勝。二位以下は文理大、早大、慶大、明大、千葉

医の順。

一九四九（昭和二四年） 復活第二回全日本選手権大会に東大LB優勝（於東伏見）。

一九五一（昭和二六年） 第一回アジア競技大会（ニューデリー）フットボール・トーナメントで第

三位となった日本代表チームには有馬洪、加藤信幸参加。

一九五三（昭和二八年） ドルトムントの世界学生選手権大会派遣チームの団長は竹腰重丸、マネジ

ャー大谷四郎、選手岡野俊一郎。

以下 略

一九七一（昭和四六年） 九月、日本蹴球協会は国の内外から関係者を招いてその創立満五〇年を祝賀する式を行ない、記念事業の一つとして「日本サッカーのあゆみ」を刊行し反省と回顧の契とし、FIFA、イングランドのFAその他世話になった関係方面へ贈呈することとし、一九七四年春この本は完成した。東大OB諸君の座右にはかなりの数が備えてもらってあるが、現役の諸君や若いOBにはまだ宣伝が行き届いていない。

JFAは現在財団法人日本サッカー協会と発展したが、この「あゆみ」の精神事蹟をふんまえて益盛んになってゆくべきもの、その内に潜む東大関係の目星しい点だけを表にした。近く作られる開学百年記念の部史も「あゆみ」の筋を追って詳細肉付けされることになるが闘魂第三号の主眼が明示されたので早速筆をとった。

私は卒業後十数年東京から離れていたので東大関係のくわしい事は知らない、掘り下げ方も浅薄と
思う。OB諸君や現役の諸君の探究心に期待すること大である。

昭和五〇年の筆はじめに。

新たな飛躍を期待して

前部長 田村三郎 昭和一四年卒

われわれの東京大学ア式蹴球部が一部から二部に転落したのは、私が監督をお引受けした年のことであつた。私も当時は体力的に或る程度の自信をもっていたし、時間的にも多少の余裕があつたので、現役の諸君といっしょに、ほとんど毎日ボールを蹴っていた。そしてチームの実力についてもかなり自信をもってリーグ戦にのぞんだが、事實は連戦連敗、あげくの果てに法政大学との入替戦に一対〇で負けてしまった。

私がこの数年間、部長をつとめさせていただいたのも、一部への復帰に何がしかのお役に立てればと願っていたことにほかならない。しかし現実には、部長としてリーグ戦を観戦するのが精一杯で、なるべくはやい機会に、新しい部長をお迎えしなければならぬと考へていた。まことに幸いなことに、安藤先生がこの大役をこころよくお引受け下さつて、私としては、ほんとうに肩の重荷をおろした感じである。

しかし、監督から部長へという長い年月を通じて私が抱きつづけた懷疑めいたものは、今に至つても解消していない。一口にいえば、現在の東京大学における運動部のあり方の問題である。多くの私立大学の運動選手が半ばプロ化している現状のなかで、東犬の選手諸君が彼らに対応できる途は果してありうるのだろうか。このことについては、現役の諸君も同じような悩みを抱いているにちがいない。

たまたま本年一月一五日に行われた早稲田と近鉄とのラグビーの試合を見ていて、私は深い感銘を

受けた。というよりも、久々に学生スポーツの真髄に触れることができて、実に爽かな気持ちになれたのである。それより前に行われた早稲田と明治や慶応との試合でも、早稲田の選手が基本技術をきわめて忠実に守っていることが、素人の私にも十分に感じることができた。しかし近鉄との試合では、体力的に決定的に劣っているのかかわらず、早稲田の諸君があそこまで果敢に戦ったことに、私は頭が下がる思いであった。

もちろん、東大ア式蹴球部の現役の諸君をとりまく状況のむずかしさは、早稲田のラグビー部の諸君に比べくもなからう。しかし、少くとも体つきに關する限り、近ごろの東大の諸君のそれは、他大学のサッカー部の選手に、それほど劣っていると思えない。むしろ、私たちが現役であったときよりも、体軀に恵まれているのではないだろうか。

最近の東大のチームには、練習時間の少なさといったような問題を、戦術、或は末梢的技術で置きかえようとする傾向があるのでないだろうか。しかし、基本的な技術が各人について確立していない限り、どのような戦術も成り立ちえないことはいうまでもない。地上に静置したボールを、左右の足で正確にインステップキックできる選手が、現在の東大に何人いるだろうか。そのような単純な技術さえ修得されていないから、グラウンドがぬかつたりすると、シュートもクリアーも満足にできなくなってしまう。現実に、リーグ戦が行われる季節には、霜が降り、しばしば氷雨にも見舞われるのである。キックの練習をするのに広いスペースはいらぬし、チームメイトも不必要である。

全日本のサッカーの代表チームのプレー振りが、わが国のサッカー技術の向上をいちじるしくゆがめているのではないだろうか。一人ひとりの力強さがあまり強調されていないために、いつまでたってもチームとしての力がついて来ないように見受けられる。重厚味を欠いた彼らのプレーを、他の多くのチームがまねているのである。

かつての東大の選手は、旧制高校の選手生活を通じて、ひじょうによく鍛えられていたし（プレーそのものには現在の諸君のようなスマートさが無かったが）、大学に入ってから各人がそれぞれの

やり方で、個人技をみがいていた。したがって大学を卒業してから相当の年月がたっても、技術的な衰えを容易にみせなかつた。それに比べると、近頃の若いOBの諸君の技術が長持ちしないように見えるのは、私の偏見であろうか。

私は東大の現役の諸君が、もう一度振り出しにもどって、素朴な個人技の修得——それ以前に体力をつけることも必要であろうが——に徹することを期待してやまない。そして、みずから忠実であるう努力し、それにあらゆる情熱を傾けえたとき、諸君の胸のうちには、試合の勝敗にかかわりなく、かならずや爽かなものが残るであろうし、諸君のこれからの人生に得がたい教訓を与えることにもなるであろう。

闘魂！ 現役の諸君の健闘を期待してやまない。

技術、闘志、そして風格

部長 安藤良雄

去年の夏、文字どおりはからずも部長をお引受けしてからまだわずか半年だし、また秋のシーズンは相にく結婚式や学会などとかち合うことが多かつたため、応援に行けた試合もすくなかつたので、こゝで多くを語る資格はないが、先輩、監督、部員の皆さん方のあたゝかいご配慮によって、急速に部の雰囲気は溶けこむことができたのは本当にうれしいし、また有難いことだと思っている。

ところで、東大のサッカーといえば、私たち五十才半ばすぎの者にとっては昭和初年のあの連続優勝の頃を思い出す。六回という連続優勝の記録はその後もまだ破られていないようであるが、中学生だった私が東大に在学していた兄（庭球部に所属していた）に連れられて通った東大のサッカー戦がつい昨日のことのようにまぶたに浮ぶ。新聞も、東大の「ア式蹴球」の連戦連勝を大きく報道してい

た。もっとも東大の強かったのはサッカーだけでなく、ボート、バスケットボール、バレーボールもしばしば優勝していた。野球、ラグビーはすでにその頃から一部の私立大学ではセミ・プロ化していたが、セミ・プロ化の進んでいなかった分野のスポーツでは東大をはじめ国立大学（といっても東京商大——現在の一橋大学——のボート、ホッケイなどを除くと旧帝大以外の官立大学は単科大学であったため規模も小さかったので学生数がすくなく、スポーツで強くなるのがむずかしかったが）が大いに活躍し覇を競いうる余地があったといえるのだろう。

それはともあれ、現役の部員諸君には往年の輝かしい歴史が重荷になることもさぞ多かろうと思う。何につけても昔と比較されるからである。しかしやはり何といっても輝かしい伝統は尊い遺産であり、そのような部に籍を置いてボールを蹴ったことは本当に恵まれていると思う。げんに往年の連続優勝の頃の成績とは比較にならないにしても、ある地位を確得しえているのも伝統あればこそであろう。現役の諸君は、いたずらに過去の伝統におぼれることも、反発することもなく、何物にも代え難い伝統をみずからを鼓舞するものとして積極的に受けとめ、いかして、さらに後進に伝えるべきものだと思う。

私は、専門的なことに口をさしはさむことは慎みたいと思うが、試合のときに、激励とアドバイスに見える大先輩からプレーの間に間に感想をうかがって、私としてもうなずかされることが多い。そういうことを統合すると、東大のサッカーは、技術的にさらにみがきをかけること、そして闘志——この雑誌の題名とまさに一致する——を高めることが必要のようにだし、私もひそかにそう思っている。

ほとんどすべてのスポーツがプロ的風潮におかされ、また体育学部（体育学科）や夜間学部（これらの学部そのものが立派かつ有意義な存在であることはもちろんだが）に運動選手要員を擁するといった状態のもとで、まじめに勉強しつゝスポーツ・チームを編成して試合に勝っていくという事は至難のことではあるが、練習の積み重ねによる努力と闘志とによって現在以上の試合成績をおさめていくことは決して不可能ではないと思う。現在の東大サッカー部員には決してそういう空気はないと

思うが、「スポーツだけをやっている連中とは違う。われわれは勉強があるのだ」ということに甘えることはよくないことである。マス・コミなど第三者はよく、東大のスポーツを「清涼剤」などと書いてはくれるが、みずからがみずからを「清涼剤」だと思ひこむのはよくないことである。大学は何よりもまず学問をするところであつて、スポーツもそれと両立するものでなければならぬといふことは常に忘れてはならないが、スポーツをし、試合に出る以上、絶えず技術をみがいてそれを向上させ、試合の一つ一つ、プレーの一つ一つに闘志をわきたゞせることは絶対に必要であり、これはスポーツのことだけでなく、現役時代においても、また後年においてもスポーツを懸命にやつたもののみが体得し、誇りうることであり、人生の面においても仕事や社会的活動においても十分活きることだと思ふ。

いさゝか「釈迦に説法」となつてしまつたので「部長訓辞」的な言葉はこゝでとゞめたいがいまつ、私はくり返しいつた「技術」の向上と「闘志」のほか東大のサッカー・チームがチームとして「風格」(もちろん技術と闘志を伴つた)をいっそう高め、一つ一つの試合、プレーにもそれを示してもらいたいと思つている。技術、闘志、風格、この三つをたゆまず向上させていくことが、輝かしい伝統をきずき上げて下さつた先輩方に報いうる道であり、かつ、つゞく後輩に受けついでいくに値するものだからである。

監督 八年目の弁

昭和三十一年卒

監督 浅見俊雄

石の上にも三年というが、山上御殿の横の石の上に坐つて試合を見るようになって、早いものでも

う八年目を迎えようとしている。その間、上下それぞれ一回づつの入替戦を経験したが、それ以外の年はいつも中位というのが東大の定位置のようになってしまったようである。もう一試合勝っていれば一部に挑戦できたのにと口惜しい思いをしつゝ、逆にあの試合を落としていければ下の入替戦だったとぞっとするような毎シーズンを通しているのである。

監督を引き受けた時の私の考えは、前号の闘魂に書いた通りであるが、実際に指導をしていくうちに、この考え方が間違っていたことに気付かざるをえなかった。東大サッカー部員はサッカーに対する構えは出来ているのだから、監督はそれに知識と適当な刺激を与えてやれば彼らの力を引き出すことができる考えたのは大きな誤りであった。

東大生は激烈な入試競争に打ち克って来たのだから、苦しさに耐えることや、勝負に対する心構えは人一倍あるだろうと考えてしまいがちだが、事實はそうではないのである。家庭環境に恵まれ、整えられるだけ整えた勉強条件の中で、暖かくいつくしみ育てられて来た者でないと、入学試験を突破しにくいのが現状なのである。サッカー部に入学してくるのもこの例外ではなく、ほとんどが良家の坊やといったタイプである。

しかも本格的な運動部の生活を高校時代に送ったことのある者はまずいないから、自分の能力のありつたけを出して何かをするという経験は過去には持っていない。したがって、がんばれといわれても、具体的にどうすることががんばることなのか、どこまでやっても体が大丈夫なのかということが実感としてはわからないのである。いわば、小学生に勉強を教えるのと同じような感じで、サッカーへの取り組み方を一から教えていかなければならないのである。

それだけに大変といえば大変だが、逆にいえば白地に色を染めていくようなもので、教えがいもあるというものである。ただそれには手間と暇がかかるから、とても一人でやるという訳にはいかない。こうした意味も含めて、サッカー部の指導体制をどうするかということは、この辺で基本的に考え直さなければいけないことだと思ふ。

現役の活動は現役の主体性にまかせるべきで、何もOBや外部の人がそれほどまで手をかす必要はないという議論もあるだろう。たしかにOBの大部分はそうした部生活を送りしかもそれ相応の成績を残して来た。しかし過去七年間の監督の経験からいえば、今よりも手を抜けば三部転落は必至といっているし、むしろ今以上に手をかけなければ、二部を維持することも難かしい状況にあることは断言できる。これは東大の他の運動部の成績からも推測しうることであろう。

それほどまでして二部に留まっていることはない、力相応の所に落着けばよいではないかという議論もある。しかし何もよくはわからずに入部して来た一年生が、あるいは適当にサッカーを楽しもうと思つて入つて来た一年生が、四年になる頃には何としても勝とうという心構えに変わってくるという過程は、彼らにとつて実に貴重なものだと思う。我々OBがそうした指導体制が出来るのだとしたならば、やはりそうした貴重な体験を彼らに持たしてやることは意義があることだと思ふのである。

苦勞をしないあどけない坊や達が、たくましい青年に変身して行く過程に力を借してやれるような指導体制が出来れば、それがそのまま一部復帰への悲願にもつながって行くのだと思う。

八年目を迎える監督としての最後の仕事を、新しい指導体制を確立することにおくとともに、それができるまで何とか今の位置を保つていられるよう、現役諸君とともにもうひとふんばりしなければならぬと思つている次第である。

日の自由主義世界の繁栄を築き上げました。それだけに、それは現在の自由主義世界の社会では、その社会的基本原理として受入れられ、それに疑問を投げかけたり、その訂正を提案する人間は常識を疑われることになっていきます。われわれの所屬を余儀無くされている日本の社会は百年余り前に自由主義の洗礼を受けて以来、紆余曲折はあったものの、殊に敗戦後は急速にその方向に向い、現代では狭い国土に多数の人間がひしめいているという事情もあって、生きるということは他人を負がすこととだ、と言ひ兼ねない状態になっています。私は昨年家内とヨロコッパを遊び歩いてきましたが、大阪へ帰った途端、駅でエスカレーターに乗るのにも、電車に乗るのにも、他人を押し除けるようにして先を争わなければならぬ社会になっているのに今更のようにビックリした記憶があります。ヨーロッパでは何処でも他人、殊に婦人には途を譲るだけの余裕は未だ充分残っています。

いずれにせよ、わたくし達の生活している社会では自由主義、競争、人に勝つという事は常識として受入れられていると言つて言い過ぎではないでしょう。然し歴史を見るとこの原理にも幾多の疑問が提出され、又それを廃止したと自称する社会も現存しています。実例を挙げて見ましょう。

先づ申す迄もなくマルクスを代表とする社会主義です。然しこれは私有財産の否定というよりような主張も無かつた訳ではあり

ませんが、素々重要ではあるが、単なる社会の一要素に過ぎない生産分野の中の資本家及び経営者対労働者の利潤配分の争ひでしたし、困ったことに始祖マルクスの性格のせいもあって、頗るビリジエントで闘争的な思想になってしまいました。このことは日本現代の社会党や共産党の言行を見ても良く分ることです。そのことと無関係ではないと思ひますが彼等に依て作り出された社会は、ソ連にせよ、中国にせよ極めて権威的で権力的なものとなっています。私はアメリカ生活が長かつたせいか権威と権力には強い拒否反応を持っていますから、と彼等ソ連と中国に於ける新しい社会の実験は人間の社会としては完全な失敗であつたことを認めなくてはならないと思ひます。

第二の例は今議会でも問題になっている独占禁止法の考え方は、独禁法は日本では戦後になって始めてアメリカ人に依て輸入されたものですが、アメリカではもつと古くからあつたものです。これは一応強力な独占企業を制限することに依て自由なる競争を可能にするのだと説明されています。然しそれは自由主義に遠慮した言い廻しであつて、或る種の自由なる競争と、自由なる競争の結果生じた強者を違法として自由の制限を合法化しようとするものであることは否定できません。今でこそその声は一応表面から消えています、一時日本では独禁法の廃止を財界が要求していたことがあるのは記憶しておられる方もあるかと思ひます。如何にも日本らしいですね。

然し何れにせよ未だ未だ他人の不幸の上に自分の幸福を築こうとする社会の風潮が改められる見込は見えませんし、それを可能にする第三の途の提案さえも出ていません。私自身としては、強力で広範囲な福祉制度ができれば、負けた人もそう苦しまないで生活できるようになるということに一縷の望を持っています。このことに就て書いていると余り前置が長くなって、私のスポーツ観には何時行き着くか分らなくなりますが、この辺で切り上げて先に進みましょう。

このように私達の人生は揺り籠の中から棺桶に至る迄、朝から晩迄人に勝つことを心掛けていなければならぬようになっていきます。これは現代が特にそうなのだとも言いません。二宮尊徳のおしえだつて負けた人の不幸のことは余り言わないだけで、矢張り人に勝つことを教えていることには変わりありません。ところが、ところがですよ。そういう世の中で、唯一つ、いくら人に勝つても、負けた人を少しも不幸にしない世界があるのです。それがスポーツだというのが私の見方なのです。ですからスポーツは現代の救いなのです。

私の蹴ったボールが一時半の間にゴールに百回入ったって、入らなくて、ゲーム終了の笛が鳴ってしまえば、何ということはないでしょう。今迄激しくコートで球を打ち合っていた相手でも、済んでしまつたら、ニコニコして、手を握り合つて別れることができるのではないのでしょうか。私にとっては、そ

れがスポーツの功德だと考えられるのです。だから、それを妨げるようなことは、スポーツには厳禁だということになります。そうした厳禁すべきことの例を幾つか挙げて見ましょう。

先づ第一はスポーツでも負けてはいけないように思わせることです。例えば母校の名譽だなんて、分つたようで分らないことを言い出します。私は関西で野球で有名になっている或る私立高校の校長さんに聞いて見たことがあります。随分ひどいことを言う奴だと思われたことでしょうが、これは本当の話なのです。私は、どうも学校が学問で有名になるなら未だ良いけど、野球で有名になっては恥かしいとは思われませんかと聞いて見ました。校長さんはシュンとしていたようでしたが、でもね、私立の学校ですから、これも営業なんですよと答えてくれました。私はテレビのニュースで東大の野球が敗れたのを聞く度に家内に、東大未だ健在なり、と言うことになっています。東大は学問の府で、未だプロ野球の人材養成所にはなっていないという意味です。

第二はオリンピック、国体に代表される考え方です。素々スポーツは自然人の間にしか成立しないものです。元来個人A対個人B、或いはチームC対チームDの域を出られないスポーツを、自然人でない国対国、県対県に切り換えるには非常な論理的無理と事実の捻じ曲げが存在します。国家とは何かという哲学的追求も脱落しています。それに国民、県民としては税金の

無駄使いをするなど言う角度もあります。増して金儲けが目的のプロ・ボクサーの試合に国旗や国歌を勝手に使つて、日本国とメキシコ国の試合だなどと言われても、私にはどう見ても日本人と一メキシコ人のボクシング以上には見えません。果して国家がリングに上れるものなのでしょう。このように矢鱈に国旗や国歌を持ち出したがる訳ですが、原水爆以前の世界なら未だしもの話ですが、現代の世界はできるだけ国家対国家の対立感を群衆に持たせまいようにしないと大変なことになる可能性を秘めていることを忘れてはいけません。嘘のようですが、南米でサッカーの試合から国対国の戦争になつたことがあります。

大体スポーツの盛んな国、或いは社会というのは現在の考え方は、レコードの上位の人が居て立派な競技場があることが条件になつていてと思います。私は本当は、そんな上手な人は居なくても、多くの人が誰でも自分でスポーツをする、楽しむ社会で、競技場の一つ一つはそんなに立派でなくても良いから、誰でも何時でも使えるような施設がふんだんに有するといふような社会を言うのだと思つています。私はオリンピッククォリ止論者です。国体なんて勿論反対です。これは又選手制度反対にも繋がつてゆきます。

第三は以上に述べたことも深く関連しているのですが、スポーツの勝者に賞品を出したり、表彰したりしないことです。

スポーツの喜びはスポーツをすること自体にあるので、賞品を貰つたり、表彰されたりすることは付けたりで、本当はどうでも良いことなのです。たかが一秒の何分の一か速く目的に着いたつて、一キロの何分の一か人より重い物を持ち上げたからと言つて、どうせ飛行機や起重機には敵わないのですから、実用になる訳ではありませんから別に表彰して貰わなくても良い訳です。それを余り騒ぎ立てると、人間というのは弱い者ですから表彰されたさ、賞品欲しさに妙な薬品でも使つて見ようかということにもなり兼ねません。

次に第四として、どうしても職業スポーツ、見るスポーツを槍玉に挙げなければなりません。色々と重複しますから余り詳しくは述べませんが、金を稼ぐためにプレーする、負けると収入に影響するというのはスポーツの中には入れられません。むしろ見世物としての必要且充分な条件が揃つていと言えらるでしょう。勿論スポーツでも学校のように教える先生も必要なのです。プロの存在を否定する考えはありません。唯スポーツとしてではなく職業の一つとして考えなければなりません。序にもう一つ、第五に応援ということに触れておきましょう。私は自分の好きな人の勝負に思わず息を止めるという人情は嫌いではありません。然し学生の間に見られるように組織を作つて、計画的に相手のプレーを妨害しようとするのは許されるべきではないと考えます。グリーンで人がバットする時動いた

り声を立てたりはしないものです。それなのに野球なら大鼓を用意して行って鳴らして良いのでしょうか。

この辺で終りにしようかと思いますが、私のスポーツ観の中の闘魂の位置も、叱られるかも知れないが、ボヤかさないで書いて置くことにしましょう。私はタイムアップの笛の鳴る迄の闘魂は賛成なんです。だけど笛が鳴ったら忘れて貰いたいのです。

(一九七五・二・一三)

私の現役時代——(インタビュ)——

昭和四年卒 竹腰 重九

*初めてサッカーをなさったのはいつ頃ででしょうか？

竹腰氏：大分で生まれたのですが、中学二年の夏大連へ行き、そこで初めて体操の時間にやらされた。その時ルールを知らず、手を使いおこられたが、何故おこられるのかもわからなかった。体操の教師が「英国がナポレオンに勝ったのは、イートン・ハーローのフットボールのせいだ」としきりにフトドボールをやらせた。

大連中は選手制度がなく、対外試合は禁ぜられていた。ヨーロッパの商社の人達のチームとだけ試合することが許されていた。

教師に「君達はドリブルばかりでやたらにキックしてるが、パスしなればだめだ。」といわれたが、パスとは何かわからなかった。後日バスケットボールをやってはじめてパスとは渡しながらやるものだとなった。当時サッカーシューズはだれもはいていず、皆編み上げ靴で、正確な蹴り方もしらなかった。ただドリブルだけはその時かなりうまくなったと思う。

山口高校に入る前にはサッカーが大好きになってました。

山口高等学校時代については……

竹腰氏：大正十一年に入学したのですが、十二年の正月に全国高等学校大会がはじまった。これは野津さんの功績です。その東京の大会に出るか、それとも前年まけている松江との定期戦をやるかでもめた。

*両方とも行うことはできなかったのですか？

竹腰：お金もなかったし交通も不便で、秋に定期戦をやり正月には東京の大会に出るといふことはとんでもなかった。結局東京へ行くことになり、一〇校でトーナメントの末、優勝戦で早稲田高等学院に負けました。三年の時も決勝で松山に四―三で敗れ、高校の時僕は優勝したことないです。

*ポジションは？

竹腰：ズーと左のインナーです。左足で蹴れるのがそりいず、上級生が左のウイングやハーフ等は一年生にやらせたわけです。二年の時“Complete Association Footballer”と

いう本、ボジション別の動き方など書いてある、これを野津さんから借り、皆で少しづつ分担をきめ、訳しながら読み研究した。いわば洋学事始みたいなものです。

中里介山の「大菩薩峠」を読んだ時は、剣気の感じられる主人公に感心し、これがサッカーでもできないかと考えた。そこで、ボールを見ずに操作できるように、目隠してやるとバランスくすすので、星明りの下で練習した。だからボール扱いには自信があつたし、強いシュートはできなかつたが、はずしてのシュートはうまかつたです。

この頃は何を讀んでもすべてサッカーに結びつけてしまつた。

* 大学時代のことをお聞きしたいのですが *

竹腰：大正十四年薬学に入つたが、春極東大会の日本代表予選で東大に勝つた大阪クラブに補強されて、船でマニラの大会へ行つた。一ヶ月半近く休んだために実験が遅れ、夏休み半分以上返上して化学実験をやつた。でもいくらやつてもとても追いつかない。秋にリーグ戦の練習で実験をさぼつてまたおくれってしまった。朝比奈先生（薬学の大家）が私と東（東龍太郎の末弟、名ピッチャー）の二人を呼びつけ、「お前ら学校に出ないんならやめろ」といわれ、私は「やめます」といつてやめた。東は「兄に相談して決めます。」と言ひ、一年余分にやり、結局野球で忙しく二年薬学をやつてやめ、僕が移つた農業経済が一

番暇だということがわかつて農経へやつてきた。

* 部員は何人ぐらいでしたか？ *

竹腰：二十二〜三人いた。皆いそがしく、練習に出たのは十六〜七人で二十人をこえることはなかつた。紅白戦さえできなかった。

* どのような練習をしてたのですか？ *

竹腰：ただドリブル・パスだけやつてはだめだということで試合形式の練習をよくやつた。十一人の時はF Wの後にハーフがいない形で、十六〜七人いるとハーフを攻める側の後に二人つけ、守る側は五人で守つた。

* 試合数が少なかつたようですが *

竹腰：当時大学でサッカーをやるところが少なかつた。練習試合は青山師、豊島師と年に二〜三回するだけで、あとは練習だった。ボールをとつてすぐ攻撃に移る形をつくるのに少しまづいが、それ以外には練習試合と試合形式の練習とあまり違いがない。

* 京大との喧嘩わかれについて *

竹腰：東大はけしからんと京大は言つてるようだが、京都へ行つてみると、定期戦の日程は運動会同士で決つてるのに、京大は練習しないから九〇分はこまる、七〇分又は六〇分で行うと言ひ。そんな失礼なこと言ひならやめちまえということになり……

* オフサイドルール改正の問題は？ *

竹腰：世界としては大正十四年に改正していた。日本は通知がないし、それを翻訳し印刷し出すには一年ぐらいかかる。

京都に行くとおフサイド規則をどうするということになり、東大は国内で採用してないのでそれでやることないと言った。すると東大は「東大は京大のあれを恐れているのでは」という。それならそれでいいのだが、九〇分やることになってくるのに自分達は練習してないから九〇分はやれないという。そんな失礼なこと言うのならやめてしまえとなった。

* 卒業されてからは？ *

竹腰：昭和五年に極東大会があり、当時東大が連勝してた頃で東大中心でやるのが決っていた。農業経済をやったので、卒業後帝国農会に勤めた。今の農協のようなものであった。東大に練習に行くといつて、昼からしょっちゅう休んだりしていた。国家のためということで農会もやらせてくれた。

この大会が自分が本場にプレーした最後で一番印象に残っている。何をやったかは憶えてないが、獅子奮迅というか死にももの狂いでやったことをおぼえている。

* ポジションは？ *

竹腰：C Hです。ワイトンという名手がF Wで、彼をどうしてもとめてやろうと思った。

昭和二年に上海大会があったが、その時も予選に勝った早大

に左インナーとして加わった。中国には負けたがフィリピンに二一で勝ち、決勝点を入れた。これが日本の公式国際試合の初勝利だ。点を入れた時は非常に嬉しかったが、大会自体はそう印象に残っていない。

* オリンピックは？ *

竹腰：ベルリンで選手をやろうかコーチ専任になるかで迷い、一応選手兼コーチで行った。向うでやっていると自分でもやらんほうがよさそうにみえるのでコーチ専任となった。四年前のロスアンゼルス大会にあたら是非やろうと思つた。節制もし、酒タバコも飲まずにやつた。ロス大会のサッカー種目が消え、十一年までまつのはオリンピック選手ではやれないなと自分で思い、節制することをやめて酒を飲みだした。

* ベルリンで三バックを習つたそうですが *

竹腰：それまでも原則は知つてたが(C Hが下る)ベルリン滞在の一ヶ月でマスターし帰つてからは三バック制となった。

* 現役時代の得点はどれくらいですか？ *

竹腰：何点入れたかはおぼえてない。だけど僕の得点の半はヘッドイングです。背は大きくなかったがジャンプが利いた。

* 足の方は？ *

竹腰：右足が利き足です。上級生に左インナーをやらされたのだけれど、シュートを右でうつのにはよかった。フィリピン

戦の決勝点も右からチョロチョロときたのを先に出て右足でひっかけたものです。速さはそう速くないです。十二秒そこそこだった。

* 審判もやられたそうですが…*

竹腰：…僕はインターナショナルレフリーで正式試合やったはじめだよ。メルボルンでインドネシア対ソ連戦を吹いた。○対○でタイムアップ寸前インドネシアがペナルティ内でスライディングをした。笛を吹いたがPKにしたら必ず一点入る。かわいそうになってラインズマンに聞きに行った。その当時ハンガリー動乱があつて反ソの雰囲気があり、ニュージールランドのその線審は「今のはソ連が先にハンドした。」という。だがハンドするようなボールではなかった。自分の判定ミスとしてその場でトスさせた。その試合は結局○ー○となつたが、ソ連はこの大会で優勝した。判定の変更をやつたので帰国後直ちに辞表を出した。それが最初にして最後のインターナショナルレフリーだ。

* 近頃のサッカーの印象は？*

竹腰：…此頃の技術をみてうまくなつたのは胸のトラップだけだ。昔は胸でおとすだけだった。ボールをとめるのは足でやるものと思つてた。クラマーがきて初めて教えてもらった。これだけは「ぬかつたな」と思つた。

シュートなら川本（泰三）や東大の手島の方が釜本よりもう

まかつた。強さは釜本の方が強い、が正確さでも川本の方が上だ。手島はペナルティエリアでボールをもらつたと「入つた入つた」と言つて、それからシュートした。（笑）

現在は技術は進んだはずだけど集中力は劣っている。戦術的理解も足りない。法政大学のようなバカなブレイ（四十八年十一月の対東大戦）をしているようでは…あのよなチームが一位になつてるようではだめだ。だから全日本もたいしたことない。

* 現在の東大をどう見られますか？*

竹腰：…去年は何も言わないつもりで練習や試合をよく見たが、監督にも何もいわなかつた。終わり近くなつて、どうしようもないので一部の者に注意した。言うならもっと早くから言えばよかつた。先輩が応援に来て、ゲーム中に「○○走れ！」といつてもその時は遅い。次元の低いところで激励したり応援するくらいなら言わない方がよいと思つて…

* 優勝することは可能でしょうか？*

竹腰：…二部で勝つことはできる。昔連勝してたころと比べても頭は良い。ただ技術がまずい、できてない。集中して練習しなければ。ある程度教をかけてやることも必要だ。

* このごろは練習を見て奴鳴つて下さる方がいないのですが…*

竹腰：…どなつてくれという前にまず自分からきたえるつもりでやらねば。現在のブレイヤーは基礎はできてても応用がだめだ。

何十年やよれば経験でできるが… 今の選手は工夫してないの
ではと思う。

ひいき目もあるけど今のチームはまあまあやってるなと思う
でもそれだけでは勝てない。もう少し人間がはげしく、シビア
にしなければ優勝できない。それは練習で養う。

具体的には？

竹腰：自分の得意技を身につける。技術的には高くないから
こそ得意技をつくり、これと違ってやればそれに時間をかける
こともできる。また、マークの相手から離れるのが常識だが反
対に相手にくっついてしまう。それを東大の得意技にするのも
よい。それには一〇m先の味方に正確にパスできるといった技
術が必要だ。

相手の特徴を出させないようにやるのが頭のよいことだよ！

ノコさんは最後にこれが僕のサッカーの原典だよといって

「技干進」という言葉を教えて下さった。中学時代、漢文の時
間に習ったもので「技術を通して精神を鍛える」とのことであ
った。この言葉と、当時大連中にいた剣道の達人の技術を見て、
ノコさんは蹴球とはいかにあるべきかを考えたそうである。そ
れゆえに高校時代先輩に「ガムシャラにやれ」といわれても、
技術の習得が大切と思い、これを研究し進歩させなければなら
ないと言いかつ実行されたそうである。

六十九才の誕生日をむかえた現在も、「まだ学生よりは正確
に蹴れるよ。」と非常に元気でおられるのも、当時の厳しい練
習の賜物なのであろう。

(このインタビューは二月十五日竹腰氏宅にておこなわれた。)

何故優勝しな

昭和十二年卒 大内 弘

私も優勝しなかった。昭和九年に入部した時は、東大サッカ
ー部創立以来初めて最下位になり、二部陥落決定戦を行うこと
になった。私は一年生だったが主将代行としてチームの再建を
はかり、退部した優秀選手に再び入部してもらい、漸く最下位
決定戦に大勝して一部に残ることが出来た。次の年主将になっ
て〇から(文字通り部員数〇であった)出発、余りにも華やか
だった歴史に比べ、惨めになった部に学校の成績をぎせいにし
て(即ちこれは就職を困難にすることを意味する)選手生活を
する人が少なくなつたからである。幸い自分の中学の後輩が多数
入学してきたので、漸くチームらしくなつたがそれは夏の合宿
からであった。一年の時は練習に出てくる人は十二・三名、ハ
ーフマッチが出来なかつた。それが十五・六名から多い時は十

七七八名練習に参加してくれるようになった。これが当時の私には涙が出る程有難かった。今でも補欠のまま三年間練習に出してくれた人達には感謝の意を続けている。それでも当時の記録を見ると春の試合に出たメンバーと秋のメンバーが全員入れかわっている。私は中学の後輩の面倒をよく見ていたおかげで、優秀な後輩をサッカー部に勧誘することが出来た。それで漸く部らしくなり、二部に落ちることはあるまいと確信出来たのは、やっと夏合宿からであった。そのシーズンにはあわや優勝かと思われたが、早大に惜敗して二位に終わった。何故こうも苦しいのか。それは学校制度のためである。私立大学は旧制中学から入学して六年間リーグ戦に出られるのに、東大は三年間しかない。加えて東大の入学試験が難しくなっていて、選手の供給源である旧制高校からの選手の入学が難しくなったことだ。私大の六年間に対抗してせめて四年間はほしいと心の底から思った。(尤東大に入る前旧制一高の三年間のチームが一部に所属して早稲田慶応東大と戦っていたのは更に奇蹟のように思われるが、これは高校のことであるから省く。)

それがどうだろう。現在是在学期間は何処も同じ四年、受験は全国の何校からでも出来る。それにも拘らず東大は一部から二部に落ちた。そうして中学後輩の須賀君が監督になったので、一部に上るまで手伝ってやろうと数年間極力練習や合宿に出た。その時驚いたことは部員の数の多いこと、五十名位いたことも

ある。練習日の多いこと、グラウンドにおける諸技術が我々の時よりはるかにうまいことであった。合宿所も出来た、夏合宿も充実して行われている。(私の時は軽井沢で土を運んでグラウンド造りからやらねばならなかった。)一時小さかった背ものびて、近頃では決して他校にひけはとらない。ちょっと見た処では二部優勝はおろか、一部優勝も不可能ではないように感じられる。

それが何故優勝しない？

その原因を詳しく書く能力は現在の私にはない。時折顔を出して部の空気にふれた時は、この解決はそう困難ではないと感じた。毎年感じ、今年も感じた。それなのに成績は御覧の通りだ。もう一年まとう。諸君には自分達でこの方法を見つけ出すことが出来ると思われるからだ。

付記

此処にこの紙上をかりて改めて、一度退部しながら再入部して後輩である私を援助してくれた何人かの先輩、惨めな状態にあった部に入部して、私と一緒に戦ってくれた同輩後輩に此処に感謝の意を表したい。最も感謝の意の強いのは三年間公式の試合には出られないが、最後まで私を助けてくれた何人かの補欠をつとめてくれた人達である。

東大の三年間は全く辛かった。私の人生観はそれで変ってし

まった。現在しがない画かきでいるその原因の一つである。私ももう一年のばそうかと考えた。それは近頃の諸君のようにサッカーをやるためにのばすのではなく、とにかくサッカーからはなれて休みたかったのだ。当時の東大の大部分の主将が一年のばした。確か十二人中十人までのばしたと思う。それで私は三年で卒業しようと思った。主将をやれば落第するという悪例はのこすべきでないと考えたからだ。全く授業に出なかつたので教室が何処にあるかも知らなかつた。一月から三月まで図書館通いをしてどうにか卒業した。現在は全く事情が違ふようだ。サッカーをやるために留年する人がかなりある。私は原則として賛成しない。それは新主将新チームのために必ずしもよい影響を齎らさないからだ。それから打算的な計算、それは一年のばすとその人の収入が千万円近く減るといふことだ。普通は一年留年すれば最初の一年間のサラリーをぎせいにするだけと思いがちだが、実はそれに会社をやめる最終の一年間の収入がへるといふことだ。勤続年数が一年へるから退職金も減り、合計すれば略々千万円になる。これをぎせいにして見合うだけのメリットがあるか。あるかもしれない。あるというやり方もあると思う。それには余程の決心が必要である。

キチガイの必要性

昭和十四年卒 小林孝正

サッカーなんて見たこともない九州は唐津の在の田舎の小学校から、広島府の中学に入って一カ月も経つたらすっかりサッカーのトリコになつてしまつた。正式のボールではなく特別製のゴムボール(テニスボールの二倍位)をズツクの校内靴で蹴るのだが、少し馴れて何とかコントロールできるよになつたら、面白くて面白くて、毎朝一時間近く早く登校して、同じような仲間と夢中になつて蹴つて走り廻るよになつた。丁度大正から昭和になつた年である。既に五〇年近く経つ。

中学でも結構正式の試合もやつたけど、本格的に打ち込んだのは熊本の五高に入つてから。三年間、教室には許容限度ギリギリの出席率で、欠席日数での落第は免れるという有様だったが、グラウンドには完全な皆勤、という熱中ぶりだった。私はずつとバックだったが、東大に入つたら、そのバック陣には、ベルリンオリンピック代表チームのO・H種田君や、藤岡、菊池の両巨漢はじめ錚々たる面々が居て、いささかスマート過ぎた(?)私の入り込む余地はなかつた。しかしここでも三年間、ケガで若干休んだ以外は殆ど皆勤。球拾いもやつたし、ハーフマツチではレギュラーの諸君のお手伝いを結構やつた。五高以

来の友人連中から「お前も随分好きだなあ」と呆れられたものである。

十四年に卒業の時、一年のときの主将大内さんに誘われて、既に決っていた某社をスッポかして日立に入り、当時実業団ではトップクラスだった茨城日立のチームで走り廻ったのだが、サッカーやるために日立に入ったようなもの。戦後も二年近くレギュラーで蹴っていた。

その後、もう二〇年前になるが、突如十二指腸が破れてひどい腹膜炎となり、胃袋も大半除去という大手術をし、二年間療養に専念した頃には、「あと五年も生きられるかな」と毎日が不安で、サッカーのこと考えることなんてあり得なかつた。

ところが、だんだん年を経る毎にかえって健康というか元気になり、「クヨクヨしてはじまらない」とばかり酒も飲みはじめ、五高サッカーのOBの毎年二、三回はある集りでも結構昔以上に飲めるようになった。そればかりでなく、「飲む会ばかりじゃ芸がない。蹴る会をやろう。チャンとユニフォーム作って紅白試合やろうじゃないか」と衆議一決して、三年前から紅白試合やら他の高校OBとの交歓試合をやったりしてるが、それにも欠かさず出て、二五分ハーフ、計五〇分の試合もそうへこたれずに走り廻り、蹴っている。これが一つのキッカケになってOBインターハイが誕生し、来る三月一六日に十五校で第一回大会が行われることになった（この闘魂が出る頃は

既に終っているはず）。二月七日にはその前夜祭が行われたが、集る者一四〇名、盛会だった。

サッカーきちがいでないことこんなことやれないだろうと思うし、私自身は前からキチガイを自認してたけど、このOBインターハイは話が出てから一カ月余でアッという間に本決りになったところなど、どこにもキチガイがイッパイいるものだと思めて感心してる次第。このたくさんのキチガイ達が、往年、東大、京大その他の諸帝大のサッカーをかなり高いレベルに維持した原動力だった。

とりとめなく書き飛ばして来たけど、実は、このキチガイの必要さを訴えたかったので一筆執ったわけ。このキチガイのすべてが名選手でなかつたことは当然だが、しかしチームにとっては皆不可欠の人達だったはず。レギュラークラスに優れた人材が必要なのは当然だが、それだけではチームは強くなれない。レギュラーになれなくてもほんとうにサッカーの好きなのがたくさんチームに居れば大きなプラスになることは明白。ここ数年の早大ラグビーの強さはそれを証明する典型だろう。

編集委員の要請された「現役へのアドバイス」になるかどうか？でも、全然役に立たない話でもないと思うので、敢て書かせていただいた次第。

今年の東大チームの躍進を祈ります。

旧制サッカー・インターハイ

と東大ア式蹴球部

昭和二十年卒 高月 東一

業務上の打合せや、宴席などで、ややかしこまって応待していた相手が、話のはずみで、旧制サッカー・インターハイの間だったとわかると急に話はずみ、旧知のごとき親しさがわき、別れぎわに、「また会いましょう…」などといつて手を握り合ったりする。旧制サッカー・インターハイのなにかが、われわれをそうさせるのだろうか。

ところで、来る三月十六日にサッカー・OB・インターハイなるものが、旧制高校十五校のサッカーOB連によって第一回の大会が開かれようとしている。ご存知の方も多いと思うが、旧制サッカー・インターハイは、今を去る五〇年前の大正十二年、われが大先輩の野津さんや新田さんが東京帝大の学生の頃、全国高等学校蹴球選手権大会という正式名称で東京帝大主催による第一回大会が開かれた。以後京都帝大と毎年交互主催で、昭和二十三年旧制高校がなくなる直前まで続いた。

（注）昭和二年大正天皇崩御、昭和一八二〇年第二次大戦中の計四年中止したが、サッカーOB・インターハイを計画している連中は、最も若い人で四十五才ぐらい、大半は五

〇代、六〇代で、東大の現役諸君からみれば、正に親父と爺さんのサッカー試合である。関係のない第三者からみれば、「年寄りの冷水もいいところ、狂人ざたじゃなからうか」と思われてもしかたないが、当事者のわれわれにとつては、極めてマジメな大行事なのである。

というのは、正式の本大会は昭和二十三年で終ったが、旧制高校OB連の間では、二校間、あるいは三校間の対校戦という形で試合を続けてきたものがかなりあり、彼等にとつては四半世紀たった今も、サッカー・インターハイは心の中で生きているのである。現に私の出身校旧制四高（金沢）は、往時の好敵手旧制六高（岡山）と、昭和三〇年頃から対校戦を初め、最近では、金沢と岡山の地で毎年交互に行っている。過去の対戦成績は三勝四敗四引分けて、残念ながらわが方は六高さんに一勝の貸がある。今年、金沢で行われる番なので、六高北進軍

（四高は南下軍という）を北陸の地に迎えて貸を取りもどす覚悟で、全国の四高OB連は張切っている。このような状況下で、昨年秋頃から全国的な、サッカー・OB・インターハイの話がもち上り、実行委員による準備会を重ねた結果、来る三月十六日第一回大会を行うことになったが、当日馳せ参じるOB達は、おそらく数百人、今や五十肩だの、ギックリ腰だのと人並な老人の弱音など吐いている場合ではなく、ランニングや体操などの早朝トレーニングで大会に備えねばならぬ事態になってきた

わけである。

話は変わるが、現役諸君は、年配のOBから、かつて東大が強かった話を耳にタコができるほど聞かされていることであろう。事実、東大は、昭和二十五年頃までは、早大、慶応と並んで大学サッカーの三羽鳥というか、少くとも「関東の雄」であった。私の入学した時は、戦雲日増に厳しくなる時代で、文科系の学生の比率の高い私立大学は、学徒出陣で兵隊にとられる者が多かったせいもあってか、東大は相対的にめづる強かった。サッカーだけでなく、昭和十七年には、バスケット・ボールやバレーもリーグ戦に優勝して大学当局が、合同祝賀会を開いていた記憶がある。私の在学中、負けた試合の記憶はただ一回、それは、私の一年生の時、明治神宮大会（現在の日本サッカー選手権に当る）の優勝戦で早大とシーソー・ゲームのすえ、三対四で負けたが、その結果、頭を丸坊主にして出直せということで、せつかく大学生らしく延びた髪を、切らされた。

また、初めて出してもらった千葉医大（現千葉大）戦で、竹腰監督から試合前に「今日の相手は八〇〇で勝てる相手だ」という指示があったが、五〇〇で終った。おそらくヤレヤレという顔つきでダッグアウトに帰って来たのだろう。「〇一三で負けてニヤニヤしている奴があるが、試合前の私の指示をどこに聞いていたのか」ときつい説教をされたことを昨日のごとく思い出される。

ともあれ、往時東大ア式蹴球部が強かったのは、その基盤に、旧制高校によるサッカー・インターハイが存在していたことが、極めて大きな要因といえよう。記録によると、第一回の参加校は八校にしかすぎなかったが、年とともに参加校も増え、試合内容も充実し、最盛期には、当時の旧制高校の大半ともいえる二十七校が参加したが、このインターハイの発展とともに、東大、京大のサッカーも次第に強力なものとなったからである。

それにつけても、大正十二年の昔、一学生にすぎなかった新田野津先輩らが、学校当局に働きかけ、サッカー・インターハイの開催を行った達見には、今さらながら敬服するほかはない。

ひるがえって、現在の東大ア式蹴球部の置かれている状況をみると、学制改革によってかつての東大予備軍的旧制高校はすでになく、一方サッカー技術の一般的水準は、二〇年前のそれとは比較にならぬぐらい向上している。しかも、東大入試の難関は、現在の全国高校サッカー大会でのハリキリ・ボーイ連には、ほとんど無縁の存在になりかけている。

そこで多くの先輩達が、「かつての夢ももう一度!!」と陰ながらいろいろと応援するけれど、また部員の数では盛大（注）昭和一〇年代の二・三倍）であっても、率直にいって、現状で一部に復帰し、さらに一部リーグで優勝などということは、失礼な言い方だが、「夢のまた夢」であるように思われてしまうがな。

もちろん目標達成には、去年よりは今年、今年よりは来年といった地道な実績の積み重ねも必要であろう。しかし一方では「東大サッカー部を強力にするにはどうすればよいか」の命題に対して、思い切った発想の転換が必要なのではあるまいか。

その発想転換の主役は誰か。他ならぬ現役諸君であり、それを生みだすものは、諸君のフレッシュな頭脳と情熱と若さあふれる行動力である。――半世紀前の大先輩達が、インター・ハイを思いつき、それを実現させた時のように。

迷 監督 奮 戦 記

三十八年度主将 安 達 二 郎

今年の正月も例年のように、元日の天皇杯決勝を不精をしてテレビで楽しみました。試合内容は別にどうということはないかと思いましたが、一つだけ妙に印象に残っていることがあります。それは試合後のインタビューに現われた、優勝チームの髪の毛のごま塩のような白さです。

解説の岡野さんもこの点に触れられておりましたが、全日本チームの監督時代をふと想い出しての言葉ではないかと拝聴しました。テレビの画面にさりげなく監督稼業の苦心を語らせた

のは、さすが名解説者岡野さんだと感心しましたが、それはさておき、私がこんなことを申しあげるのも、大学時代決してまじめな部員ではなかった私が、心ならずも日本リーグ入りを目指そうというチームの「初代監督」とやらを二年ほどやって（やらされて）、ほとほとつらい想いをしたからに他なりません。大切な誌面を借りて人さまに読んでいただくような話ではありませんが、これから益々サッカーが盛んになって万一どなたかが会社のチームづくりを命ぜられないとも限りません。私のしがない経験ではありますが迷監督の奮戦記、皆様にお読みいただき何かのお役に立てたら幸いです。

昭和四十六年の春なかば、私は当時横浜市鶴見区大黒町というところで日産自動車の設計部門に働く人達の人事管理を担当し、働き盛りの忙しい毎日をごすごしておりました。

そんな或る日、突然「今日の午後、本社厚生課に来い」という伝言を受けたのです。

とりあえず行ってみると、そこには大学のサッカー部の時からの友人小川肇君を含め当社で力になりそうなサッカー関係者わずか二人と厚生課長、担当者が集まっておりました。厚生課長の言うには、「当社は野球以外にこれといった強いスポーツがない。男子従業員が殆どだし、人気のあるサッカーをこれから重点的に強化し、日本リーグ入りを目指す強力チームをつくらせてほしい」とのことでした。

そして夜はお決まりのコース。

まるでうぶな女の子が転落の道をたどるように、私も夜の銀座に誘われて、一杯二杯と飲むうちに、ついついその気分になってきて、「君頼むよ」の一声で本当にその気になってしまったものです。

翌日二日酔いの頭が醒めるにつれ、我が身のおろかさの後悔はつのであるが、そうは言っても今更「いや」と言える訳はなく、当時監督稼業の苦勞など知るすべもない私はするずると、それこそ着実に一步一步どろ沼のような世界に足を沈めていくのでした。

気持の落着いたところで私は先ず最初に、竹腰重丸先生を訪ねました。つゆ空からのぞいた太陽がまぶしい六月の頃だったと記憶しております。

先生はチームを作るにあたっての基本原則、1.人材は広くから募り、決して阙を作らぬこと。2.チームの核になる男は技術より人柄で選ぶこと。3.頭でっかちの大卒チームを作らぬこと。の三点を説かれ、その他の相談は岡野先輩ら、協会の若手役員等にするようにということで、紹介の勞をとってくださいました。

さて至極あたり前の話ですが、先ずチームを作るには選手がいなくてはなりません。幸い一人はたまたま私の中学の後輩で大学一部リーグの主将をやっていた男が協会の役員の時話で勞

せずしてみつかりましたが、あと一人はどうしても欲しいのです。かといって竹腰先生から話を伺った手前、誰でもよいという訳にはいかず、八方手をつくしてさがしたところ、矢張り大学一部リーグで活躍していたチームの副主将のH君がまだ就職を決めないでいるという話を聞き、早速会いに行きました。

二度ほど話す内に話を通じあい、いよいよ色よい返事がもらえるかなという段になって今一つはつきりしません。どう話しても煮えきらないのです。私がつき当たった最初の関門でした。

色々話す内にふと思いつたのです。人事の勘というか、俗に言うところの「女」がいたのです。彼の白状するには彼女は高校からの同級生とやらで、彼を頼って上京し、住む下宿は申し訳け程度に離れているだけで実質的には同棲をしていたようです。そうと解いたら話は簡単。「彼女は俺が説得するから」と彼を促して車に乗せ、横浜から一路彼女の住む浜田山のアパートに向かいました。

慣れた足どりで彼女のアパートの階段をのぼる彼の後姿はそのまま二人の関係の深さを物語るようで、こっけいでもありません。やがてカーディガンをはおりながら出て来た彼女は、臆する様子などさらさらなく、何かこちらが悪いことをしているよりの錯覚を感じたほどです。

恐縮して小さくなっている彼を前に、私と彼女は駅前のあんみつ屋で、まるで母親が息子の就職先を調べるような調子で奇

妙な話しあいをしました。選手勧誘の第一号は、皮肉にも選手ならぬ選手の彼女であった訳で、その後のもろもろの苦勞を象徴するようでした。

あれやこれやでやつのことで彼女をくどき落とし、これやつと将来の二人の大卒部員がそろつたのですが、その後私は、彼と彼女の入社前の結婚式に出て、乾杯の音頭をとって、祝いたくもない結婚祝を述べさせられ、あげくの果ては、会社に無理を頼んで、会社の基準では認められない既婚者である彼女の入社のために走りまわるはめになりました。

まがりなりにも大卒がそろつたところで、次は高校の選手です。大きな旅行カバンに会社の入社案内のパンフレットをつめ込み、化粧品、セールスマンよろしく、サッカーどころを求人行脚に出かけました。重いカバンをさげて、私はまずサッカーどころ静岡に向かいました。たまたま協会の人の世話で藤枝東の選手を紹介されましたので、まずは藤枝東高校を訪ね、勧誘に成功しました。これでやつと三人になりました。まだイレブンには八名足りません。幸先のよさに気をよくして、清水東、浜名など名門校と名のつく学校を片っぱしから訪ねました。この世界の就職のルートなど何も知らない私は懲りもせず断わられても断わられても同じ口上を述べてまわりました。パンフレットがはけてカバンが大分軽くなつても、しかしながら依然として選手は見つかりません。どこへ行つても私の口上と同じ

なら、先生から返ってくる返事も同じでした。「もううちの選手は皆日本リーグなどに決まっています」かあるいは「進学希望で就職はしません」でした。職員室を辞して、ふと校庭のゴールポストを見やる時、試合に負けた時に感じるあの感傷とはまたちがう、うらさびしい孤独をひしと感じたものでした。

静岡で失敗した私は気をとりなおして今度は、神奈川、埼玉、山梨へと北上をはじめました。そんなことをくり返すうちに、いつの間にか夏もすぎようとしていました。相変わらず選手採用の目途はつきません。まだ八名も足りないのです。

国体の東北予選が山形で開かれるのを聞いたのは丁度その頃です。とるものもとりにあえず夜行で山形へ向かった私はそれこそ必死の覚悟でした。「恥も外聞もなく」とか、「形振かまわず」とかいう言葉がびつたりだったかと思えます。朝五時すぎに駅に着いてしまつた私は山形駅の待合室で、不安と期待の気持ちを胸にひたすら時間がすぎるのを待ちました。

やつと通勤で駅が混雑する頃になり、先ず私は市役所に出かけ、担当者に会つて、試合のスケジュール、各チームの宿泊先などを聞き出しました。そして駅にとつてかえすと先ず改札口に陣取り、ホテルの番頭よろしくチームの到着を待ち受け、着くや否や、先生らしき人に名刺を渡して宿への道すがら、歩きながら、名前と顔を売り込み、ついでに宿の場所を確認したのです。

四チームぐらいこんなことを繰返すと次は練習場めぐりです。それとなくさつき会った先生に近づき選手の様子など聞き出す訳です。

そして夜は夜で果物を持って宿へ差入れに行きました。なにしろ先生も生徒も日産の車は知っています、日産のサッカーなんて聞いたこともないし、また、今までにサッカーを強化するといつて選手を連れていっては中途半ばで終る会社があまりに多かつたことも手伝い、先生方はどなたも最初はすごく警戒的です。

それでもこれだけしつこくやれば先生方も見ず知らずの私に對して多少は好意的な態度を示してくれるようになります。岩手の宿を訪ねた時には顧問の先生がたまたま東大卒の方だったため、ミーティングの後、時間を作ってください、パンフレットを選手に配ってそれこそ一世一代の勧誘演説をやりました。

今はその縁で二人の部員が来ておりますが彼らがその時のことを想い出して笑うには、『東大出てメガネかけた人がサッカーやるなんて、どうせ大したことはなかんべさ。まんずやめとくべ』と皆で言っていたそうです。彼らの目には、さぞかし私の姿はこっけいに写ったことでしょう。

さて朝から晩までかけずりまわり、それでもその場で決まった選手は一人もありませんでした。仕事の合間をぬってのことなので日曜の夜には帰らねばなりません。うしろ髪をひかれる

思いで山形の駅を後にしました。

しかしながらそうするうちに、下手な鉄砲も数打てば当たるのとえ通り、ぼちぼち話がつながりはじめ、年が明けて三月には、会社の養成学校卒を含めて十五名の部員がそろいました。

物置を改造して壁にくぎを打ちつけただけの即席の部室をつくり、真新しいボールとネットを買い入れ、いよいよマネージャーもコーチもない日産自動車サッカー部が発足です。昭和四十七年四月一日のことでした。

苦勞をして採用してきた選手達がその後には織りなす人間模様は実に多彩で、いつも私に新鮮な驚きと教訓を与えらるものでした。私の人生観、人間観に大きな影響を与えずにはおかないほど強烈な印象を残しました。

今にして思えばなつかしい想い出ですし、何ものにもまして貴い経験とも言えますし、しょうが、しよせん苦勞話などというものは、しらふで人に話すものではないでしょう。

実は迷監督として奮戦するのはまさしくこの後のことなのですが、最初の意気込みとは反対に、想い出すほどに醒めてきて、どうも筆が進みません。看板に偽りありというのなら、またの続きは日本リーグにでも入った時お話しするということでお許しいただきたい思います。書き出しはこんな風に……『チームができて最初の晩に、会社のクラブで簡単な夕食を食べること

になつた。いざ食べる段になつて高校卒の若い選手がもじもじしながらこちらを見ている。どうしたのかと聞いてみると、「これどうやって食うか解んねえす」とうつぶさながらつぶやいた。卓にならんでいる一対のナイフとフォークをどう使つてよいか解らぬらしい。はしを持ってこさせて「はしで食つてもいいぞ」といつた時の若い選手のうれしそうな顔を今でも忘れない。私が最初におしえたことはサッカーのことはなくナイフとフォークの使い方であつた。実に迷監督にふさわしい門出であつた……。」

昭和四十一年度主将

嶋 田 厚 二

サッカー部を出たのはついこの間のように思っていたのだが、もう八年にもなる。

サッカー部のマネージャー氏からの電話で何か書けということであるので、現役の皆さんに役に立つか立たないかは別として思いついたことを述べてみる。

我々は何故サッカーをやつたのだろう。答えは簡単である。

面白いからである。勝つとより面白い。勝つ味を覚えるとなお

面白くなる。どんなスポーツでも同じと思うが負けて面白いスポーツなどないであろう。勝負に勝ちたい為に努力する。それが練習である。体力をつける為に練習するのではない、体力をつけて勝負に勝つ為に練習するのである。スポーツに上達し勝負に勝つ為に練習するのである。

スポーツを体力をつける為だとか精神力をつける為に行うという人がいるが、体力というものは精神力に裏づけられるものであり、疲労と闘わず、疲労を意志の力で克服しない限り体力をつけることは出来ない。精神力などは、先天的なものであるから精神的に強いものはほとんど体力がついて、自信につながり、ますます強くなってゆく。

即ち、体力というものにはかなり先天的なものがあるということである。

いま述べた先天的な精神力が弱いときにはどうしたらよいのであろうか。それは、練習には出来るだけ試合形式を取り入れると良い。また練習自体を出来るだけリレー、団体対抗の形式で行うとよい。ということは人は誰でも多かれ少なかれ勝負に負けると悔しいと感じるものである。この気持を体力づくりにも利用するとよい。人は単に疲労と戦いながら体力をつけるより勝負をしながら勝とうとして体力をつける方が容易に行うことが出来るであろう。

さて四年間のサッカー部での生活を振り返って一番残念に思

うことは夏の過ごし方が悪かったということである。

即ち春は慶応とか教育大といった一部校に勝つのに、秋になるとリーグ戦で思うような成果を挙げることが出来なかつたことである。

これは夏のトレーニングに問題があると思われる。夏の炎天下にトレーニングを行うことは技術の向上、体力の向上、精神力の向上等には大きな力を貸さない。それどころかかえって体力を消耗させて、その消耗を回復出来ないまま秋のリーグ戦に入ってしまったことに原因があると思われる。

確かに体力をつける為には、ある程度疲れるところ迄やらなければならぬし、身体はこの疲労に打勝とうとして段々強くなり持久力も増してくる。しかし疲労に打勝とうという意志がないかぎり持久力をつけることは出来ない。

だが体力をつける為にトレーニングすることと、体力を消耗させることは別である。

つまり炎天下での練習を避けて、朝或は夕方涼しい時にトレーニングを行うべきであった。もっともコロンブスと卵みたいなもので当然のことであるが、自分を条件の悪い所で鍛えることによつてトレーニングに対する自己満足を得ていたのかもしれない。

グラウンドにほとんど顔出しもせず試合も応援に行かず悪い。Bであるが、新聞の片隅に東大が勝っている記事が載るのを毎

日楽しみにしているのは事実である。「スポーツがスポーツとして成立し得る条件は、それ自身で完結した行為だということ」と誰かが書いていたが、サッカーを十分楽しんで下さい。とりとめもなく思いついたことを書いたので精神分裂ぎみな文章かもしれない。現役の皆さんに役立てば幸いである。

現役諸君へ

昭和四十四年卒 コーチ 北川 薫

「根性」を辞書によれば「本来の性質」とある。ということヒトであれば誰れでも持っているものといえる。しかしながらスポーツの世界のみならず、ヒトの営みの全てにわたって根性の有無が問題にされる。おかしな事である、誰れにでも根性はあるのだから。

私の師、故猪飼道夫教授は「根性」は脳の中でも発生的には古い部分である旧皮質に座す事を指摘している。即ち、根性は知とか理を司る新皮質によつて制御されているのである。では、「根性がある」とはどういうことであろうか。私はどんな状況にあつても冷静に「根性」を押し通す意志の力、と考えている。東大生であるサッカー部員諸君はどうであろう。私は、サッカー

一部員に限らず東大生は「根性のある人」と考えている。我が国で最も難しいといわれている東大の入学試験に合格した事実を私は評価する。大部分の東大生はそうした受験準備期間中では、時には高慢になり、時には卑屈になり落胆し、ややもすれば崩れそうになる自身の気持を東大合格という目標に向けて意志の力で自分自身を鞭打った事と思う。そうした状況下で培われた根性は受験の際のみで発揮され尽し、終焉してしまつたとは考えられない。根性は不変であり、それは燃えつきるものではない。諸君は根性を発揮する術を学んだのである。

根性が発揮される場合は二つあると考えられる。第一は火事場の馬鹿力である。我と我が身を忘れ、理と知の抑制がはずれ、ヒトそのものの持つ力がむき出しに発揮される場合である。第二は状況を見定め、最善の道を求め意志の力で根性を集中させることである。試合中に押しに押されガムシャラにやつて危機を脱出した、というのは第一の場合である。危機を脱出できたのは、運がよかつただけであり、切り抜けたあとに残るのは虚脱状態であり、とても積極的攻撃に結びつくものではない。こうしたむき出しの根性は長続きしないだけでなく、意志の制御下にならないため空転するばかりである。ましてや十一人の根性が一つにまとまるわけがない。諸君達が受験準備中に体得した「根性」は第一の根性ではなく、第二の根性であるはずだ。本を説き、人の話を聞くのも合格という目標に向けて身心ともに準備

をしていればこそ理解し得たわけであろう。我々のBが口を極めて話をしても肝心なのは諸君のサッカーへの集中度である。周囲の期は熟している。あとは諸君たち自身の問題である。もう一度サッカーについて納得できるよう自省してもらいたい。

無 題

昭和四十六年度主将 黒 沢 秀 樹

気がついてみたら、もう一〇年もサッカーと付き合つてきたのだ、と思つたのは何時のことだつたらうか、僕にとつてサッカーとは何か、と問い続けているうちに時間が経つた……などと「闘魂」に書きたいなあ、と子供の頃から思つていた。

試合で敗れても、夢の中ではタイムアップにはまだ時間が残つていた。夢の中の試合は実に苦しかった。殆んど人の居ない電車の中で、ボールを蹴つたつもりのに足に驚かされて目覚め、妙に極まりの悪い思いをしたのは高校生のころだった。現実の試合は九〇分で終るからまだ楽だった。もっとも九〇分ではなかなか終らなかつた試合もあった。ロスタイムは意外と長い。朝鮮大に勝つたとき、それに京大戦後西へ転戦していつて広商大に勝つた時である。二試合ともスコアは三―一でダメ押し点

を入れたとき試合が終了した。

広島では結局予定の列車に乗り遅れ、後から来た特急の通路に座ることになったが、清々しかつた。そしてその遠征の前後で膨大な量の物語が蓄えられた。

どうしても一部に復帰したい、いや一部リーグのチームと関東リーグで覇権を争ってみたいといつも思っていた。試合に負けた時の腹立たしさはそのことに繁っていた（といっても「少年ジャンプ」でもネタ扱いをしてくれまい）。

僕は一〇〇mを一秒で走れない（笑うことなかれ、僕を知る諸兄よ、百歩譲って一二秒としてもよいのです）。そして彼だつて、僕と五〇歩一〇〇歩で、追い風があつても、一秒の壁を破れないのだ。風が強すぎればツンノメルだけだ。そう思っていた。今も苦々しくもそう思っている。

集団というものは多かれ少なかれ狂気というものを持つ宿命にある、と誰かが言っていた。僕は狂気が嫌いだつた。しかし、じつさい狂気も正気も区別がつかなくなつた。今もそうだと思つて、僕が欲していたのは、マサニその狂気だつたらしい。否、僕は狂つていたらしい。けれどクルイジニデキナカッタことは確かである。

どんな画家でも死後五〇年経たないと展示されないというルブル美術館に、ひそかに自分の絵を持ち込んで、大勢の人に鑑賞させたと自称するイタリア男の話が新聞に載っていた。あ

まり関係ないけれど、東大サッカー部が一部リーグで戦い、新聞にも載つたら、僕もおろおろとウロタエルだろうなあ、な

Jan. 1975 from Sapporo with love.

サッカー——私を駆り立てるもの

中根雅子

私が東大チームのサッカーを見始めるようになってもうまる三年になる。三年と言えば長いようだけど、私にとっては決して長くは感じられない。冬休みを除いて一年中ほとんどといていい程私は毎日サッカーに明け暮れた。

私が彼らのサッカーを見るようになったのは家が大学に近いせいでもある。なにしろ、急いでグラウンドに行くのに五分もあれば十分な所に家があるのだから始末が悪い。そういう理由で毎日のように彼らの練習を見るため、グラウンドに行った。チームを応援するきっかけには家が近いというこの他にいくつもあるが、何んといつても二つの試合に勝つたことが私を決定づけた。この両試合は、それまで練習しか見ていない私にとって初めて見た彼らの試合だつた。そして両試合の結果が後に京都

で行なわれた京大戦（定期戦）にまでも私を駆り立てたのである。

その年の夏はとても暑かったように記憶している。特に京都は土地柄暑さがきびしく、京大の農学部グラウンドはまるで焼きついたフライパンのように思えた。午後二時、熱したフライパンの上で試合は開始された。暑さで選手たちはかなりばて気味で、後半ようやく一点をとったという感じであったが、試合には勝てた。私はとてもうれしかった。この九〇分のために京都へ来たかいがあったと思った。それ以後私は以前にもまして彼らの練習と試合はほとんど欠かさず見に行った。日曜日にも雨の日も私はグラウンドに足を運んだ。

この年の秋のリーグ戦の成績は悪く、試合運びもいとはいいえない状態だった。おまけにリーグ戦最終日の対上智戦で負けたことが幸か不幸か下の入替戦を経験するはめになってしまった。入替戦の当日、私自身がかなり上っていたようで、気持が落着かず興奮していたせいも、試合の行なわれる場所を間違え、ついに試合を観戦することができずに終ってしまった。後に聞いた話では逆転による勝利で劇的な試合だったらしい。今でも入替戦を見逃したことだけがとっても残念に思えてならない。

そして入替戦を最後の試合として一九七二年は終ったが、不思議なものでそうした一年を振り返って見ると、いつのまにかチームに対してとても愛着を覚えるようになっていた。翌年の一

九七三年、再び駆り立てられるように私はグラウンドに行くことになった。写真を本格的に写し始めたのもこの頃からである。

写真に関心を持った理由ももちろんサッカーをとるためであった。以来試合ごとに私はシャッターを切っている。この年は全体を通してチームとしては安定していたように思われる。秋のリーグ戦も失点は少なく、初めの二試合を除いてはかなりの試合だったし、組合せ最後の対順天大戦にもし勝っていたら、前年とは反対に上の入替戦に出られたという惜しい成績に終っている。

さらに天皇杯の試合で印象に残っているのは、やはり十一月十一日の国立西ヶ丘競技場で行なわれた対法政戦である。

前半先制点を決めたのが東大だった。植村君がバックを抜いて、さらに前に出て来たキーパーをかわして全くのフリーでゴール・インした型だった。後半相手が対に持ち込みそのまま試合終了。延長戦の末PK合戦で破れたものの、満足感にあふれた選手たちの表情を今でも私は忘れられない。惜しい試合の一つであった。

まだまだ書けばきりがなく、遠征試合を含めた数々の試合、山中湖一周、検見川合宿など私には忘れられない思い出があるが、最も印象に残った七二年と七三年について少し触れることにした。今もなお、レンズを通して彼らに応援し、またチームを愛している気持ちには変りはない。これからも心から彼らに声援を送る。

はじめに

東大にサッカー部(ア式蹴球部)が創立されてから半世紀以上の年月が流れた。どのような人達が、いつ、どのようにして戦い、どのような成績をおさめたかを知るとは、今年の戦績を意味づける上で何らかの役割を果たし得るであろう。このよ
うな理由から、創刊号のあとをうけて、昭和11年以降現在までの部史をまとめた。遠藤、尾崎、吉沢等の努力により、多くの貴重な資料が集まつたが、紙面が限られているので、残念なことであるが、今回はリーグ戦を中心とした、簡略な形の部史にせざるを得なかつた。今回得られた資料をもとに、本格的な「東大ア式蹴球部史」の刊行が望まれる。
尚、過去の「闘魂」に載つた分(昭和38年と42年)は割愛した。

- 今回の資料作成にあたり、次のような文献・資料を利用した。
- 運動年鑑朝日新聞社(昭和11年〜27年(最終号))
- 体育日本(昭和11年〜18年(最終号))
- アサヒスポーツ(昭和21年〜30年(最終号))
- スポーツマガジン社(昭和34年〜35年)
- 読売スポーツ(昭和23年〜30年、34年から40年)

報知グラフ(昭和37年〜45年)

週刊産経スポーツ(昭和33年、34年)

東京スポーツ社(昭和27年〜39年)

以上の文献は、後樂園の野球体育博物館で調べた。

サッカー(サッカー協会機関誌)(昭和34年〜45年)

サッカー協会で調べた。

その他、朝日、毎日、読売新聞の各縮刷版、部室に残されていたスコアブックも参考にした。尚、大貫さん(昭和19年卒)が、所蔵されていた大変貴重な新聞のスクラップ(昭和17、18、21、24、25年)も利用させて頂いた。文中の写真は小山氏、中根女史から御貸りした。(文責 兵頭)

昭和十一年度

◎リーグ戦

10・10 東大1―2(1―1) 農大 神宮

6 4 20

橋島岡内池 森属 田部西村 C.E.G.

高築藤大菊 徳阿河松 10 1 19

はじめに

東大にサッカー部（ア式蹴球部）が創立されてから半世紀以上の年月が流れた。どのような人達が、いつ、どのようにして戦い、どのような成績をおさめたかを知ることが、今年の戦績を意味づける上で何らかの役割を果たし得るであろう。このよるを理由から、創刊号のあとをうけて、昭和11年以降現在までの部史をまとめた。遠藤、尾崎、吉沢等の努力により、多くの貴重な資料が集まつたが、紙面が限られているので、残念なところであるが、今回はリーグ戦を中心とした、簡略な形の部史にせざるを得なかつた。今回得られた資料をもとに、本格的な「東大ア式蹴球部史」の刊行が望まれる。

尚、過去の「闘魂」に載つた分（昭和38年と42年）は割愛した。

- 今回の資料作成にあたり、次のような文献・資料を利用した。
- 運動年鑑朝日新聞社（昭和11年〜27年（最終号））
 - 体育日本（昭和11年〜18年（最終号））
 - アサヒスポーツ（昭和21年〜30年（最終号））
 - スポーツマガジン社（昭和34年〜35年）
 - 読売スポーツ（昭和23年〜30年、34年から40年）

報知グラフ（昭和37年〜45年）
週刊産経スポーツ（昭和33年、34年）
東京スポーツ社（昭和27年〜39年）

以上の文献は、後楽園の野球体育博物館で調べた。

サッカー（サッカー協会機関誌）（昭和34年〜45年）

サッカー協会で調べた。

その他、朝日、毎日、読売新聞の各縮刷版、部室に残されていたスコアブックも参考にした。尚、大貫さん（昭和19年卒）が、所載されていた大変貴重な新聞のスクラップ（昭和17、18、21、24、25年）も利用させて頂いた。文中の写真は小山氏、中根女史から御貸りした。（文責 兵頭）

昭和十一年度

◎リーグ戦

10・10 東大112（111）農大 神宮

6420

橋島岡内池 田部西村 C.E.G.
高築藤大菊 森属 徳阿河松 10 1 19

10. 16 東大311 (111) 文大 神宮

橋島岡内池 田部豊西田

高築藤大菊 潮阿高河徳

4 C 7
3 F 4
21 G 14

11. 8 東大310 (210) 商大 明大和泉

橋島岡内池 田部西田

高築藤種菊 森 潮阿河徳

7 C 7
5 F 5
31 G 14

11. 14 東大015 (012) 慶大 神宮

橋田岡内池 田部西田

高種藤大菊 森 潮阿河徳

11 C 4
3 F 12
4 G 25

11. 29 東大014 (011) 早大 神宮

谷池岡 田部西村

喜菊藤 種 森 潮阿河松

7 C 4
5 F 2
11 G 18

※C・K、F・K、G・Kの記録は右側東大、左側対戦校(以下同)

〔順位〕

①早大 4勝1敗 ②慶大 3勝1分1敗

③文大 2勝1分2敗 ④東大 2勝3敗

⑤商大 2勝3敗 ⑥農大 1勝4敗

※第11回国際オリンピック大会(ベルリンオリンピック)

代表選手として、高橋(豊)、種田、竹内の3氏が選ばれている。尚、高山(英)氏は候補には入つたが、勉強のため辞退したという話が創刊号にのつている。またコーチには竹腰氏がいる。

◎ その他の主な試合

5. 20 東大112 (110) オリンピック代表

橋島岡内池 森 田部西村

高築藤大菊 柴山 徳阿河松

5 C 2
2 F 3
6 G 20

※オリンピック代表にはHBに竹内氏、FWに竹腰氏が出場している。

6. 12 東大219 オリンピック代表

橋島岡内池 森 田部西村

高築藤大菊 徳阿河松

14 C 1
1 F 3
5 G 22

※オリンピック代表にはFBに竹内氏、HBに種田氏、FWに竹腰氏が出場している。周知のように、ベルリンオリンピックでは優勝候補のスウェーデンを破り、同大会優勝のイタリアに善戦したが及ばず、ベスト8

となり相当な力を持つたチームといわれている。

昭和十二年度

◎第3回全日本選手権関東予選

○第1次 東大LB712 (511) 慶大BRB

○第2次 東大LB211 (011) 豊島サッカー

○準々決勝 東大LB910 (610) 千葉医大

○準決勝 東大LB113 (延長) 早大WMM

◎第1回関東6人制蹴球大会 5・30神宮

○第1次 東大A310 早大WMM・B

東大B011 東蹴

○第2次 東大A610 (310) 豊島

○第3次 東大A011 (010) 早大A

※6人制蹴球とは、普通と同じ広さのグラウンドで、GK1人、FB2人FW3人で対戦するもので、ノコさんの話によると体力養成などの目的で行なわれたという事である。

◎リーグ戦 10・31 神宮

10・3 東大012 (010) 文大

動岡池 田部橋槻屋
 森 属
 岩藤菊 種 奥阿高大大
 3 C 5
 2 F 4
 15 G 12
 0 PK 1

10・9 東大411 (110) 商大
 動岡池 村槻橋 田
 森 属
 岩藤菊 種 松大高 奥
 2 C 9
 6 F 9
 22 G 10

東大510 (110) 明大
 動岡池 村槻橋 辺部
 森 属
 岩藤菊 種 松大高 阿
 1 C 9
 7 F 2
 21 G 10

東大111 (111) 慶大
 動岡池 村槻橋 辺部
 森 属
 岩藤菊 種 松大高 渡阿
 4 C 7
 5 F 7
 19 G 21

東大110 (110) 早大
 動岡池 村槻橋 辺部
 森 属
 岩藤菊 種 松大高 渡阿
 7 C 6
 6 F 8
 14 G 9

〔順位〕

- ①慶大 4勝1分 ②東大 3勝1分1敗
- ③早大 3勝2敗 ④明大 2勝3敗

⑤文大 2勝3敗 ⑥商大 5敗

◎第2回朝日招待蹴球大会 (S13・1・9 甲子園南運動場)

東大215 (011) 京大

動岡池 森 村 槻橋 辺部

岩藤菊 種 松大 高渡阿

19 C 11
1 F 7
5 G 4

◎関東学生OB蹴球リーグ戦 (S13・2・20 東大球場)

東大OB 1110 (510) 青学OB

東大OB 810 (310) 明大OB

3・13 決勝戦 東大OB 311 (211) 慶大OB

昭和十三年度

◎第2回関東6人制蹴球大会 (4・26 5・1 青山師範G)

◎第2次 東大LB・A 011 文大

東大LB・B 210 日齒

東大LB・C 112 明大B

○準々決勝 東大LB・B 210 (110) MTR

○準決勝 東大LB・B 110 (110) 東京蹴球団

○決勝 東大LB・B 011 (010) (延長) 早大A

林石山 田村西

小力大 奥田河

GK FB FW

◎リーグ戦 10・2 11・27

10・8 東大311 (211) 農大 東高球場

動島山村山 田木部 槻村

岩築大田横 奥直阿大松

1 C 13
6 F 6
19 G 10

10・15 東大512 (112) 文大 神宮

動島山村山 西木部 槻村

岩築大田横 河直阿大松

6 C 4
3 F 5
18 G 11

11・5 東大410 (010) 明大 東高球場

動島山村山 田木部 槻村

岩築大田横 奥直阿大松

6 C 12
5 F 3
21 G 9

11・12 東大312 (110) 早大 神宮

動島山村池 田木部 槻村

岩築大田菊 奥直阿大松

6 C 6
3 F 6
23 G 17

11・27 東大 1 1 3 (0 1 3) 慶大 神宮

動島山村池 屬 屋木部槻村

岩築大田菊 屬 大直阿大松

8 C 8
6 F 6
14 G 17

〔順位〕

①慶大 5勝 ②東大 4勝1敗 ③早大 2勝1分2敗

④農大 1勝2分2敗 ⑤明大 1勝4敗

⑥文大 1分4敗

◎第3回朝日招待蹴球大会 (S 14・1・8 甲子園南)

東大 8 1 2 (3 1 1) 関学

動島山村池 屬 田木部槻村

岩築大田菊 屬 奥直阿大松

5 C 6 6
3 F 6 4
15 G 4

◎この年の東西対抗(第8回)に関東代表として、FB大山、

HB菊池、属、FW阿部の各氏が選ばれている。

◎練習試合 早大球場

5・7 東大 2 1 1 (2 1 0) 早大

動島山村池 屬 島木部槻村

岩築大田菊 屬 飯直阿大松

昭和十四年度

◎第3回関東6人制蹴球大会 (4・23、25、29、30 青山師範G)

第1部決勝

東大 0 B 2 1 1 (0 1 0) 東大 A

◎第5回全日本選手権

今回から新方式で、第1次戦を地方で行い、準々決勝以降を

神宮で挙行する事になつた。

○関東予選 5・13、14、21、28

東大 5 1 1 (2 1 0) 豊島サツカ

東大 2 1 0 (1 1 0) 慶大

東大 4 1 3 (2 1 2) 早大 W M W

○第2次戦 6・9、6・11 神宮

〔準々決勝〕 東大 8 1 0 (3 1 0) 大阪倶楽部

田田山石山部屋池槻馬木

吉原大力横長 大菊大有直

0 C 6 4
3 F 4
23 G 16

〔準決勝〕 東大 1 1 4 (0 1 3) 慶大 B B B

田田山石山部屋木池槻谷

吉原大力横長 大直菊大大

10 C 2
3 F 7
7 G 18

〔3、4位決定戦〕 東大315 (212) 全普成

田田山石山部 田池木槻馬

吉原大力横長 奥直菊大大

8 C 0
3 F 11
6 G 11

〔順位〕

①慶大 B R B ②早大 ③全普成 ④東大 ⑤全延禧

⑥関学 ⑦大阪倶楽部 ⑧神戸高商

◎リーグ戦 10・11・11・26

10・8 東大111 (110) 商大 東大球場

動田山石山部 屋木池槻馬

岩原大力横長 大直菊大有

1 C 9
4 F 2
14 G 7

10・14 東大311 (111) 明大 神宮

動田山石山部 馬池木槻谷

岩原大力横長 有菊直大大

0 C 4
7 F 6
21 G 7

10・29 東大810 (410) 農大 東大球場

動田山石山部 田池木間谷

岩原大力横長 奥菊直笹大

2 C 6
4 F 1
28 G 6

11・11 東大114 (012) 早大 神宮

動田山石山部 田池木間谷

4 C 4
4 F 7
16 G 24

11・18 東大115 (113) 慶大

動田山石山部 馬池木槻谷

岩原大力横長 有菊直大大

7 C 6
8 F 4
15 G 18

〔順位〕

①慶大 5勝 ②早大 3勝2敗 ③東大 2勝1分2敗

④明大 2勝3敗 ⑤商大 1勝2分2敗 ⑥農大 1分4敗

◎昭和15年1月18日の関東代表対関東大学選抜戦の選抜に原田横山、有馬、菊池の4氏が選ばれている。

昭和十五年 度

◎第4回関東6人制蹴球大会 (4・7、13、14、20、21 青山)

〔2回戦〕 東大A210 豊島クラブA

東大B311 早大B

〔3回戦〕 東大A310 湘中OB

東大B510 明大B

〔準決勝〕 東大A112 (111) 東京クラブ

東大 B 1 1 3 (1 1 2) 早大 A

〔決勝〕 東京ク 1 1 0 早大 A

※東京クラブには東大OBの竹内、高山(英)の両氏が出場している。

◎第6回全日本蹴球選手権

○関東予選 (B組) 4・27、5・5 青師 G

〔一回戦〕 東大 10 1 0 豊島ク

〔準決勝〕 東大 3 1 0 (2 1 0) 早大

〔決勝〕 東大 4 1 1 (2 1 1) 明大

○第2次戦 5・24、26

〔準々決勝〕 東大 2 1 1 (1 1 0) 関大

野田部石山 磨池木野間谷

浜原長力 横播菊直天笹大

3 C 5
4 F 4
17 G 5

〔準決勝〕 東大 1 1 2 (0 1 1) 早大 W M W

野田部石山 馬池木野間谷

浜原長力 横有菊直種笹大

4 C 2
3 F 7
17 G 8

〔3、4位決定戦〕 東大 1 1 1 (0 1 1) 全普成

(朝鮮代表)

◎リーグ戦 10・6、11・24 神宮

10・6 東大 0 1 1 (0 1 1) 商大

野田部石山 馬池木野間谷

浜原長力 横有菊直種笹大

5 C 13
4 F 4
26 G 7

10・12 東大 3 1 2 (1 1 0) 文大

野田部石山 馬池木野間谷

浜原長力 横有菊直種笹大

3 C 10
4 F 10
23 G 13

10・27 東大 6 1 1 (3 1 0) 明大

野田部石山 馬池木野間谷

浜原長力 横有菊直種笹大

2 C 13
4 F 16
22 G 5

11・9 東大 0 1 1 (0 1 1) 早大

野田部石山 馬池木野間谷

浜原長力 横有菊直種笹大

4 C 8
5 F 11
14 G 13

11・16 東大 0 1 6 (0 1 5) 慶大

野田部石山 馬池木野間谷

浜原長力 横有菊直種笹大

9 C 3
8 F 1
17 G 16

〔順位〕

- ①慶大 5勝 ②早大 3勝2敗 ③商大 3勝2敗
- ④東大 2勝3敗 ⑤文大 2勝3敗 ⑥明大 5敗

◎この年の関東代表に原田、有馬、大谷の3氏が選ばれ、3地域（関東、関西、朝鮮）對抗試合に出場。

◎その他

6・4 東大213 東亜大会代表

昭和十六年度

◎全日本選手権や朝日招待など数多くの公式戦が中止となつて

5・6。

◎リーグ戦 対文大は東大球場 他は神宮

9・28 東大010 (010) 商大

野田村瀬山馬池田谷島野

浜原木奥横有菊種大奥天

2 C 7
9 F 10
20 G 2

10・11 東大210 (010) 立教

メンバーは第一戦と同じ。

10・15 東大310 (010) 文大

メンバーは第一戦と同じ。

10・19 東大310 (210) 慶大

メンバーは第一戦と同じ。

10・25 東大212 (012) 早大

メンバーは第一戦と同じ。

〔優勝決定戦〕

11・16 東大111 (011) 早大

野田村瀬山馬池間谷島野

浜原木奥横有菊笹大奥天

6 C 5
10 F 11
12 G 18

〔順位〕

- ①東大早大3勝2分 ③慶大3勝2負 ④商大1勝2分2
- 敗 ⑤立教1勝1分1敗 ⑥文大1分4敗

◎その他

東早定期戦 6・22 東大球場

東大612 (510) 早大

4 C 6
7 F 12
13 G 11

2 C 3
8 F 2
20 G 10

2 C 9
0 F 2
31 G 10

2 C 7
6 F 10
17 G 6

サッカー部のおもいで

横山陽三 (16年卒
12卒)

—昭和十三年より十六年まで—

東大サッカー部の生活を回顧すると入学した年の昭和十三年のチームと卒業する年の昭和十六年のチームに特に強い印象がある。

東高でサッカーをしていたので入学してサッカー部に入学したのが竹腰監督菊池主将が指揮する名にし負う東大の猛練習には高校時代経験もしていなかつただけにすつかり音をあげてしまった。当時の東大は前年卒業の種田(兄)・高橋がベルリンオリンピック代表選手に加るなど永い低迷期を脱して上り坂にあつたので強豪名手がひしめき秋のリーグ戦にけとても自分など出場できる見込みがなかつたので夏の山中湖合宿は参加せず避暑に逃れていた。ところが名実ともにチームの大黒柱であるCHの菊池主将が練習中に膝を脱臼し秋のリーグ戦には出場の見込みがたなくなり急遽召集がかかつてきた。私はあこがれの「帝大」のユニフォームを着て神宮競技場(今の国立競技場)で試合ができるかも知れない期待感を抱いて合宿に参加した。菊池主将は杖をつかなければ歩けない状態であつたので秋のリーグ戦に願がかない私が出場することになつた。

当時の一部リーグは六校で早、慶、東が格段に強かつたので

箱戦以降順調に勝ち進んだが私が驚いたのは試合中私のすることが余りなかつたことである。CHである私の前には^{サッカー}保田村の両サイドハーフが交叉するように動きまわつてボールを取り、そこから洩れてきたボールを追つてプレーしようとすると築島・大山のフルバックから「ほつとけ」という声がかかり彼等からボールが前線に送られた。FWは阿部、松村、大槻、奥田、大屋、直木、などがメンバーであり、GKは岩動であつた。前期の三試合が終つた頃菊池主将の膝はピッコを引きなから走れるまでには帰快していた。

早大との試合をひかえたある日の練習のあと菊池主将が突然に「おい横山、おれと一〇〇米の競走をやろう」といつた。私は「菊池さんピッコなのに無理しなさんな」と答えたがどうしてもいうことを聞かず、又奇妙なことに上級生もスターターやゴール判定など熱心だつたので私に承諾しとメートルぐらい離すつもりで走つた。ところがピッコの主将は逆にメートルぐらい先にゴールインしてしまつた。そして彼は私に「おれの方が速いから早、慶との試合はおれができる。今までご苦労だつたが今度けスタンドで見つておれ」といつたのである。

早大との試合は誠に壮烈な試合であつたが何よりも私を驚かせたのはあれ程私が感服していた両サイドハーフ、両フルバック以上にピッコの主将が走つていたことである。そして味方の最大のピンチの場面には常に彼がいてタックルしていた。こ

の試合は3-2で東大が勝った。慶大との試合が優勝戦となり当日神宮競技場は当時サッカーの試合では珍しい一万数千の観衆の前で行なわれた。慶大は黄金時代で特に二宮、播磨、小畑、のFWは華麗な攻めで人氣の中心であり、GK津田の巧守も光るチームであつた。この試合は1-3で破れてこのシーズンは二位に終つたのである。

昭和十四年度はシーズン途中でキャプテンの交代などあり早慶に簡単に敗けた。今では考えられないことであるが当時はキャプテンは部員の意向に關係なく先輩の指名であつた。そのため任免も先輩が行なつていたのである。

昭和十五年度に私はそのキャプテンに指名された。竹腰監督の厳格な指導のもとに禁酒禁煙を忠実に実行しサッカーだけの生活をしたのけこの頃である。この兩年思い出に残る選手も多い。直木、大山、大谷は頭健だけが取り柄の私と違い天才的な選手だつた。美人薄命というのかも知れぬが直木、大山はその後胸を患い若くして死んだ。そして大谷も身体が弱かつた。鬼のような竹腰監督もすばらしいけなやかなプレーをする彼等には比較的甘かつたが私や力石や有馬などは徹底的にしぼられた。ちよつとやさつと叩いても死ぬ連中ではないと竹腰さんけ思つていたにちがいない。足の遅いのを指摘された力石は陸上競技のスパイクを買い、その裏に「竹腰重丸」と書いて「こんちくしやう、こんちくしやう」といいながら練習後走つていた。又彼には膝を痛めたとき、試合メンバーからはづされたのに当日早

くから競技場に來て試合用ユニフォームを持出して着用し頭張り、ついに出場した話が残つてゐる。しかしこの昭和十五年度も奮闘空しく早慶に破れ去つてしまつた。私は打込んでいただけにこの戦績があきらめきれず卒業を一年延ばし昭和十六年度もキャプテンに指名された。

昭和十六年は有力な新人も多く入学し、私もチーム最古参なので三年生の中心になり、又その積極的な協力を得てチームもよくまとまつた。GK浜野、FB原田、木村HB有馬、横山、奥瀬、FW大谷、菊池、種田、笹間、天野、奥島、などのメンバーであつた。篠崎、渡辺、田中など黄金時代の残党のいる慶大に勝ち、無敗同志で早大と優勝戦となつた。当時早大は加納(兄)の活躍していたチームで早大一流の粘り強い戦い振りて再度優勝戦を行つたもののいづれも同点引分となり結局両校優勝となりリーグ戦を終つたのである。

第二次世界大戦のためこの年十二月に第一回の臨時卒業があり三ヶ月余の繰り上げで卒業し軍隊に入營したのであつた。東大がリーグ戦で単独優勝したのはその翌年の昭和十七年度である。

昭和十七年度

◎春季リーグ戦 4・29～6・21 対商大は東伏見、対明大は日吉、他は神宮。学生短縮の関係上従来秋に行なわれていたものが春に繰上げて行なわれた。

4・29 東大410(310)立大

藤貫村瀬藤賀田野谷島上

近大木奥加須吉矢天奥三

1 C 11
13 F 6
42 G 1

5・16 東大510(310)商大

メンバー不明

5・31 東大214(111)明大

藤貫村瀬藤賀池島野島上

近大木奥加須菊矢天奥三

0 C 5
8 F 4
23 G 13

6・6 東大111(111)慶大

藤貫村瀬藤賀池野谷島上

近大木奥加須菊天大奥三

5 C 8
1 F 6
26 G 8

6・21 東大110(010)早大

藤貫村瀬藤賀田野谷島上

近大木奥加須種天大奥三

2 C 1
6 F 10
18 G 11

〔順位〕

- ①東大3勝1敗1分
 - ②早大3勝2敗
 - ③明大3勝2敗
 - ④慶大2勝2敗1分
 - ⑤商大立大1勝3敗1分
- 東大は昭和六年以来実に十一年振りの優勝。

◎東西学生対抗 7・4神宮

東大811(710)関学

藤貫村瀬藤賀田野谷島上

近大木奥加須種天大奥三

5 C 9
3 F 9
27 G 13
0 P 1

◎第一回関東学生選手権 11・14～23・28

リーグ戦が春に繰上げて行なわれたため、秋にはトーナメント方式による大会が開催された。参加校は13大学、3高商専の16校。

〔一回戦〕 東大311慶大

〔二回戦〕 東大411立大

〔準決勝〕 東大1310拓大

〔決勝〕 東大213(213)早大

藤貫村瀬藤賀辺村藤藤島上

近大木奥加須渡中加伊奥三

3 C 5
3 F 9
18 G 13

◎その他

この年東亜競技大会（8月）の日本代表として、奥瀬、大貫、加藤の3氏が選ばれている。

昭和十八年度

◎リーグ戦

東大7-1文理大

東大7-0立大

東大5-3慶大

東大11-2早大

東大5-0明大

〔メンバー〕

藤貫村瀬賀辺村藤藤島上

近大木奥須渡中加伊奥三

※昭和18年はプログラムなどでは一般にリーグ戦は中止となつていますが、開催されたそうで、前述のものは、大貫氏（昭和19年卒）の資料によつています。

◎関東蹴球大会 6・12、13 神宮

〔一回戦〕 全東大1-0（延長）全文理大

〔準決勝〕 全東大2-0全慶大

〔決勝〕 全東大2-1（延長）全明大

藤貫村瀬賀辺村藤藤島上

近大木奥須渡中加伊奥三

3.C 2.
9.F 5
16.G 12

※この大会終了後に文科系の学徒出陣。以後昭和20年までリーグ戦は中止。

昭和二十一年度

◎全日本選手権

○関東予選 3・21、4・6 御殿下

〔準々決勝〕 全東大5-1-1（1-1-1）マツダ

〔準決勝〕 全東大3-1-2（3-1-1）全慶大

〔決勝〕 全東大2-1-0（1-1-0）全早大

破貫藤石賀津本城山上宮

不大佐力須黒岡本遠三二

4.C 4
11.F 5
12.G 12

○本大会 5・5 御殿下

〔決勝〕 全東大6-1-2（5-1-1）神経大

破貫藤石賀津本城山上官
 不大佐力須黒岡本遠三二
 2 C 5
 3 F 1
 19 G 11

※本大会には全東大

◎第一回東京選手権 9・14〜29 御殿下

〔準々決勝〕 全東大3―1 西片町夕

〔準決勝〕 全東大9―0 MTR

〔決勝〕 全東大2―1 (0―0) 〔延長〕全早大

破賀貫石山馬本野山上官

不須大力横有岡天遠三二

8 C 15
 4 F 2
 29 G 19

◎リーグ戦 10・9 御殿下

10・16 東大11―0 (4―0) 立教

10・26 東大6―0 (5―0) 文理大

東大8―0 産大

11・10 東大2―0 (2―0) 慶大

11・17 東大0―3 (0―2) 早大

〔順位〕

①早大4勝1分 ②東大4勝1敗 ③文大3勝2敗

④慶大2勝1分2敗 ⑤産大1勝4敗 ⑥立大5敗

◎第一回国民大会 11・3 西宮

○東西一般対抗 東大LB1―2 (1―2) 関学大

渡貫賀石山馬本崎野腰上

馬大須力横有岡山天竹三

8 C 3
 4 F 4
 12 G 11

◎その他

この年の東西対抗の全関東にFB大貫、全関西にFW浅野の両氏が選ばれている。

また学生の東西対抗の関東チームにGK不破、FB高橋、HB本城、FW二宮、FW三上、FW遠山の各氏が選ばれている。

— 雑 感 —

須賀敏孝 (昭19年卒)

昭和三十九年度卒業生、安達二郎氏以下諸兄と相談して、当時の東大サッカー部に尤も相応しい名と考え付けました部誌

「闘魂」も今回で三号が出されると聞き、敢えて愚文を寄稿させて戴きます。過日主務兵頭君より昔の事や現在の学生に望む事など何かあつたら書いて下さいとの依頼を受けておりましたので、それらに添うより私達昭和十七年〜十九年頃の事を書い

てみたいと思います。

私が東大に入学したのは昭和十七年四月でした。丁度前年十二月八日第二次世界大戦勃発の時期に当つたので、在学中の二年半は真の意味の戦争中でのサッカー部生活となりました。

私は旧水高文科2類の卒業なのですが、当時、理科卒以外は徴兵延期が出来た時でもあり、種々学則を調べたりした結果、東大農学部へ願書を提出致しました。私が、農学部の方でも今迄文科卒よりの入学は例を見なかつたので特に資格試験を行い、そこでもまあ無事合格となつた訳ですが、学校の方では以後入試規則には文科卒の理科入学は認めずの項目を加えたようでした。計らずも私は東大最初にして最後の旧制文科卒の理科入学者となつたのです。余談になりましたが、こんな風にして合格発表となり、発表を見て正門より帰りかけた所、今け亡き三重(中学・高校・大学)の先輩木村氏(昭和十八年卒)に呼び止められ、合格したのなら今日午後一時より練習があるから直ぐ出るようにと、有無を云わず東大サッカー部に入れられ、その日より練習に出る羽目になつてしまつたのです。

当時のサッカー部の一年生には仲々優秀な人が多く、確か部員十七、十八人中八、九人を占めており、皆レギュラークラスであつたと記憶しています。上級生には天野、菊池、種田、大谷、木村、奥瀬、奥島、水津、武者、衣田氏他諸氏がおられ

ました。私の二年半の在学中の対戦成績はリーグ戦で明大に1-0、神宮大会で早大に1-0で惜敗した以外は負け知らずで、一部連続優勝を飾り、特にリーグ戦で早大などは13-0で敗り、東西対抗にも関学を8-1で破つたりなど、東大第二期黄金時代を誇つたものです。戦争中なるが故に、記録とか公式戦等も大々的には報道されず又サッカーそのものも今のようには盛んでなかつたので、現在の全国的サッカー熱を思う時一寸淋しい気もしないでもありません。

こんな事もありました。神宮でした東西対抗戦で私はCHをしており、動いている中一寸スタンドを見ると僅か五〇〇人足らずの観客の中ですが、一際目立つ御婦人の服装が目に入りました。その時右のPをしていた大貫君に「おい、あそこにいるメツチエシ、どんな顔か見て来いよ」と云つて、わざとタッチにボールを蹴出して大貫君にスローイングのボールを取りに行かせた事などもありました。これなど当時は観客も少く、況して女性がサッカーなど観戦に来る等とは本当に稀少価値物だつた訳で、今のようにサッカー部のマネージャーにも御婦人がおられると云うのは全く羨やましい限りです。又今と違つたと云えば、選手諸氏に就いてもそりで、昔は実に個性豊かな選手が多かつたと思います。然も各々がその個性を生き長所のみを引出し認め合いながら、立派な自覚あるサッカーマンとして、プレーを楽しんで来ました。例へば昨年末早世された三上君ですが、

足が滅法早く、左ききでウイングをやつてました。味方がピンチになると彼の前へ所謂オートブンスペースにボールを出せば、彼の脚力で抜き必ず味方を有利に導く、チャンスメーカーの役をしました。又当時のFWは殆んど旧制高校のCH(当時ロビンゲンター)の出身者が多く、特に天野、奥島、加藤、矢島氏のFWのドリブルは綺麗に相手を抜くのでなく、相手に一度ボールを当てタックルした後、抜いて行くと云う強さのFWでしたので早大、慶大等は、東大との試合を非常に厭がつてました。又早大の加納(兄)氏は左しが使えない選手で右のシュートなどは問題にならぬ程弱いので、彼をマークしていた大貫君は極端にアウトサイドカットしてライン添いに寄りますと(普通のカットの逆)彼はむきになつて更にその左を抜こうとするのですが、CHをしていた私はそのかけ引きを面白く見ていました。又我々の仲間のGK近藤君は東大史上二、三を争う名GKであつたかと思えますが、彼は遠投力がありボールを投げると常にハーフラインを越す程であつて、関学との試合でしたか彼が投げた。ボールが敵のベナルティエリア近くまで行きCFをしていた大谷氏が足で一回中継ぎして出て来た敵のGKの頭を越して得点をしたと言ふ事もありました。試合終了後近藤君は「大谷のやつ余計な事をして呉れた、あれは彼が触れなくてもワンバウンドでGKの頭を越してゴールインしたボールだ」と豪語しておりました。まだまだ個性の強い選手はおりましたが、今で云えば、かたわな

選手とされるかもしれせん。然し現在の選手を見ておきますと、余りにも次元の低い優等生選手が多過ぎて、個性ある選手が少を過ぎるように思われます。総ての基本が出来てその上個性あるプレーが出来ればこれは理想ですが、今は一般的に短所のレベルアップに力を注ぎ過ぎて、個性を伸ばす所まで手が廻らないと云つた感があります。万遍なく出来る優等生は、そのレベルが低い時は逆説的に云えば何も出来ないプレーヤーであり、ただサッカーのボールを追つてゐるに過ぎない選手であると思ひます。この点を現役諸君は、もう一度反省してみて下さい。次に戦後の思い出をりますが戦後第一回の天皇杯に優勝した事でありませう。

昭和二十三年東伏見の早大グラウンドで東大Lとして早大と東洋工業を破り優勝しました。試合後新築されたばかりのミックニ(橋田氏)の三階に竹腰氏、横山氏、有馬、三上氏等と一升ビンにする。持参でサッカーの復活と、優勝の喜びを分か合ひ乾杯しました。

その頃私は海軍より復員し、農林省に勤めておりました。突然三上君より電話を貰ひ、試合をするから出場して呉れと云う事でした。卒業後一回もボールを蹴つていないので、多少の不安はありましたが若さが技術をかべしして、鬼に角、責任を果し得たと云う喜びが、今更ながら彷彿として来ました。この胸の底から湧き上がる喜びも、今迄一途にサッカーを続けて来た

賜だどつくづく思いました。

さて、『闘魂』第二号にも書かせて貰いましたが、平凡の非凡」と云う言葉。私が一番好きで、又常に心情としている言葉なのです。常に同じ事を同じようにやり、当り前の事をやり通す。言葉を代えれば、平凡な人生を送る事でありませぬ。又困難を避けたら二倍になつて返つて来る。然し正面より立ち向つて行つたなら、半分で済んでしまふ。などと言はれる事でしょう。

これらはサッカーの練習にも、試合にも通じる事と思ひます。現役諸君、これから社会に飛び出す諸君、世界的不況下にある昨今とは申せ、君等の将来にけ約束された希望多い未来が開けている事でしょう。然し一步、歩み出した途端から又別の勉強が始まります。それには仕事上の困難あり、人事関係の醜悪、社会機構の意地悪等々諸君の今考へている希望や計画を足元から拗り数多くの壁があります。この壁で行き止まり、廻れ右をしたら、それは人生の敗残者となります。突破して生き抜くには何を以つて当るか、それは各人各様と思ひますが、私はそうした中でいつもスケールになつたのは、長年のサッカー部生活を通じて得た、一言では表現し尽せない多くの体得された信念でした。猛練習に耐えた精神、コントロールした体調、諸先輩の苦言を自己のものとしたり、友との談合の中に啓発されたり、したり、赤裸々な自己をぶつける事に依る心の安らぎ等々数え上

げたら限らない事と思ひますが、総ては前述の如き平凡に成すべき事を成し、自己の責務を完全に果たした満足感がこの信念の大きな支えになつてゐる事は否定出来ない事です。

現役諸君、古い表現ながら『青春ふたゝび戻らず』練習にも、試合にも自己の最大能力を発揮して悔いなく大学サッカー部生活を送つて下さい。必ずや一生の精神的支柱となる事を保証致します。人間の体力、精神力の限界と云うものは自己の妥協がなければ無限であると思ひます。共に楽しく意義ある人生を送るうではありませぬか。

完

昭和二十二年 度

◎第2回東京選手権 9・13〜18

〔準々決勝〕 東大LB211東京蹴球団B

〔準決勝〕 東大LB410(010)第1生命

〔決勝〕 東大LB112(011)早大W M W

藤貫賀津山馬本野部腰上

近大須黒横有岡天阿竹三

4 4 4
C F G
6 6 4

◎リーグ戦 10・11 御殿下

10・11 東大510 (410) 商大

10・18 東大315 (114) 慶大

10・22 東大310 千葉医大

11・9 東大510 (310) 文理大

11・16 東大112 (012) 早大

〔順位〕

①早大5勝 ②慶大3勝1分1敗 ③東大3勝2敗

④文大2勝2分1敗 ⑤千葉医大1勝4敗 ⑥商大5敗

〔メンバー〕

渡崎越藤原元宮橋川崎山

馬高馬後海松二高早山速

◎朝日招待サッカー S231・10 11 西宮

全東大410 (310) 全京大

藤藤藤元山津宮橋谷川上

近後加松横黒二高大早三

4 C 18
6 F 5
10 G 8

◎その他

この年の東西対抗(復活第1回) S224・3 神宮)の関東軍にHB横山、HB有馬の両氏が選ばれている。

また、東西学生・OB対抗(S232・11 西宮)の関東学生に松元、海老原、早川の三氏、関東OBに大貫、横山、有馬の

三氏、関西OBに大谷氏が選ばれている。

昭和二十三年度

◎関東大学トーナメント(5・15 5・18 東伏見)

〔準々決勝〕 東大1110 明大

〔準決勝〕 東大310 中大

〔決勝〕 東大510 (210) 文大

渡越藤元村原林橋川埜平

馬馬後松中海小高早大松

2 C 3
1 F 3
17 G 6

◎関東大学リーグ戦(10・10 11・21 神宮)

10・10 東大910 (310) 千葉医

波原藤元村島宮橋林野平

馬海後松中大二高小大松

0 C 14
5 F 5
41 G 1

10・24 東大011 (011) 文大

渡山藤元村原宮橋林埜平

馬丸後松中海二高小大松

1 C 5
3 F 1
22 G 6

東大611 (510) 明大

渡元藤原山島宮橋平埜林
 馬松後海丸大二高松大小
 8 C 10
 4 F 3
 20 G 18

11・7 東大512 (210) 慶大

渡元村原山島宮橋平埜林
 馬松中海丸大二高松大小
 6 C 11
 2 F 5
 20 G 4

11・14 東大210 (010) 早大

渡元村原山島宮橋平埜林
 馬松中海丸大二高松大小
 10 C 8
 5 F 4
 16 G 21

〔順位〕

- ①東大4勝1敗 ②文大3勝1敗1分 ③早大2勝2敗1分
- ④慶大2勝2敗1分 ⑤明大2勝2敗1分 ⑥千葉医5敗

◎東西学生第一位決定試合 (12・12 西宮)

東大012 (010) 関学

渡元村原山島宮橋平埜林
 馬松中海丸大二高松大小
 7 C 4
 6 F 8
 8 G 18

◎その他

この年の東西対抗(復活第二回) S・23・4・29 神宮)
 の関東軍に有馬・横山の両氏、関西軍に大谷氏が選ばれてい
 る。

昭和二十四年度

◎東西対抗(復活第三回) 4・17 西宮

関東214 (112) 関西

関東に有馬・大埜両氏が出場

◎全日本選手権(第二十九回、復活第二回) 6・4 5東伏見

準決 東大LB 711 広島東洋工業

決勝 東大LB 512 (310) 関大ク

藤藤賀原山馬本橋川埜上

近斉須海横有岡高早大三
 0 C 12
 4 F 9
 27 G 9
 1 P 0

※天藤氏評(朝日新聞)「東大は関大ボックスのにぶい動

きに乗じ40本に及ぶシュートのうち関大GKのミスも手

伝つて5点を得た。一方関大はコンビネーションなく:

中略 本年ビッグゲーム中、最悪のゲーム。」(サッカー

マガジン1968・8 サッカーの歴史頁116 7

による。

◎リーグ戦 10・9・11・27 於武蔵野

東大 2 1 1 (0 1 0) 明大

東大 1 1 2 (0 1 0) 立大

東大 1 1 2 (0 1 1) 教育大

東大 3 1 2 (2 1 2) 慶大

永輪村原 山川 星井平 埜山

本三 中海丸市 八菊松大秋

東大 1 1 2 (0 1 2) 早大

永輪村原 山島 星井平 埜山

本三 中海丸大 八菊松大秋

〔順位〕 ①早大 3 勝 2 分 ②立大 3 勝 1 敗 1 分 ③慶大 1

勝 1 敗 3 分 ④東大 2 勝 3 敗 ⑤教育大 1 勝 2 敗

2 分 ⑥明大 1 勝 4 敗

◎第 5 回東西学生 O B 対抗戦 (12・18 於武蔵野)

関東 O B に近藤、大貫、有馬、岡本、高橋、三上の 6 氏、関

西 O B に黒津氏が出場。

関東 O B 1 1 0 関西 O B

◎朝日招待サッカー (第八回、25・8・1・1)

全東大 3 1 1 (2 1 0) 全神商大

賀貫田原 山津本 平谷 埜上

須大種 海丸 黒岡松 大大三

◎東西学生対抗 (第五回) 2・5 西宮

関東に大埜氏出場

◎東西対抗 (復活第四回) 4・2 神宮

三上・有馬 阿氏が関東に出場

昭和二十五年 度

3 C 12
1 F 2
27 G 10

◎英国空母ユニコーン号乗組員チームと全日本 O B・関東学生

選抜が試合を行ない、大貫・有馬・大埜の三氏が出場

◎全日本選手権東京予選 武蔵野

東大 L B 2 1 3 慶大

◎リーグ戦

10・22 東大 0 1 4 (0 1 2) 立大 後楽園

富輪村山 原 条井野 埜山

老原 中菊岡 大秋

吉三 中長海

11 C 5
5 F 7
11 G 19

11 C 5
5 F 7
11 G 19

11 C 5
5 F 7
11 G 19

11 C 5
5 F 7
11 G 19

11 C 5
5 F 7
11 G 19

11 C 5
5 F 7
11 G 19

11 C 5
5 F 7
11 G 19

11 C 5
5 F 7
11 G 19

11 C 5
5 F 7
11 G 19

11 C 5
5 F 7
11 G 19

11 C 5
5 F 7
11 G 19

11 C 5
5 F 7
11 G 19

11 C 5
5 F 7
11 G 19

11 C 5
5 F 7
11 G 19

11・5 東大313 (210) 慶大

富輪村田原 沼井野埜山

吉三 中坪海老原 柴菊岡大秋

朝日スポーツ評……「対立大戦に惨敗した東大はこの日鋭い闘志と動きで強敵慶大と引分け、今後の試合を興味あるものとした。特に新人CF岡野は見違えるほどよくなり、果敢な突込みで独り第一、第三点をあげて光っていた。」

(25・11・11号)

11・12 東大112 (111) 中大 武蔵野

富輪村井原 沼井野埜条

吉三 中坪海老原 柴菊岡大中

4 C 6
4 F 5
11 G 10

11・19 東大010 (010) 早大 武蔵野

富輪村川原 沼川野埜山

吉三 中坪海老原 柴香岡大秋

2 C 1
3 F 1
15 G 13

〔順位〕

①早大3勝2分 ②慶大3勝1敗1分 ③教育大

2勝2敗1分 ④立大2勝3敗 ⑤東大1勝2敗

2分 ⑥中大1勝4敗

◎アジア大会日本代表選手に有馬・加藤両氏選ばれる。(26・1)

昭和二十六年 度

◎第31回全日本選手権 関東予選

〔決勝〕 東大LB214 (111) 全立大

◎リーグ戦(初戦のみ東大、残りは神宮球場)

10・13 東大211 (110) 立大

富輪田川原氏沼井野条藤

吉三 坪石海老原 安柴菊岡中加

6 C 4
2 F 1
6 G 11

10・20 東大114 (112) 教大

富輪田川原氏沼井野条本

吉三 坪石海老原 安柴菊岡中藤

4 C 2
5 F 2
10 G 28

10・29 東大215 (114) 中大

石輪田氏原川沼井野条

立三 坪安海老原 石柴菊岡中

9 C 6
3 F 7
13 G 15

11・5 東大012 (011) 慶大

富輪田川原氏沼井野条

吉三 坪石海老原 安柴菊岡中

11 C 5
4 F 10
6 G 15
1 P 0

11・19 東大014 (010) 早大

富輪 田川 原氏 星井 野条 藤
 老
 吉三 坪石 海安 八菊 岡中 加
 1 C 9
 4 F 5
 17 G 11
 0 P 1
 (0)

11・24 東大 2 | 2 (1 | 1) 明大

メンバー・記録不明

〔順位〕

- ① 早大 5勝 1敗
- ② 慶大 5勝 1敗
- ③ 明大 4勝 1分 1敗
- ④ 立大 2勝 4敗
- ⑤ 中大 2勝 4敗
- ⑥ 東大 1勝 1分 4敗
- ⑦ 教大 1勝 5敗 (一、二位は優勝決定戦の結果による)

◎その他

この年第1回アジア大会がテヘランで開かれ、全日本代表に有馬、加藤の両氏が選ばれた。

第17回東西対抗で、全関東に有馬、大埜の両氏が、全関西に加藤、大谷の両氏が出場。

スウェーデンのヘンシングポリニーが来日。全日本との試合に有馬、加藤の両氏が参加。

昭和二十七年 度

◎リーグ戦

10・11 東大 1 | 1 4 (0 | 1) 明大 東大 G

石弟 田川 原見 兄 井野 井居
 沼 老 沼 柴 中岡 石島
 立 柴 坪 中海 浅 柴 石岡 石島
 5 C 3
 11 F 6
 8 G 18

10・18 東大 3 | 1 3 (3 | 1 2) 早大 神宮 G

石足 田弟 原見 兄 井野 野津
 沼 老 沼 柴 石中 岡根
 立 帆 坪 柴 海 浅 柴 石中 岡根
 11 C 0
 8 F 4
 6 G 11
 0 P 1
 (1)

11・2 東大 0 | 1 3 (0 | 1 2) 教大 神宮 G

石弟 田 原見 兄 井野 島居
 沼 老 沼 柴 石岡 中島
 立 柴 坪 海 老 浅 柴 石岡 中島
 9 C 1
 5 F 13
 7 G 22
 0 P 1
 (0)

11・15 東大 0 | 1 2 (0 | 1 1) 慶大 神宮 G

石 田弟 原見 兄 井野 島津
 原 沼 老 沼 柴 石岡 中根
 立 坪 柴 海 浅 柴 石岡 中根
 6 C 4
 4 F 10
 5 G 14

11・22 東大 0 | 1 1 (0 | 1 0) 立大 神宮 G

※メンバー・記録は不明。記事は有。

11・29 東大114 (012) 中大 神宮G

※スポーツ毎日・読売スポーツに資料なし。

〔順位〕 ①慶大5勝1分 ②中大4勝1敗1分 ③早大

2勝1敗3分 ④立大・明大3勝3敗 ⑥教大1

勝5敗 ⑦東大5敗1分

◎一・二部入替戦

12・7 東大410 (210) 青学大 東大G

◎第一回全国大学サッカー大会(昭28・1・21~6神宮)

(一回戦) 東大510 (110) 京都学芸大

(二回戦) 東大910 (510) 東京医大

(三回戦) 東大413 (延長) 中大

(準決勝) 東大110 (010) 立大

(決勝) 東大211 (110) 早大

石弟田 原見兄井野島本
沼老沼
立柴坪 海浅柴石岡中西
4 C 1
8 F 5
14 G 14

◎その他の主な試合

7・12 東大118 (013) 関学 西宮

7・13 東大114 (013) 神商大 西宮

※尚、昭和27年6月8日の対全香港戦に、東大OBの加藤、

大埜両氏が全日本代表として出場、4月6日の東西対抗の

東軍に大埜氏が出場している。また昭和28年1月10・11日

の朝日招待サッカーの関東OB選抜に有馬、大埜両氏が、

1月25日の学生東西対抗の関東選抜に岡野氏が選抜され試

合に出場している。

昭和二十八年度

◎第32回全日本選手権 関東予選

4・25〔決勝〕 東大LB213 (延長) 教大ク

◎関東大学新人サッカートナメント大会

6・21〔2回戦〕 東大314 (112) 教大

◎リーグ戦

10・4 東大014 (011) 慶大 神宮

石沼川 見本本島野田沢

立柴中 浅山藤中岡島松

4 C 1
2 F 19
9 G 27

10・11 東大017 (011) 中大 武蔵野

石沼川本見 本島野田田
 立柴中山浅 原 藤中岡島福
 8 C 4
 8 F 10
 13 G 14
 0 P 1

10・18 東大 1 | 3 (1 | 0) 早大 神宮

石田沼本 見本田野島口
 立福柴山 浅藤島岡中浜
 16 C 4
 6 F 9
 6 G 14

11・1 東大 2 | 3 (1 | 2) 立大 神宮

石沼田本 見本田野島本
 立柴福山 原 浅藤島岡中西

11・14 東大 2 | 1 (2 | 0) 明大 神宮

石沼田本 原 見口田本島本
 立柴福山 浅浜島西中藤
 7 C 2
 7 F 5
 6 G 19

11・21 東大 2 | 7 (1 | 3) 教大

倉沼田本 見野田本島本
 新柴倉山 原 浅岡島西中藤
 11 C 3
 4 F 4
 4 G 18

(順位)

- ①教大 5勝1分
- ②中太 5勝1敗
- ③立大 4勝1分1敗
- ④慶大 3勝3敗
- ⑤早大 2勝4敗
- ⑥東大 1勝6敗

⑦明大 6敗

◎第3回全国大学選手権大会(昭和29年1・2) 神宮絵画館前

- G)
- 1・2 東大 3 | 2 (2 | 2) 岩手大
- 1・3 東大 0 | 1 (0 | 1) 東京学芸大

◎この年行なわれた朝日招待サッカーに有馬、大埜の両氏が関

東OBチームとして出場。東西学生選抜対抗サッカーに岡野氏が出場。東西対抗サッカーに大埜氏が出場。西独よりオツフエンバッツハキツカーズが来日。加藤、大埜の両氏が全日本代表として、岡野氏が全日本学生選抜として出場。西独ドルトムントで行なわれたユニバーシアードに監督として竹腰氏が、選手として岡野氏が参加した。

昭和二十九年 度

◎リーグ戦

10・10 東大 0 | 9 (0 | 4) 中大 武蔵野

田沼田本 田嵐本 田野島口 1 C 6
 楠柴福山 倉五 藤島岡中浜 8 F 8
 5 G

10・17 東大 1 1 2 (0 1 0) 立大 神宮

田口 田本 田見 本野 野島 野
楠浜 福山 倉五 藤島 岡中山

10 C 2
5 F 4
11 G 16

10・24 東大 0 1 6 (0 1 4) 教大 神宮

田口 田本 田見 本野 野島 見
楠浜 福山 倉五 藤島 岡中 浅

15 C 1
5 F 6
5 G 17

10・31 東大 1 1 4 (0 1 1) 慶大 神宮

田口 田本 田見 本野 野島 嵐
楠浜 福山 倉五 藤山 岡中 五

15 C 0
2 F 9
5 G 8

11・13 東大 1 1 4 (0 1 0) 明大 武蔵野

田口 田本 田見 本野 野島 田
楠浜 福山 倉五 藤山 岡中 島

7 C 4
5 F 11
13 G 11
1 P 0
(1)

11・28 東大 0 1 8 (0 1 4) 早大 神宮

田口 田本 田見 本野 野島 田
楠浜 福山 倉五 藤山 岡中 島

8 C 0
6 F 15
1 G 20
1 P 0
(0)

(順位)

- ①立大 4勝 2分
- ②早大 4勝 1敗 1分
- ③教大・慶大 3勝

2敗 1分 ⑤中大 3勝 3敗 ⑥明大 1勝 4敗 1分 ⑦東大 6敗

◎一・二部入替戦

12・5 東大 6 1 1 (2 1 1) 法大 武蔵野

田口 田本 田見 本野 野島 松
楠浜 福山 倉五 藤島 岡中 小

4 C 5
7 F 3
24 G 7
1 P 0
(1)

◎第三回全国大学大会 (昭30・1・2) 6神宮

(一回戦) 東大 3 1 0 (0 1 0) 岐阜大

(二回戦) 東大 4 1 1 (2 1 0) 鹿児島大

(三回戦) 東大 1 1 0 (0 1 0) 立大

(準決勝) 東大 2 1 2 (0 1 0) 中大 (抽選負)

田田 見本 田見 本野 野島 松
楠福 深山 倉五 藤島 山 中 小

5 C 1
6 F 16
7 G 16

(三位決定) 東大 1 1 1 (1 1 0) 早大 (両校三位)

田田 沼島 田見 本野 野島 松
楠福 柴中 倉五 藤島 山 五 小

7 C 3
5 F 13
4 G 12

◎全日本関東予選

4・24 東大 L B 12 1 1 (6 1 0) 一橋大 東大 G

4・25 東大LB211 (210) 全法政 農学部G

4・29 東大LB116 (013) 中大俱樂部 農学部G

田沼田川原見本田野島本

楠柴福石海老淺藤島岡中西

5 C 6
7 F 9
9 G 17

◎その他の主な試合

7・16 東大011 (010) 全関大 大阪鞆公園

昭和三十年度

◎第34回全日本選手権 関東予選

〔決勝〕4・17 東大113 (010) 早大 東大農学部G

柳足田本田見野野原島田

畔帆福山倉淺山岡片中島

10 C 2
6 F 8
8 G 23

◎新人戦 昭和30年6・10

6・11〔一回戦〕 東大210 (110) 上智大 東大農学部G

部G

柳井村木取嵐間田林部尾

畔柳木春名五風井小服西

4 C 5
4 F 2
10 G 7

二回戦以降は不明。少なくともベスト4には入っていない。

◎リーグ戦

10・23 東大114 (011) 教大 神宮

柳口田嵐田見野田野島松

畔浜福五倉淺山島岡中小

6 C 3
4 F 13
14 G 20

10・30 東大016 (013) 早大 神宮

柳口田嵐田見野田野島松

畔浜福五倉淺山島岡中小

9 C 6
15 F 12
13 G 21

11・6 東大411 (011) 明大 神宮

田嵐田原 田見部野野島田

楠五福原 倉淺服岡山中島

10 C 4
15 F 13
15 G 13

11・12 東大113 (012) 中大 後樂園

田嵐田原 田見部野野島田

楠五福原 倉淺服岡山中島

10 C 3
2 F 14
13 G 15

11・20 東大015 (012) 立大 後樂園

田田田原 田見田嵐野島野

楠浜福原 倉淺島五山中岡

5 C 1
5 F 16
7 G 18

11・27 東大015 (011) 慶大 神宮

田 嵐田 田見松島野野田
楠 五福 倉 浅小中山岡島
4 C 2
9 F 13
11 G 21

〔順位〕

①早大5勝1分 ②教大4勝1分1敗 ③立大3勝1分2敗
④慶大2勝2分2敗 ⑤中大2勝1分3敗 ⑥明大2分4敗
⑦東大1勝5敗

◎第5回全国大学選手権大会 昭和31年1・2

〔一回戦〕 1・2 東大310 (010) 商船大 神宮

田 口田 田見野田野島林
原
楠 浜福 倉 浅山島岡中小
1 C 2
11 F 7
9 G 9

〔二回戦〕 1・3 東大611 (210) 東北大 絵画館

前G

田 口田嵐田見野田野島松
楠 浜福 五倉 浅山島岡中小
1 C 9
4 F 9
18 G 7

〔三回戦〕 1・4 東大413 (211) 中大

田 口田嵐田見野田野島松
楠 浜福 五倉 浅山島岡中小
3 C 3
6 F 10
12 G 14

〔準決勝〕 1・5 東大014 (013) 早大 神宮

田 口田嵐田見野田野島松
楠 浜福 五倉 浅山島岡中小
5 C 2
3 F 3
8 G 14

〔三位決定戦〕 1・6 東大110 (延長) 教大

田 口田嵐田見野田野島間
楠 浜福 五倉 浅山島岡中風
5 C 7
10 F 11
16 G 14

◎この年、朝日招待サッカーに大埜、海老原の両氏が参加。東西選抜対抗サッカーに大埜氏が参加。

昭和31年卒 岡野 俊一郎

一昨年だつたと思う。NHKの「あなたも挑戦」と云う子供向けのクイズ番組にゲストとして出演した。クイズの一部、サッカーに関する問題を私が出すと云うわけだ。

ビデオどりの前、司会者の長沢純ちやんと雑談をしていたら、純ちやんに次のような質問をされた。

「岡野さん、東大にサッカー部つてあつたんですか？」

「あつたんですか、つて!? 僕らの頃は大学選手権で優勝したんですよ!」と私はいささか憤りを込めて答えたものだ。

昭和28年の正月、前年の秋の関東大学リーグで東大のサッカー部史上初の一部最下位になり、顔面蒼白で入替戦(4-0、勝)を闘つてから僅か数ヶ月の後に、リーグで破れた相手を連破しての優勝は本当に嬉しかつた。

決勝の相手、早大を2-1とリードしてからの後半は一方的な攻勢だつた。役員がメイン・スタンドで大声を出しては、と云うので観客のいないバック・スタンドから「もつと攻めろ！もつと押せ！」と声援して下さつたのは、有馬さん、竹腰さんそして今は亡き篠島さん、であつた。

この声援に対し、海老原主将が試合中に云つたのは「これ以上押したらグラウンドから出ちやうよ。」であつた。

表彰式の後、全員が本郷の松好に直行、大宴会となつた。

「俺は優勝チームのゴールキーパーだ」と泣きながら酒を呑んだのが立石さん。当時一年生だつた浅見君は竹腰さんの膝に乗せられて酒を呑んでいた。

フルバックは柴沼(弟)、坪田、ハーフが原、海老原、浅見、フォワードが柴沼(兄)、石井、岡野、中島、西本のチームであつた。一人一人は決して上手ではなかつた。両足を自由に使える選手は少なかつた。だが、とても気持のよいチームだつた。

決勝戦はニュース映画にも収録され、映画館で上映された。前年に卒業し、東北地方で勤務されていた安氏さんは映画館でこのニュースを見、決勝点が入つた瞬間、立ち上つて「バン

ザイ！」と叫んだそうだ。

もし、東大のサッカー部が二部で優勝し、入替戦に勝つて一部にカムバックしたら、映画館ではないにしろ、「バンザイ！」と呼ぶ人間が多勢いることは間違いないだろう。

昭和三十一年度

◎リーグ戦 10・21〜12・1

10・21 東大0-18(0-13) 早大 後楽園競輪場

柳取田 田本林 嵐達部 松原

畔名福 倉山小 五安服小

11 C 3
11 F 8
10 G 20

10・28 東大1-14(0-13) 教育大 御殿下

柳田田 取本 田嵐達部 松原

畔高倉 名山島 五安服小

5 C 7
3 F 4
15 G 11

11・4 東大1-16(1-14) 慶大 御殿下

柳田田 田部林 嵐間田 松原

畔高福 倉服小 五風島小

3 C 4
2 F 8
6 G 19
0 P 2

11・11 東大0-18(0-14) 立大 後楽園

柳田部田本林嵐井田松
 畔高福服倉山小五稻島小
 3 C 5
 9 F 13
 8 G 18

11・18 東大 1 1 2 (0 1 1) 明大 後楽園

柳田部 本間嵐井田松
 畔高倉服 山風五稻島小
 8 C 1
 1 F 9
 8 G 22

11・24 東大 1 1 4 (0 1 2) 中大 御殿下

浜取田 田本井嵐達部松
 長名倉 福山稻五安服小
 11 C 11
 10 F 10
 5 G 15
 1 P 0

12・1 東大 1 1 4 (1 1 1) 農大 御殿下

浜原 田田取部田嵐田田本
 長倉高名服稻五津島山
 6 C 3
 7 F 7
 12 G 13

〔順位〕①早大 5勝 1敗 1分 ②立大 4勝 2敗 1分 ③慶大 4

勝 2敗 1分 ④中大 2勝 2敗 3分 ⑤明大 2勝 2敗 3分
 ⑥農大 3勝 3敗 1分 ⑦教育大 2勝 3敗 2分

⑧東大 7敗

◎入替戦

12・9 東大 1 1 2 (1 1 0) 法大 御殿下

「法大が勝ち東大は二部に転落。東大は大正13年リーグが始つて以来昭和23年までに11回優勝した事があるが、ここ数年不振をつづけていた。」毎日新聞より。

◎全日本選手権 (第36回) 大宮県営陸上競技場

〔一回戦〕 東大 1 1 6 八幡製鉄

昭和三十一年度

◎国公立大会

決勝で一橋に6 1 0で勝ち優勝。

◎リーグ戦

10・19 東大 2 1 0 (2 1 0) 上智 日吉

浜田藤嵐達村林本崎沢部
 長高佐五安木小梅長野服
 1 C K 8
 9 E K 6
 14 C K 2

10・27 東大 3 1 1 (1 1 1) 一橋 日吉

浜田藤嵐達村林本崎沢部
 長高佐五安木小梅長野服
 4 C 9
 6 F 2
 20 G 7

11・3 東大310(110) 武蔵 武蔵野市営

浜田藤部 達村林本間部崎

長高佐五安木小梅風服長

3 C 5
7 F 4
19 G 5

11・10 東大010(010) 青学 武蔵野市営

浜田田嵐 達村林本間沢部

長高福五安木小梅風野服

4 C 2
10 F 18
11 G 9

11・17 東大510(110) 学芸 武蔵野市営

浜田藤部 田村沢村崎本間

長高佐服福木野松長梅風

2 C 5
10 F 3
27 G 1

11・22 東大212(112) 日体大 農学部G

浜田藤部 達村沢村崎本間

長高佐服安木野松長梅風

5 C 7
5 F 6
15 G 12

12・1 東大311(210) 日大 武蔵野市営

浜藤田部 達場林沢崎村間

長佐福服安高小野長松風

3 C 5
8 F 25
2 G 3

※C・K、F・K、G・Kの記録は右が東大

〔順位〕

①東大5勝2分 ②日大6勝1敗

③上智大 ④青学大 ⑤一橋大

⑥日体大 ⑦学芸大、武蔵大

〔優勝決定戦〕

12・4 東大012(011) 日大 御殿下

浜藤田部 達場林沢崎村間

長佐福服安高小野長松風

8 C 6
8 F 24
11 G 8

◎第6回大学選手権 昭和33年1月3日より

〔1回戦〕 1・3 東大210(010) 神奈川大 農学部G

部G

〔2回戦〕 1・4 東大410(310) 千葉大 御殿下

〔準々決勝〕 1・5 東大013(011) 農大 御殿下

浜藤田部 達場部本沢村村間

長佐高安服梅野木松風

8 C 0
7 F 5
7 G 17

昭和三十三年度

◎新人戦

2回戦で慶大に110で負け

◎国公立大会

決勝で学芸大に110で勝ち2年連続優勝

◎全日本選手権

○東京予選 御殿下

7・12 全東大211 (010) (延長) 早大W M W

浜沼田部原 沢田野見本

長柴高服海 野島岡浅藤

7 C K 4
6 F K 10
12 G K 9

7・13 全東大311 (110) 古河

沼沼田部原 本島野見田

長柴高服海 藤中岡浅島

4 C 0
6 F 6
6 G 8

※当時の古河にはRB平木、RW八重樫LI長沼が出場し

1252。

7・20 全東大312 (012) 全立教

※この試合に勝つて関東代表となる。

○本大会 藤枝東高校

9・6 東大LB312 (011) (延長) 京都紫光

9・7 東大LB110 (010) 東洋工業

浜沼田部原 本島野見田

長柴高服海 藤中岡浅島

5 C 6
3 F 7
4 G 17

〔準決勝〕9・8 東大LB011 (010) 八幡製鉄

浜沼田部原 見本島野山田

長柴高服海 浅藤中岡小島

5 C 4
8 F 7
10 G 12

〔3位決定戦〕9・9 東大LB412 (212) 志太ク

対東洋工業と同じメンバー

※志太クラブは藤枝東高校のOBチーム

◎リーグ戦 対一橋は小石川、対防大は農学部G、他は御殿下

10・19 東大013 (012) 日体大

浜藤田場田部本村沢山達

長佐吉高高服梅松野小安

1 C 10
10 F 13
22 G 8

10・26 東大211 防大

メンバー不明

11・3 東大612 (511) 青学大

浜村田場田部本沢崎山達

長松吉高高服梅野長小安

4 C 6
15 F 12
14 G 4

11・9 東大210 (110) 武蔵大

浜村田場田部本沢崎山達

長松吉高高服梅野長小安

0 C 6
15 F 14
19 G 2

11・16 東大110(010)上智

浜村浦場田部本沢崎越達

長松吉高 高服梅野長名安

5 C 8
8 F 8
16 G 6

11・22 東大110(010)一橋

浜村浦場田部本沢崎越達

長松吉高 高服梅野長名安

4 C 9
15 F 14
15 G 12

11・30 東大013(011)日大

浜村浦場田部本沢崎山越

長松三高 高服梅野長小名

3 C 4
2 F 4
10 G 15

〔順位〕

①日大 ②東大 ③あとの順位は不明

◎第7回大学選手権

小石川

〔2回戦〕 12・25 東大312(111) (延長) 鹿児島

大

〔3回戦〕 12・26 東大111(111) (延長) 国士館

抽選負け

※C・K、F・K、G・Kの記録は右が東大

昭和三十四年度

◎全日本選手権予選

〔1回戦〕 4・11 東大017(013) 中大

浜村浦場達立川沢林山藤

長松三高 安足山野本小斉

10 C 1
13 F 10
4 G 21

〔2回戦〕 東大LB110 北辰電機

〔3回戦〕 東大LB112 中大夕

◎新人戦

準々決勝で慶大に抽選負け

◎国公立大会

決勝で一橋に311で勝ち、3年連続優勝

◎リーグ戦 御殿下

10・25 東大110(110) 日体大

浜達浦田村越山沢場田本

長安三吉松名小野高室山

6 C 3
9 F 5
13 G 8

東大112(110) 成城

浜達浦本村越山沢田田藤

長安三山松名小野吉室斉

4 C 7
4 F 8
15 G 12
1 F K 1

11・3 東大 7 1 1 (3 1 1) 上智

浜越浦部村田山沢場田本

長安三梅松名小野高室山

9 C 9
11 F 7
20 G 2

11・8 東大 1 1 0 (0 1 0) 武蔵

メンバーは対上智戦と同じ

2 C 5
10 F 11
18 G 9

11・15 東大 2 1 0 (0 1 0) 防大

浜越浦部村田山沢場田本

長安三服松吉小野高室山

5 C 3
10 F 10
10 G 14

11・23 東大 8 1 0 (2 1 0) 一橋

メンバーは対防大戦と同じ

2 C 6
7 F 15
11 G 3

11・29 東大 2 1 2 (1 1 2) 日大

メンバーは対防大戦と同じ

3 C 7
8 F 17
11 G 12

〔優勝決定戦〕 12・2 東大 2 1 1 (0 1 0) 日大

浜越浦部村田山沢場田本

長安三服松吉小野高室山

5 C 8
17 F 14
13 G 15

〔入替戦〕 12・6 東大 0 1 2 (0 1 1) 法大 御殿下

◎第8回大学選手権 小石川 12・23より

〔1回戦〕 東大 6 1 0 (2 1 0) 福岡大

〔2回戦〕 東大 0 1 1 (0 1 1) 北大

※C・K、F・K、G・K、P・Kの記録は右が東大。



2部優勝

(御殿下)

三浦 服部
 野沢 吉田 小名越
 室田 高山 本場
 松村 安東
 監督 須賀
 岡野

「二部陥落の頃」

昭和35年卒 小山 富士夫

僕が東大に入つたのは、昭和三十一年で、その年の秋に東大サッカー部は二部に陥落したのだから、もう東大の二部住まいも二十年になろうとしているわけだ。その間、或る大学は三部から這い上がつて一部にいくし、又或る者は一部から落ちて、三部まで転落した。いずれにしても二十年も二部住まいを続けている大学は、東大以外には一つもないのではなからうか。二部のぬるま湯に首までつかつて、出れば寒くて風邪をひくといふところか。

昭和三十一年の秋のリーグ戦で、我々は早慶・明・立・中央・教育・農大のいずれにも勝つことが出来なくて、二部優勝の法政と対戦し、更に敗れた。僕自身は一年に入つたばかりで、事柄の重大性を十分に理解したとは申せないが、タイム・アツプの笛が鳴つて敗戦が決まり、田村監督をかこんで、円陣を作つたときの気持は忘れられない。田村先生が涙をこぼされた。僕は円陣のうしろの方で、ただおろおろするばかりだった。

翌春、ともかくも四年生を送り出して、横山監督、五十嵐キヤブテンのもとに、二部陥落の一戦に連つた我々の手で、この口惜しさと恥辱とをばらそうと誓い合つた。この年の五十嵐さんの猛練習は相当なもので、春の駒場の合宿では、腹筋練習で、

皆尻から血を出して、赤チンを塗つたものだから、風呂屋に行つたときは、顔を会わせなくとも後姿で、仲間を判別出来た。

夏の山中合宿では本当に死ぬかと思ふ位走らされた。そして秋のリーグ戦では一戦一戦緊張の連続で、やつとの思いで日大と同率首位になり、先達て亡くなられた篠島さんの肝煎りで、

「まつよし」ですぎ焼激励会までやつていたのだが、優勝決定戦は敗れた。そして落師の日々に、たたみかける様に不幸が訪れた。昭和三十三年一月三十日の夕刻、練習帰りの五十嵐さんが、赤門前でタクシーにけねとばされ、ほとんど即死という状態で亡くなられた。翌三十一日、大雨の中を阿佐谷のお宅にかけつけたが、変りはてた五十嵐さんの亡骸を前に、呆然自失、言葉もなかつた。横山監督以下十数名の者が名を連ねて、多摩墓地の彼の瑩域に記念の石碑を建てて、成仏を祈つた。

翌三十三年は大笠監督、風間キャプテンのコンビでスタートしたが、練習方針で意見が合わず、風間さんけ去つて、高田さんが代つた。風間さんも卒業後数年して、雪の北海道で交通事故のため亡くなられたが、この様に二部陥落直後のキャプテンが二代に亘つて事故死をとげたことについては、何か東大サッカー部の苦悩を背負つて、あの世に旅立たれた様に感ぜられて、痛ましう。

ところで、この年は第三回アジア大会が東京で開催された年で、小石川サッカー場に日参したことをおぼえている。そして

この年の夏、東大LBは全日本選手権の東京地区予選で、慶応BRB、早稲W MW、古河電工、全立教を連破して、藤枝の本大会に出場した。大笠監督、岩動チームドクター以下、

G K 長 浜 (現役)

F R 柴 沼 (晉)

高 田 (現役)

H B 原 (忠彦)

海老原 (朗)

服 部 (現役)

F W 藤 本

中 島

岡 野

浅 見

島 田

補 欠 安 達 (良英) (現役)

小 山 ()

高 場 ()

というチームで、要するに当時の若手OBに現役三名を補充した形であつて、関学とか中央とか学生中心のチームに比べると、著しく運動量を節約する型のチームで、第一戦、京都紫光クラブ、一〇〇、第二戦、東洋工業、一一〇と試合巧者ぶりを発揮した。しかし、八月末の暑さにOB達の疲労はなほだしく、遂



昭和33年度卒業生追出コンパ（於合宿所）

佐西伊足 山水高風梅浜長木
野 ?
藤尾部立 川谷田間本口浜村

小本 名 五 松
林 林 取 嵐 村

長小 小安西 高服野高
崎林 山達野 山部沢場



藤枝での記念スナップ

藤 小 服 高 岩 安 高
 本 山 部 田 動 達 場

柴 大 浅 島 海 岡 大 長 中
 沼 埜 見 田 老 原 野 谷 浜 島

に原さんがタウンして、第三戦は僕が浅見さんのユニフォームを着、浅見さんがサイドハーフに下がって八幡製鉄と対戦したが、力尽きて破れた。結局この大会は、関学クラブの優勝で、二位八幡製鉄、三位東大I B、四位地元の志太クラブという結果に終つた。

この年の秋のリーグ戦も苦勞の連続であつたが、最後に日大と御殿下で優勝をかけて渡り合い、破れた。十二月初めの、みぞれまじりの零雨の中で、いくら走つても齒の根が合わなかつた。この敗戦の口惜しさは忘れられない。試合に敗けて口惜涙にくれたのは、僕の生涯でこのときが最初であつた。

翌三十四年は須賀監督を迎えて、二部陥落の一戦に学生として列した最後の学年が最上級生になつて、何としても一部復帰をかけたそうと燃えた。キャプテンは安達良英。そして秋のリーグ戦の途中、たしか二試合目位のとときに、安達が腹膜炎で弊れる事故があつて、あとを僕が引継ぎ、この年二部初優勝をした。そして一部最下位の法政と遺恨をこめて戦つたが、二一〇で敗れた。この試合の様子は、遂一頭を離れない。後半の半ばまで、〇一〇で頑張つたが、大原というセンターフォワードにしてやられて、一点をもぎとられてから力尽きた。部室のベンチで涙にくれていた僕に、高田さんが「小山よくやつたよ」といつて慰めてくれた、あの言葉が、今もきのうのこの様に耳にこつている。ただ無念であつた。

あの時から、十数年たつて突然、浅見監督の手伝いをしろということで、僕なりに一年間努力したつもりであつたが、この年は三部との下の入替戦に出場する羽目に立ちいたつて、僕は仰天した。幸にこのピンチは切抜けることが出来たが、つくづくと我が身の無力を悟つて、以来お金を集めて有能なコーチをお願いする方が良いのではないかという考えに落ち着き、その方向でお役に立ち度いと思つている。

昭和三十五年度

◎全日本選手権関東予選

東大4-1国学院

東大2-2日体大

東大0-1立教

◎新人戦

2回戦で明治に5-0で負け

◎国公立大会

決勝で教育大に5-0で負け準優勝。

◎リーグ戦

対上智、武蔵は東伏見、対日体大は農学部G、
他は御殿下。

10・23 東大412上智

メンバー不明

10・30 東大311(211) 武蔵

メンバー不明

東大312 日体大

メンバー不明 日付不詳

11・13 東大011(010) 成城

橋浦村場達越藤沢 南 田本

高三松高安名後野 南 室山

1CK11
15FK14
16CK11

11・19 東大411(111) 一橋

橋浦川村達越藤沢 南 場本

高三松高安名後野 南 高山

1C10
12F3
16G9

11・23 東大012(011) 防大

橋浦川村達越藤沢 南 場本

高三松高安名後野 南 高山

3C3
4F14
14G10

11・27 東大013(010) 日大

橋浦川村達越村場 南 藤本

高三小梅安名松高 南 後山

15C6
16F4
10G9

〔順位〕

①成城 ②防大 ③日大 ④東大、日体大 以下順位不明

◎第9回大学選手権 御殿下

〔2回戦〕 12・22 東大211(110) 東北学院

〔3回戦〕 12・24 東大314(312) (延長) 法大

橋浦川村達越馬沢 南 藤藤

高三小梅安名門野 南 後斉

3C7
15F19
9G6

昭和三十六年度

◎全日本選手権

4・8 東大410(110) 日興

4・9 東大211 茗友

4・15 東大013(011) 早大

橋浦藤浦達越馬沢 南 村藤

高三内山安名門野 南 梅後

◎新人戦

一回戦で早大に410で負け

◎国公立大会

決勝で教育大に610で負け準優勝

◎リーグ戦 10・15(11・25) 農学部G及御殿下

10・15 東大211(110) 日体大

橋川浦村達越馬沢 藤藤 4C5 14F11 10G10

高小三梅安名門野 後齊

10・21 東大211(211) 一橋大

橋川島村達越柳沢 藤馬 2C9 7F14 14G7

高小三梅安名畔野 後門

10・28 東大111(010) 武蔵大

島川浦村達村馬沢柳藤 南 6C5 9F18 10G4 0P1

中小三梅安中門野 後

11・5 東大110(010) 上智大

橋川浦村達越馬沢 藤柳 4C7 10F12 12G10 2P0

高小三梅安名門野 後畔

11・11 東大111(111) 成城大

橋川浦村達越馬沢田藤柳 2C3 10F24 11G15 1P0

高小三梅安名門野 室後畔

11・19 東大211(111) 防大

橋川光村達越馬沢 藤柳 6C12 16F22 10G4 0P1

高小石梅安名門野 後畔

11・25 東大113(013) 日大

橋川光村達越馬沢 田柳 5C3 11F17 8G18

高小石梅安名門野 室畔

〔順位〕

①日大6勝1分 ②東大4勝1敗2分 ③上智大4勝1敗2分

④成城大2勝3敗2分 ⑤武蔵大1勝2敗4分 ⑥防大

1勝3敗3分 ⑦一橋大4敗3分 ⑧日体大4敗3分

◎大学選手権

12・22 東大910(310) 関東学院

12・23 東大110(010) 松山商大

12・24 東大413 農大

〔準々決勝〕12・25 東大013(013) 中大 小石川G

島達川村藤村馬宮 藤柳 4C4 9F9 5G11

中安小梅内中門間 後畔

昭和三十七年度

◎全日本選手権 明大八幡山

〔1回戦〕 4・7 東大7 | 0 (4 | 0) 志村化工
 〔2回戦〕 4・8 東大3 | 4 (2 | 1) (延長)

埼玉教員

島村田浦光村馬宮田藤柳
 中梅八山石中門間山後畔
 12 CK 3
 8 FK 7
 20 GK 6
 0 PK 2

◎リーグ戦 御殿下

10・13 東大2 | 0 (1 | 0) 一橋
 10・20 東大2 | 1 (1 | 0) 自由
 10・27 東大3 | 0 (1 | 0) 武蔵
 11・3 東大5 | 1 (1 | 0) 防大
 11・10 東大2 | 0 (1 | 0) 上智
 11・18 東大3 | 1 (0 | 1) 成城
 11・25 東大6 | 0 (3 | 0) 農大

〔順位〕

- ① 東大7勝
- ② 成城6勝1敗
- ③ 一橋、上智3勝4敗
- ④ 防大2勝2分
- ⑤ 農大2勝5敗
- ⑥ 自由1勝2分
- ⑦ 武蔵1勝2分

〔入替戦〕 小石川

12・1 東大0 | 1 (0 | 1) 法大

◎大学選手権

創刊号に載っているので省略しました。

※C・K、F・K、G・K、P・K、の記録は、右が東大。

昭和三十九年度

◎リーグ戦 御殿下

10・31 東大1 | 0 一橋
 11・8 東大1 | 1 防大
 11・14 東大0 | 3 順天
 11・22 東大3 | 1 自由大
 11・28 東大2 | 2 上智
 12・5 東大0 | 3 法政
 12・12 東大0 | 2 成城

〔順位〕

- ① 法政6勝1分
- ② 順天5勝2敗
- ③ 上智3勝2分2敗
- ④ 成城4勝3敗
- ⑤ 東大2勝2分2敗
- ⑥ 防大2勝1分3敗
- ⑦ 一橋2勝5敗
- ⑧ 自由2分5敗

◎第12回全国大学選手権 S 38 11・22 小石川

〔2回戦〕 東大3 1 0 (2 1 0) 広島大

〔3回戦〕 東大0 1 0 (0 1 0) 〔延長〕名商大

抽選負

◎第13回全国大学選手権 S 39 11・22

〔2回戦〕 東大1 1 1 (1 1 1) 〔延長〕一橋

抽選負

昭和四十年年度

◎リーグ戦

10・10 東大0 1 0 成城 駒沢第2

10・16 東大1 1 1 上智 駒沢第2

10・24 東大2 1 0 順天 御殿下

10・30 東大3 1 3 法大 御殿下

11・7 東大1 1 2 農大 駒沢第2

11・14 東大1 1 0 一橋 駒沢第2

11・ 東大0 1 1 防大

〔順位〕

①法大5勝2分 ②上智5勝2分 ③東大2勝3分2敗

④農大3勝1分3敗 ⑤成城2勝2分3敗

⑥一橋2勝1分4敗 ⑦順天2勝5敗 ⑧防大1勝1分6敗

◎大学選手権 12・18 駒沢

〔2回戦〕 東大2 1 0 成蹊

〔3回戦〕 東大1 1 3 東北学院大

※昭和41年から大学選手権の方式が変わり、関東地区は、1部リーグ上位5校が出場するようになった。

昭和四十一年年度

◎リーグ戦

9・18 東大3 1 0 一橋 駒沢第2

9・25 東大1 1 3 成城 //

10・2 東大1 1 0 青学 //

10・8 東大1 1 2 順天 //

10・16 東大2 1 4 上智 //

10・23 東大1 1 2 日体 御殿下

10・29 東大0 1 0 農大 //

〔順位〕

①日体6勝1分 ②農大4勝2分1敗 ③成城5勝2敗

④順天3勝4敗 ⑤上智2勝1分4敗 ⑥東大2勝1分4敗

⑦青学2勝5敗 ⑧一橋1勝1分5敗

最弱チームの主将から

昭和42年度一主将 小川 恭二

1. 我々の経過

昭和四十二年のチームは多分、東大サッカー部の最弱チームだったのでないかと思えます。うまかつた上級生は卒業し、残つたプレーヤーも優れた者は生意気にも勉学に興味を示し、気の良い、つまり下手クソなものばかりがとり残されたチームでありました。はからずも私はこのチームの人格高潔を望まれるキャプテンになり、三部落ちだけはしたくないものと小さな胸を傷めたのを覚えていきます。

チームメイツは体格、体力、走力、技術、サッカーセンスとも他の二部チームに劣るように思われ、更に悪い時には悪いもので、先輩諸兄の御都合がつかず、監督、コーチ不在でスタートという状況でありました。(ただし、常に暖く見守つていただいた渡辺部長、リーグ戦時、見るに見かね監督を買つて出られた須賀先輩には感謝しております。)

どうしたら強くなるか、こんを練習をしていてうまくなつていゝのだらうかと不安の毎日で、銭湯の縁に坐つて考へて

いたのを懐しく思い出し歴代キャプテンの御苦勞を察していただきます。

しかし、悪い事はばかり続くはずはなく、前年残りの超四年生二人の加入もあり、京大戦の頃より調子は上がり、リーグ戦にはなんと開幕三連勝、次の日体大戦に勝てば優勝かと思ふところまで来ていました。以降は力尽き三勝三敗一分の情ない結果に終つたのですが精一杯やつたのだと誇らしげではありません。

2. 我々のサッカー

とにかく、下手の集りの我々ですから、チーム内の分裂は絶対おこさぬこと、バカのように忠実なプレーを心がけると(例えば、点を入れられるときはキーパー、バックス全員スベリ力尽きた状態で得点されるとか、ゴール前に流れたボールはゴールライン以上まで追いかけてゴールインさせろとか)、長所をのばす以前にサッカーをできるようにすること、(キック、トラップ、シューティング等)あたりが目標でした。

つまるところ、我々のサッカーは、スピードと激しさを追究し、華麗なボールコントロールによるプレーなど望めないものでした。

3. ささやかなアドバイス

前述のような状況なので、スキルフルな現役諸君へのアド

バイスなどおこがましいのですが、一言いわせていただきま
す。東大野球部の坪井前監督はよく「東大生には教えること
なんか何もないヨ。皆をよく知つてるヨ。ただできないだけ
なんだ。」といつてました。しかし、知つていてできないの
け非常に恥ずべきで、できるまで単調な反復練習を繰返すべ
きでありましよう。地道な練習こそ、強くなる道と優等生的
なことを言いたいと思います。

最後に、自分自身への宿題としても、先輩諸兄との活発な
交流も強くなる道と言えます。 終

昭和四十三年度

◎国立大会 6月

東大 4 1 1 水産大 一回戦
東大 1 1 1 (抽選勝) 学芸大 準決勝
東大 4 1 3 教育大 決勝

◎リーグ戦

9・30 東大 3 1 2 国土館大 (駒沢第三)
10・6 東大 2 1 1 青山学院大 (御殿下G)
10・14 東大 5 1 1 成城大 (御殿下G)

10・27 東大 1 1 1 学芸大 (御殿下G)
10・27 東大 3 1 1 日体大 (御殿下G)
11・3 東大 2 1 7 農大 (御殿下G)
11・11 東大 5 1 3 上智大 (御殿下G)

〔順位〕
①農大 6勝1敗 ②日体大 5勝1敗1分
③東大 5勝1敗1分 ④国土館大 3勝3敗1分
⑤成城大 2勝3敗2分 ⑥学芸大 1勝3敗3分
⑦青学大 5敗2分 ⑧上智大 5敗2分

◎その他の主を練習試合

3月 東大 3 1 2 全日本ユース代表
5月 東大 0 1 3 朝鮮大
5月祭 東大 1 1 2 法政大
7月 東大 3 1 2 京都教育大
8月 東大 1 1 3 古河電工
" 東大 5 1 1 三菱重工
" 東大 1 1 0 関学
9月 東大 2 1 2 早大
" 東大 2 1 1 朝鮮大

昭和四十三年度をふりかえつて

昭和43年度主将 藪内俊和

先代の小川恭さんから引きつぎをうけてから浅見監督を迎えて新シーズンがスタートしましたが、現在までの「浅見監督時代」の、僕たちは一期生にあたるわけです。僕達の代は、新四年生が人数が多く（十三名もいたのです）頭でつかちの部でしたが、優秀な新人も多く試合には、四年生よりも一・二年生の方が多く出る状態でした。

こうした人員構成の中で、僕達は、例年にくらべて技術的に特に秀でていた世代ではないと思いますが、練習試合などで、望外に良い成績をおさめることができました。春合宿で、ユース代表と引き分けたことや、夏に、三菱や関学に勝つたことは、僕達に一部校や一流チームへの距離感を縮め、自信をもつことができました。それ以降、東大も一部校に特にひけをとらない試合ができる伝統みたいなもののできたのではないかと思っています。

この他に、夏合宿の後で、朝鮮大に勝つたことも大きな自信を与えてくれました。僕が、大学へ入つて以来、毎年大敗を喫してきた相手でもあり、しかもアウェーの試合で主審も先方がやるという状況の中で、九十分間（一説には一〇〇分間）フルに斗かい抜けたことは、リーグ戦直前でもあり大へんタイミン

グがよかつたと思います。この頃には、チームの得点バターンや、守備体型が決まってきました。FWに俊足の俵や八林がおり、中盤に、キープ力のある上妻や小柳（望）がおり、BKには、ヘッドの強い武田、密着マークの巧い田代、安定した吉崎などがいたので、バックスが激しい当りて、相手をつぶし、中盤で、下がり目のウイングをやる黒沢や、上妻がボールをキープし、単純なロングパスから、俊足FWがゴールをねらうといったバターンが多かつたと思います。リーグ戦までには、「激しいプレー」をモットーとして、走力をつけることを目標として練習しましたが、今、振りかえつてみれば、単純なダッシュやインターバルの繰り返しだけでなく、一〇〇m走やクロスカントリーなど浅見監督の指導で、科学的な、体力づくりができたことが、プラスになつたような気がします。戸畑コーチに駒場の体育館で、サーキットトレーニングやウエイトトレーニングの指導をうけたことを思い出します。

さて、こうして、いよいよリーグ戦に入つたわけですが、例によつて毎週日曜になると雨が降るといふ天候で、半教以上が、雨の中のゲームになりました。リーグ戦で、忘れられないのは、明大グラウンドでやつた、対日体大戦です。前年のリーグ戦で、善戦しながら、僕の唯一の自殺点で敗れてしまつた苦しい思いのある相手であり、しかも二部校に、敗れたことのない強豪チームでもあり、非常に緊張しましたが、押されながらも、古村

昭和四十四年度

◎リーグ戦

9・28 東大5 1 2 (2 1 0) 成城 代々木

原代田崎木林柳井井妻 俵 村沢

小田武吉清八小戸桜上 古黒

10 東大3 1 0 (1 1 0) 学芸 駅沢第3

原丸田崎木柳林島井 俵 妻沢

小金武吉清小八鹿戸 上黒

10・12 東大3 1 0 (3 1 0) 青学 明大G

原木崎田島柳林村丸妻 井

小清吉武鹿小八古金上 戸

10 東大2 1 1 上智 代々木

原代木田崎島柳林丸沢 俵 妻井

小田清武吉鹿小八金黒 上戸

10 東大1 1 2 (0 1 0) 農大

原木田崎代島柳林井 妻沢村

小清武吉田鹿小八戸 上黒古

や友定がタイミングよく得点し、一度は追いつかれながらも、最後に俵が決勝点を決め、苦しかつたけれど、一生、忘れられないゲームを勝てました。僕は個人的には、一番うれしかった試合でした。もう一つ、忘れられないゲームは対農大戦でした。優勝候補の日本大に勝つたことで、若干、優勝を意識し、また気のゆるみもあり、試合開始早々から、得点を許し、ばん回でさぬまま、大量点を入れられてしまい、結局、惨敗してしまつたのです。長いリーグ戦の間、緊張感を維持することの如何に難しいか、悔やんでも悔み切れないゲームでした。数ヶ月にわたる長いリーグ戦の期間のコンディションの重要さは、今も変らないと思います。

僕達の年代は、東大斗争のさ中にリーグ戦を迎えねばなりませんでしたが、チーム内が、混乱することがなかったのは、部員一同の、サッカーへの情熱が、何ものよりも勝つたのだと思

います。貴重な、青春の一時期をサッカーにかけるのですから、「感

激性のある試合」をやるうてありませんか。

11・9 東大111 (011) 日体 御殿下

原島崎田木柳林井妻 代沢

小鹿吉武清小八戸上 田黒
3 CK 3
12 FK 4
8 CK 16
0 PK 1

11・16 東大210 (210) 国士館

原島田崎代林丸柳井 妻沢

小鹿武吉田八金小戸 上黒
4 CK 8
8 FK 5
10 CK 6
0 PK 1

〔順位〕

①東大5勝1分1敗 ②日体5勝1分1敗

③農大4勝1分2敗 ④上智3勝1分3敗

⑤国士2勝2分3敗 ⑥青学1勝2分4敗

⑦学芸2勝5敗 ⑧成城1勝2分4敗

〔入替戦〕 11・22 佐々木

東大017 中大

昭和44年度主将 武田 厚

私が卒業したのは昭和45年ですから、卒業後もうまる5年たつことになりました。サッカーは会社に入つてからも、姫路(新日鉄広畑)で続けていましたが、やはり一生懸命、真剣になつて取り組んだのは、学生時代でした。幸いなことに4年生のリ

リーグ戦で、2部優勝という快挙を遂げ、一部との入替戦に敗れましたが、充実した部生活を送れたと、今でも思っています。

この数年間、私の周辺も、また私自身も、随分と変わつたりして、めまぐるしく動きましたが、そして、そのためだと思えますが、あまり過去の記憶が定かでなくなつたように感じているのです。でも不思議なことに、リーグ戦のことだけでありませんが、学生時代のある部分については、まるで昨日のことのように脳裡にきざみこまれています。

ここでは、リーグ戦のことについて二つ書くことにしましょう。その一つは、昭和44年秋のリーグ戦第一戦の成城大学との試合です。ちよつとその情景を再現してみましよう。

秋晴れの佐々木公園サッカー場。日曜日なので比較的人が出ていて、子供達もはしやぎ回っている。少しはげたところもあるが、全体としては、芝生の状態もよく、ゲームコンディションはめぐまれていた。13時キックオフ。昭和44年度秋のリーグ戦第一戦は、成城大と東大のキックオフで開始された。開始早々東大は攻めこみ、左コーナーキックから、混戦となり、相手バックスの反則でPKを得た。キッカーは名手小柳。慎重にいけよ!と浅見監督から声がとぶ。ところが開始5分足らずでまだ気分的にも、肉体的にもリラックスしておらず、キックはゴールをそれてしまつた。しかし、敵GKの動きが早く、アゲイ

ン。小柳は「自信がない。」というふうに私の方を見る。「よし。」といつて今度は私がキッカーとなつた。勇んで蹴つたボールはGKの正面へ、ところが敵もさるもの、大きく前へけじいた。タイミングよく走りこんできた小柳がシュート!と思つたらまたまたゴールからそれてしまつた。私と小柳は思わず顔を見合せて、濟まんすまんといひながらハーフラインの方へ小走りて戻る。すると浅見監督が大声で怒鳴つた。「何をしてゐるんだ。失敗してニヤニヤ笑つてるやつがあるか!」一瞬ギクツとした。相手の成城大は、あらゆる点で東大よりスケールが小さく、慎重に戦えば、勝つのが順当なチームであつた。しかし、余裕をもつて勝てる程の力の差はなかつた。ましてやリーグ戦の緒戦である。必死になつて向かつてくる敵に、生半可なことで勝てるわけはないのである。

少なくとも試合前そのような主旨の注意は自分でもチームの心構えとして確認したはずであつた。これはいかに……

この成城大とのゲームは結局5対2で東大が勝ち、幸先よく緒戦を飾つたわけですが、このゲームが強烈な印象を残したのは、俵選手の素晴らしいシュートでも、グラントの限にいた私設応援団のせいでもないのです。それは、まぎれもなく浅見監督の声です。これは結果論ですが、あの手、優勝した原因は、いくつかあります。例えば、小柳、上妻、俵、吉崎、黒沢、田代、……名前をあげればきりがな程優秀な（それぞれ個性

的な）選手がそろつていたこと。一年生が入らず、チームが小じんまりとまとまつたこと。（実はこのことがその後数年間の東大サッカー部に大きな影響をもたらしたのですが）浅見監督というよき指導者をえたこと。等々です。でも、私にはこの第一戦の勝利は、確実に優勝の原動力となつたと思えるのです。それも、スカツとした勝ち方をしたということがです。なぜなら、大学リーグのチームは、いくら強いとか、安定しているといつても、他校と比べてそれ程大きな力のあるわけではありません。確かに釜本、森のいた早大は強かつたけれど、そんなチームは全くの例外です。しかもリーグ戦は各校との一発出たとこ勝負です。若いはちきれんばかりの力をぶつけ合つて勝敗を競うとき、やはり波に乗ることは大事です。

あの時の東大は、成城に2点を許しましたが、青学、学芸と完封し、上智にも1点どまりで4連勝しました。この時点でライバルの日体は学芸に、農大は国士館にそれぞれ完敗していたのですから、2位以内はほぼ確実となつていたわけです。

最終は、日体大が農大に勝つて、得失点差で、東大の優勝が決まつたときも、終わつた、さて入替戦だという気持の方が強くて、優勝の喜びはそんなに印象に残つていないのは、そして、第一戦のPKの失敗が、焼きついて頭から離れないのは、こうした感情があつたためなのでしょう。

さてもう一つ、忘れようと思つても忘れられない入替戦につ

いて書くことにします。

前日来の雨は上がつたものの、佐々木公園サッカー場は、肌寒く、水を含んだ芝は、サッカーのスパイクで踏みつけられるのを嫌がつているようだった。11月の雨上り、寒さにもめげず、両校OBと関係者は続々とつめかけ、入替戦の雰囲気は、やはり一種異様なものがあつた。東大イレブンは、前日検見川の合宿所を引きあげ、調整に怠りけなく、必勝を期して臨んだ。先発イレブンは、リーグから不動である。各選手の調子もよく、実力を出し切れば、必ず良い結果が出るものと信じているようだった。試合は中大のキックオフで始まつた。午後1時である。思惑どおり、やや上がり気味の上妻とやや下がり気味の小柳、両ハーフから、黒沢、戸井の両ウイングへのオープン攻撃に、時折、俵を使つての大きな良い縦パスで中大陣内に攻めこみ、開始後もなく、数度のチャンスが到来した。しかし、試合の雰囲気には、まれ、やや堅くなつてか、思い切りのよいシュートが出ず、得点には至らなかつた。ところが、前半15分、東大に致命的な事故が起きた。上妻が右サイドからドリブルでもちこみ、ペナルティエリアに切りこんでセンターリングのかまえに入つた時である。中大BK須佐のスライディングタックルで上妻は転倒、退場した。

その直後である。中大ハーフ安藤が、東大陣ペナルティエリア手前、約5m位のところから、ゆつくりとした山なりのシュ

ートをうつと、GK小原の、後退しながらさし出す手の上をこえて、ゴールへ……。

中大はやラツキーな先取点である。水を含んだ芝にGKは足をとられたことと、東大バックは、安藤へのタックルを一瞬、ちゆうちよしたときのスキをつかれた形となつた。

この1点が流れをかえてしまつた。中大は試合開始から堅くなり、自信なげなプレーが目立つたが、一転して、旺盛な走力と、積極的なシュートで、攻撃的になつた。一方上妻を欠いた東大は、やや消極的になり、守勢に回つた。そうしているうちに2点目を奪われた。

要するに、こうして、東大の一部昇格の夢は、無惨に打ち碎かれたわけです。今でもときどき苦笑するのですが、入替戦の話をしていると、不思議と当時の中大の主将の田中、副将の岩崎、の両選手の顔と、GK外山のおどおどしたプレーが浮かんでくるのです。田中、岩崎両選手とは、前年(昭和43年)の主将合宿のとき、同じグループで練習したこともあり、東北出身の、人のよさそうな人物で、見かけのぶつきらぼろと裏腹に、好感をもつていたので、試合中の彼らは、必死でした。それからGK外山は、彼がユースのとき、検見川での春合宿で試合をしたりして、その勇姿を記憶していたので、中大のゴールは固い、と思つていたので、ところが、試合が始まると、見ると聞くとは大違い。東大のFWのすごさがそれ程聞こえて

いたのか、入替戦の雰囲気、特にOBの力に圧倒されたのか、キヤッチングも、キッキングも、ポジショニングも、いいところがありませんでした。上妻が倒される前、もつと思いつてシュートを打つていればと、今でも時々手に汗することがあります。どこにもかくにも、こうして、昭和44年のリーグ戦は終わりました。私は全力を尽くしたのですが、やはり悔いは残りました。そしてその悔いを後輩に託しました。何とかして一部に！ただそれだけを祈つて、姫路に発ちました。

昭和45年夏に東大チームは広畑に来て私の属するチームと試合を行ない、結果は3対3の引分けでしたが、いかにもたくましく、個人技術のレベルも高く、たのもしく感じたものです。だつてそうでしょう、優勝メンバーの中から吉崎と田代と私の3人が抜けただけなのです。残つた選手が、ひたむきな努力をすれば、絶対に勝つはずだ、と信じて疑いませんでした。ところが現実には、勝てませんでした。今のサッカー部をみると、上妻も僕も、小柳もいません。彼らが揃つていたときでさえ勝てなかつた！

この調子で話を進めていくと、何とも暗い答が出てくるのですが、どつこい、学生リーグのおもしろいところは、そうした顔ぶれでは片付けられないことにあるのです。

昭和47年の関西社会人リーグで、新日鉄広畑が、わずか15名の選手（それも、ほとんどが無名の）で、前後期14試合を戦つ

て優勝したこともあります。

東大に第2の小柳を得るのは、昭和何年になるのかわかりませんが、それでもリーグ戦は戦わねばなりません。私はちょうどめぐまれた時期に学生生活を送らせてもらい、本当に幸運だったと、浅見先生はじめ、諸先輩、同輩、後輩諸氏に感謝しています。

時代に反して、やはり精神論に走りかかつてしまいました。こうしてみると、私もまだ、闘魂を失っていないのだと自覚しています。（昭和50年3月17日）

昭和四十五年度

◎七大戦 決勝で名大を2-1で破り優勝

◎リーグ戦 御殿下

9・19 東大0-1（0-10） 成城

メンバー不明

9・26 東大0-10 学芸

原井木 辺島柳妻井 井原丸村

小栢清 渡鹿小上戸 桜笠金古

10・3 東大 3 1 0 (2 1 0) 青学

原木島妻柳村沢 井原 儀

小清鹿上小古黒 桜笠戸

10・11 東大 1 1 1 (1 1 1) 国士

原木島辺松妻柳 井井沢

小清鹿渡赤上小 桜戸黒

9 CK 2
13 FK 12
5 GK 8

10・18 東大 1 1 2 (1 1 2) 上智

原木向島松妻柳 井丸沢井原

小清大鹿赤上小 桜金黒戸笠

10 CK 3
12 FK 13
8 GK 8

10・24 東大 3 1 0 (1 1 0) 農大

原(乾)向島木辺松柳沢妻 井井

小(大鹿清渡赤)小黒上 戸 儀

5 CK 5
17 FK 21
8 GK 10

11・1 東大 1 1 3 (0 1 1) 日体

原木松井向上辺島柳沢妻 井

小清赤栴大井渡鹿小黒上 桜

7 CK 5
11 FK 12
5 GK 10

〔順位〕

①日体 7勝 ②上智 4勝 1分 2敗 ③成城 3勝 2分 2敗

④東大 2勝 2分 3敗 ⑤学芸 2勝 2分 3敗

⑥農大 3勝 4敗 ⑦青学 2勝 1分 4敗

⑧国士 2分 5敗

昭和四十六年度

◎春季對抗戦 5・1 5・5

東大 1 1 1 (0 1 0) 法大 法大 G

原向松原木沢本田村 妻井

小大赤笠清黒山内古 上戸

5 C 3
11 F 11
? G ?

東大 1 1 2 (1 1 1) 学芸大 学芸大 G

東大 0 1 4 (0 1 4) 中大 御殿下 G

◎国公立大会 6・13 27 農工大 G

東大 3 1 0 (2 1 0) 水産大 二回戦

東大 1 1 0 (1 1 0) 学芸大 準決勝

東大 1 1 2 (0 1 0) 教育大 決勝

◎リグ戦

9・18 東大111(010) 学芸大

御殿下G

乾

木松原田村妻沢 田木井
清赤笠内古上黒 柴佐々戸

6 C 3
18 F 20
12 G 9

9・26 東大212(211) 農大

乾 沢木松原田村妻沢 田木中
(吉清赤笠内古上黒 柴佐々山)

9 C 4
17 F 15
6 G 19
0 P 1

10・2 東大011(011) 国士館大

沢木松原島村妻中沢 田木井
吉清赤笠手古上山黒 柴佐々戸

4 C 8
14 F 18
13 G 10

10・17 東大110(010) 拓大

沢丸田原木松村妻沢 田井
吉金内笠清赤古上黒 柴戸

3 C 9
11 F 13
20 G 13

10・24 東大112(111) 明大

沢木向丸原松妻村沢井木 田
吉清大金笠赤上古黒戸 柴

4 C 2
13 F 7
17 G 14
1 P 0

10・31 東大111(010) 上智大

沢木向丸原田松村妻田 井
吉清大金内赤古黒上柴 戸

4 C 5
13 F 11
10 G 2

11・6 東大110(010) 成城大

乾 木原丸向松村田妻沢田 井
清笠金(大赤古内上黒柴 戸)

7 C 6
25 F 11
5 G 13

〔順位〕

- ①明大5勝2敗
- ②農大3勝1敗3分
- ③上智大3勝2敗2分
- ④東大2勝2敗3分
- ⑤学芸大1勝2敗4分
- ⑥拓大1勝2敗4分
- ⑦成城大2勝4敗1分
- ⑧国士館大2勝4敗1分

昭和四十七年度

◎春季對抗戦

4・22 5・6 御殿下G

東大111(111) 中大

沢妻田原田辺藤中木名田
吉上内笠三山遠山佐田柴

6 C 1
11 F 15
7 G 14

東大015 (012) 日体大

東大013 (011) 拓大

◎国公立大会 6・11 24 検見川及御殿下G

二回戦 東大410 (210) 都立大

準決勝 東大513 (312) 学芸大

決勝 東大310 (010) 教育大

◎リーグ戦 9・30 11・11 御殿下G

9・30 東大111 (010) 学芸大 (学芸大G)

沢中野原野田(野)妻村木田武辺

吉山三笠天内(野)小上植佐柴官山 8C5 10F14 10G11

10・8 東大013 (012) 拓大

沢中野谷田田妻村木田武 4C6 4F9

吉山天南三内上植佐柴官 4C7 4F4

10・15 東大310 (210) 成城大

沢中野田(野)原田妻村木田武

吉山天(野)小笠内三上植佐柴官 7C9 20F17 16G8

10・22 東大214 (213) 国士館大

沢中野原野田(野)田妻村木田武川

吉山天笠内(野)小三上植佐柴官荒 3C6 19F20 12G8

10・29 東大511 (211) 立大

沢中野原野田(野)妻村木田武

吉山天笠内三上植佐柴官 10C9 10F10 13G7

11・4 東大113 (011) 農大

沢妻田原中野田(野)谷村田木藤田武

吉上内笠山(野)小南植三佐遠柴官 5C1 18F14 9G12

11・11 東大011 (011) 上智大

沢中野原野田(野)田妻村木藤田武谷

吉山内笠(野)小三上植佐遠柴官南 3C1 13F14 12G15

〔順位〕

①農大6勝1分 ②国士館大5勝2敗 ③学芸大3勝2敗2分

④拓大2勝3敗2分 ⑤成城大2勝3敗2分

⑥上智大3勝4敗 ⑦東大2勝4敗1分 ⑧立大5敗2分

◎入替戦 11・25 駒沢競技場

東大 4 1 3 (2 1 3) 明学大
 沢中 野原 田田 妻村 木田 武
 吉山 小野 天笠 内三 上植 佐柴 官
 5 C 6
 17 F 13
 9 G 13

昭和四十八年度

◎春季對抗戦 4・22 5・3 法大 G

東大 0 1 2 (0 1 1) 法大
 沢中 原崎 木田 田川 藤名 辺 武園
 吉山 笠尾 佐々 三内 荒遠 田山 宮御
 10 C 5
 5 F 12
 6 G 11

東大 0 1 1 (0 1 1) 教育大
 東大 1 1 1 (1 1 0) 拓大

◎国公立大会 6・3 17 教育大 G

東大 3 1 0 (2 1 0) 教育大
 準決 東大 5 1 2 (0 1 1) 学芸大
 決勝 東大 3 1 2 (0 1 0) 東工大

◎天皇杯関東一次予選

8・26 東大 4 1 1 (3 1 0) 宇商 O B クラブ (御殿下 G)
 沢野 原中 井木 田辺 名村 藤 武田
 吉天 笠山 森佐々 内山 田植 遠植 官柴
 2 C 8
 3 F 5
 7 G 9

9・2 東大 3 1 0 (2 1 0) 拓大 (御殿下 G)
 沢野 原中 木川 辺村 藤 武田 中 森
 吉天 笠山 佐々 荒山 植遠 官柴 田池
 4 C 5
 14 F 15
 8 G 4

9・16 東大 2 1 0 (0 1 0) 日立水戸勝田 (笠松運動公園)

沢野 原中 木田 中 藤川 村 武田
 吉天 笠山 佐々 三田 遠 荒植 官柴
 4 C 7
 16 F 20
 13 G 2

◎同 二次予選

11・11 東大 1 1 1 (延長) 法大 (西ヶ丘球場)

PK 4 1 5 で負け。

沢野 田崎 中木 田川 原 藤 村 辺 武
 吉天 柴尾 山佐々 内荒 笠遠 植山 官
 17 C 0
 14 F 12
 8 G 12

◎リーグ戦

9・29 東大112 (011) 日大〔御殿下G〕

沢野原中木川村田藤井中田武

吉天笠山佐荒植三遠森田柴宮

3 C 5
11 F 10
7 G 9

10・7 東大112 (012) 拓大〔御殿下G〕

沢野原中木田井藤川辺中田武

吉天笠山佐三森遠荒山田柴宮

7 C 5
10 F 8
7 G 6

10・10 東大111 (010) 農大〔御殿下G〕

沢野崎田中田木川辺武藤

吉天尾柴山内佐荒山宮遠

13 C 2
9 F 11
3 G 13

10・14 東大110 (010) 東京学芸大〔御殿下G〕

沢野崎田中田木川井藤武辺中

吉天尾柴山内佐荒森遠宮山田

5 C 13
18 F 11
13 G 7

10・27 東大611 (311) 成城大〔御殿下G〕

沢野崎田中田木藤辺井武村中

吉天尾柴山内佐遠山森宮植田

8 C 8
20 F 18
7 G 7
1 P 0
(1)

10・31 東大211 (010) 上智大〔西ヶ丘補助G〕

沢野田崎田中田木藤辺武村井

吉天小尾柴山内佐遠山宮植森

12 C 9
14 F 14
7 G 15
0 P 1
(0)

11・4 東大112 (011) 順天堂大〔御殿下G〕

沢野田崎中田木川藤中武村辺

吉天柴尾山内佐荒遠田宮植山

7 C 7
10 F 16
9 G 4
0 P 1
(0)

48年度リーグ戦の思い出

昭和48年度主将 笠原 昌行

48年度のチームについて語るには、まず47年度のことから始めなくてはけない。

47年度は、僕たち(45年度入学生)の上の学年が入試中止でいなかつたため、残つてくれたキャプテンの上妻さんを除いては四年生がいなという特殊な状態であつたため、リーグ戦においても苦戦を強いられ、東大サッカー部史上初めて3部との入替戦に臨むことになつた。そして実に苦しい試合であつたが、113とリードされたのを413にひつくり返して勝利を握つた。

48年度のチームが出発したのけここからである。前年度のメ

ンバトがそのまま残っていること、そして、入替戦の経験から得た、どんな苦しい状態でも頑張れるんだという（自惚れでなく）ある種の自信といったものから「今度は絶対に上の入替戦だ。」という気持ちで練習に取り組んでいた。

この年は浅見監督のほか、小山さん、北川さん、八林さん、古村さんがコーチ陣に加わって下さったため、練習をよく見てもらえて、密度の濃い練習が出来た。古村さんなど鬼の古村という渾名がついたくらいだ。僕としても、その分ブレイに専念でき、かなりのびのびやれたように思う。

48年のチームは、いわゆるリングマンタイプの選手がいなかつたため、中盤を4人にして攻撃の厚みを作り、守備の時には少なくとも2人はバックラインまで下がって来るという3・4（2・2）・3・1という変則システムで戦った。リーグ戦前までは、天皇杯予選を勝ち抜いたりして好調であつた。しかし、いざ秋のリーグ戦が始まってみると、緒戦日大に1-2、第二戦は天皇杯の予選で3-0の勝利をおさめている拓大に1-2と連敗。いい試合をしていながら、もう一押しが足りず、逆にそれまでうまくカバトできていたバックラインが、くずされているわけでもないのに、なぜか、うまいぐあいに点をとられてしまふ。何とも悔しい負け方である。拓大戦のあとで、みんな気分を新たにして、出直そうということで、「山下」で御馳走をしてもらつた。これは僕たちのあせり、迷い、気の滅入りを

吹き払うのに何がしかの効果があつたようだ。

しかし、何たることか。キャプテンという責任ある立場にありながら自分の不注意からけがをしてしまい、以後出場不可能みんなには大変な迷惑をかけてしまふし、自分が情無くて、本当にまいつたタヌキという感じでした。僕はバックの真中をやつていたので、急ぎよスイーパーシステムに変更して第3戦以降を戦うことになつた。

「山下」で飲んだ酒がきいたのか、それとも東大のサッカーというのは追い詰められてはじめて力が出るのか、以後、最強と目されていた農大とは1-1の引き分け、学芸、上智、成城と破り、最後の順天戦に勝つては2位というところまで来てしまつた。決して楽な勝ち方ではなかつたが、勝利の女神が微笑んでいるという感じであつた。この間、試合を外から見ていると中からだけ気がつかなくつたことも判つてくる。しかし何とも心臓が悪い。僕がいけない方が強いじやないかとひがんでみたが、ひがむのがうれしいなんて初めてのことである。

最終戦は、残念ながら力尽きたという感じで1-2で惜敗。

勝3敗1分、勝点7で4位であつた。

昭和四十六年度リーグ戦雑感

昭和四十七年卒 官 路 康 利

最終戦、対成城大、試合終了の笛が鳴る。勝った、これでやっとのこと下の入替え戦出場からは免れた。星勘定は二勝三敗三分勝点七で第四位である。リーグ戦開幕前には、予想もしなかった残念な成績に終わった。目指す一部入替え戦出場はならなかったのである。

緒戦、学芸大、個々人の力、組織力から見ても当然勝つと思われ、春の国公立戦でも順当に降した相手、しかし〇―一とリードされ浮足立った。が新入生柴田の豪快なミドルシュートにより、なんとか引分けに持ち込んだ。

第二戦、農大、雨中の体力を消耗する戦い二―〇とリードしていたが後半雨が強くなり最悪のコンディション、キック力の差が如実に表われ、攻められ通しとなるが引分けにおさえた。

第三戦、国士館大、ここで浅見監督は、沈滞気味なチームのムードを変える為、バックスに根性の男手島を起用した。しかし、チグハグな攻撃、ちょっとした気の緩みで得点を与え、相手の早い動きに調子が合わず〇―一で敗れた。

第四戦、拓大、相手の拙劣なチームプレーに助けられ一―〇の辛勝、初白星を上げたが詰め甘さ、シュートミスなどが目立った。しかし、どんな勝ち方でも、勝負である以上勝ちには勝

ち、初勝利により気分若干のゆとりが出来、ムードが明らかになってきた。

第五戦、明治大、勝敗を別とすれば、この年のリーグ戦の中で、我々が、最も納得のいく形で試合ができたのは、この対明治戦ではなからうか。この前年一部より陥落した明治は、やはり個人技にかなりのものを持っていたし、チーム全体としても戦術のある訓練された試合巧者であった。我々は、彼ら個々人及び戦術を研究し、一泡吹かせてやろうとした。試合では個々人が自分の力を充分發揮しチーム全体としても一丸となってほぼ互角に戦った。結果は、明らかにミスとも言える審判の判定により、上妻がペナルティキックを取られ、惜しくも一―二で敗れ、星勘定は一勝二敗二分となったが、この試合に負けたからといってムードが悪くはならなかったし、かえって自信を深めた様に思われた。

第六戦、上智大、前週より盛り上がったムードをそのままぶつけて勝とうとしたが、残念乍ら波に乗り切れず一―一の引き分けに終わった。相手ゴールキーパーの頑張りだけが印象に残っている。

こうして最終戦、カド番に立たされ全員緊張のうちに臨んだ。勝てば入替え戦を逃がられる成城大は、反則気味の荒っぽいプレーで向かってくる。時々相手の気迫に押されそうになるが、個人技戦術に優れる我々がどうにかこうにか一―〇で逃げ切っ

た。

以上、記憶に留まっていたリーグ戦の印象を書いて来たが、何と言っても、勝つ事の難かしさが今更の如くひしひしと感じられる。結果を見ると、引分けが多く、負けた試合も全一点という僅差である。そして明治を別にすれば、体力、技術、組織力において我々が劣るというチームは無かった、いや優れていたと言っても過言ではないと思う（私が見た限りでは）。それでも勝てなかった。

リーグ戦は一戦一戦真剣勝負だ。負けたチームは、下位リーグへ陥落しなければならぬ。各チームとも背水の陣を敷き、必死になって勝とうとする気迫と気迫のぶつかり合いである。多少の事では相手も点を取らせてくれない。ボールへの寄り、執念が思わぬ所でチャンスを与えてくれるし逆にちよつとした気の緩みで得点されることもある。精神的な集中力、気迫に支えられて初めて個々人の技術が発揮され、それに基づくチームも素晴らしいものとなってくる。

こうした真剣勝負に臨む、個人個人の厳しさ、チームワークは一朝一夕にして成るものではないだろう。日頃の練習や試合の積重ねであろう。欠点があれば指摘し合い、時には厳しく叱責する必要がある。自分で満足していても他人のアドバイスで思わぬ欠点が暴露される事がある。それを徹底的に改める事である。チームメイトに相談しても良いし、素晴らしい監督コ

ト陣が控えているのだから彼等に相談を持ちかける事である。チームメイトは協力を惜しんではならない（監督コーチ陣は多忙であるからこちらから積極的にアドバイスを求めなくてはならない）。しかし如何に良いアドバイスがあってもそれを実現するのは自分自身である。日頃の練習に於ても常に意識しながらプレーしなければ駄目である。こうした中から厳しさは自然と生まれてくるであろうし、個々人の癖も分かかってき、例えばAにボールが飛んだらどちらに向かってトラップし、キープ力とキック力があるから、ここへ走り込んだらきつとボールをくれるだろうといった様を、確率の高い連繫プレー、チームワークも生まれてくると思うのである。厳しさとやさしさの調和の中に素晴らしいチームができるであろう。

リーグ戦の回想から始めて何やらとりとめのない夢の様な事を書いてしまった。しかし、言うは易く行は難し、行は本当に難し。かく言う私も、マネジャーであり、実際に選手として出場する事はできなかったのであってやはり選手としては厳しさが足りなかったであろう。マネジャーとしてチームに貢献できたという自負はあるが。（この部分蛇足乍ら付け加えておきたい。）

現役諸氏、サッカーを何よりも愛する諸君好きなら勝とうではないか、勝つ事に全知全能を向けよう。折角持ち合わせた明晰な頭脳を宝の持ち腐れにする事はない。君等の為には我々は援

助を惜しまない（聊か大風呂敷）。

最後にしつこい様だが今一度、「行方事は本当に難し」これを身を以って自覚するところから勝利への精進が始まる。

東大―京大定期戦の歴史

年次	対戦相手	結果	昭和	東大	京大
大正13	東大1―12	京大	39	0	12
14	東大1―11	(1―1) 京大	40	1	11
15	中止		41	1	11
昭和24	東大1―11	(0―1) 京大	42	3	11
25	中止		43	3	10
26	東大4―11	京大	44	1	11
	(東大教養 1―11 京大新制)		45	3	12
27	東大1―13	(1―1) 京大	46	1	11
28	東大8―12	(6―1) 京大	47	1	10
29	13―10	(5―1) 京大	48	2	12
30	6―10	(3―1) 京大	49	1	10
31	3―3	(1―1) 京大		1	10

通算成績は、東大12勝4敗11分である。

大正15年の定期戦中止のいきさつについては、竹腰氏とのインタビューを参照されたい。

IV 追悼

亡き友を偲ぶ

昭和二十三年卒 高崎達也

今度、新しく送ってきた東大ア式蹴球部の名簿を見ると、僕の周りから三人の仲間が最近、相次いでこの世を去り、末尾の逝去者欄に移されたのを改めて知らされ、戦争直後の困難な時期に一緒にボールを蹴っていた我々にとっては痛恨であり、改めて三人の魂の御冥福を祈る次第である。

神に召された三つの斗魂は、遠山直道（二十三年）、本永成一郎（二十六年）、三上一郎（二十一年）である。

三上はFWのインナーとして独特なクセの多い動きで敵を制圧し、本永は瘦身ながら熱烈なファイトでGKとしてゴールを死守し、両君に対する思い出も数多くあり何れの機会かに紹介したいが、今回は小生と全く同時期に入学し、卒業した遠山を中心とした思い出を書くこととする。

遠山君は僕と全しく一九年に入学したが、戦争のきびしい真最中で、サッカー等勿論禁止された時代であり知る由もなく、彼を知ったのは昭和二十一年暮頃であった。

昭和二十一年の秋、敗戦と言う大きな虚脱感の中で平和をとり

もどした大学には学徒動員、疎開などから学生がポツポツ戻って来た。極端な物資不足、食糧難の時代であったが、ボールへの郷愁絶ち難い連中が御殿下のグラウンドに何となく集り、古いボール、古いスパイクをとり出して練習試合を始めた。これが戦後のサッカー部復活の基盤となった様に思われる。

遠山は文科系であったが年令の点で幸運にも兵役は免れたようである。遠山は旧制府立高校時代からOFとして活躍していたらしく、この頃の練習試合でもかなり自信溢れたプレーをしていた。翌二十一年の二月には戦后始めて公式試合として、西宮で東西対抗が行われ、学生選抜には東大から過半数の六名（三上、遠山、本城、不破、二宮、高崎）が選ばれて関西に遠征した。その時は学生選抜、OB選抜ともに引分だったように記憶している。

遠山はセンターフォワードとして主要なゴールゲッターの役目を担っていたので、常に相手チームからもマークされ激しくけずられ（今で言うボディチェック）ていたが、びっこを引きながらも練習を休まず持前のファイトで技術の向上に打ちこんでいた。僕はバックでフォワードとの対一の練習では遠山とも数限りなくぶつかり合いの練習を繰り返したが、お互いに相手のクセを呑みこんでいるのでフェイントのかけ方も次第に複雑さを増し、サッカーがサイコロジカルな斗いであることを体得した時代でもあった。負けず嫌いな彼は、きびしいコー

チ陣（横山・有馬先登）からボールコントロール、シュートなどで辛辣な注意を受けると、それを克服するため人一倍研究熱心となり、グラウンドの練習以外でも良く議論を持ち出して技術のレベルアップに努めていた。

彼は人も知る日興証券遠山社長の御曹子であり、戦後の混乱期でも経済的に極めて恵まれた環境に育ったが、よごれたユニフォームの洗濯、古いスパイクの修理にも熱心でチームの誰かにも好かれ、人間的にも完成された感じであった。

また、彼はサッカー仲間には珍しく文化人で音楽家の兄の影響を受けて、コーラスが得意であり山中湖や、水戸等の合宿練習の時など夜になると、難しい歌を仲間に教えてハーマニーを作り出そうとしていたが、これは相手が悪く不成功に終わったようである。しかし、昭和二二年二月には音楽家の兄さん達と宗教音楽研究会なるものを設立して合唱団の運営にもかなり努力していた。合唱団のメンバーを集めるため、東大サッカー部員も応援にかり出され、サッカー選手は運動神経が発達しているから、音楽的センスは抜群であると、おだてられて、そのまま合唱団メンバーに居座って音痴に苦しんだ選手も若干いたようである。

サッカーが今程人気化していない当時は、公式試合といっても観客は少なかったが、今の時代に若し遠山がセンターフォワードとして出場していれば、彼のバランスのとれたスタイル、

端正なマスク、斗魂溢れるプレー振りで釜本に匹敵する位の人氣を拍していたものと思われる。

サッカーに培われ、音楽を愛した遠山君も大学を出てから、実業界に身を投じ、持前のファイトとすぐれた教養を身上として、いろいろな方面に派手を活躍を続けてきたが昭和四八年三月、パリ郊外の航空機事故に遭って、非情なタイムアップの笛となった。

友よ、君は人生の九〇分を悔いなく立派に闘い抜いた。我々は君の果敢、華麗なプレイに対して惜しみなき拍手を送りたい。ゆっくり疲れを安めてくれ給え。

沖邦雄君を悼む

昭和四二年卒 見米 絃一

世の中の出来事は皆突然に起るのが真理なのかもしれない。人間がいかに英知をもって未来を見つめても現実突然我々の足元の大地を失なわしめる。

沖邦雄君の突然の訃報に接し、非常な衝撃を受けました。否僕よりもむしろ沖君の御両親、奥様の驚きと悲しみはいかばかりであったかと、察して余りある感が致します。

思えば彼との交友は大学四年間、ボールを通じての付き合いか

ら、卒業後、時には飲み、時には励し合い、十年以上になりま
す。彼に初めて会った時の印象は正直いってあまり強くありま
せんでした。彼には特に目立って人の注目を集める様な面はあ
りませんでした。しかし彼と付合って行くうちに、自然と彼の
暖かさ人間味に魅れていってしまうのでした。彼は一緒にいる
と、人を安心させる不思議な魅力を持っていました。

大学四年間、特にサッカーと一緒にやった仲間については、
一人一人いろいろな思い出が有ります。青春のエネルギーをぶ
っつけ合った仲間ですから、その印象は何ものにも増して強烈
で、比較できない程、鮮明なのでしょう。人により、激しい気
性の者もあれば、冷静な者もあり、彼はどちらかといえば後者
の方で、チームの良きなだめ役に回っていました。また一面頑
固なところもあり、部生活の規律については厳しい方でありま
した。

むしろ彼はサッカーに対し非常な情熱を持ち、若者がついや
りたがるスキーや車などは余りせず、スポーツとしてはサッカ
ーを一番とし、愛していたようです。

卒業後、彼は三菱化成黒崎工場に五年間程勤務していました。
その間僕は東京でしたので手紙のやり取りの他、余り会う機会
もありませんでしたがしばらくして、サッカーの全国社会人大
会に富士通のチームの一員として島原に遠征した際、第一戦が
三菱化成黒崎チームで、その時、我々のチームは相手を押し続

けていたにもかゝらず、逆襲で一点ゴールされ敗れたことを
記憶しています。その折彼に会えると思ひ楽しみにしておりま
したが、残念ながら仕事の都合で来ておらず会えずじまいでし
た。

その後、彼は東京に戻り一年程して結婚されましたが、美し
い奥様とならんだ幸福そうな彼の姿が今でもありありと脳裏に
浮びます。結婚後、彼のアパートへウィスキーをぶらさげて立
寄った事がありました。その時はもう御長男が誕生され五、六
ヶ月程経った頃で当時僕は独身でしたので、彼がすでに一家の
長として落着かれています姿を羨ましく思ったことを覚えていま
す。

サッカーという競技は十一名でチームが成っているわけです
が、我々の仲間は同期で丁度奇しくも十一名で、同期の者が全
員集まれば一チーム出来、いつでも試合が出来たわけです。勿
論卒業して何年も経ってしまえば、各々、離ればなれて、一堂
に会することも少なくなり、年をとれば動きも鈍くなって来ま
す。それでも、いつか一緒になれば、どんなチームでも同期で
一チーム出来る、という何とも言えぬ安心感がありました。し
かし、ここで沖君が逝去され、同期一チームができるというこ
の安心感はもろくも崩れ去り、言い知れぬ寂しさを感じざるを
得ません。

昨年十一月の葬儀の日、我々は集まれるものは皆集まりまし

た。焼香の際、少し横を向いた彼の普段のまゝの写真を見て、誰もが涙をとどめることが出来ませんでした。未だ三十才を少し出たばかりの若さで、これから多くの野望を持ち活躍しようとする時に、生を断られた無念さはどんなものであったかと思いやられます。まだとても故人とは思えない。今でも「オウ！」と声をかけ、手を上げて笑って現われて来そうな沖。彼の遺志の十分の一でもかなえてあげられたら……。そんな気持でいっぱいです。サッカーボールを小脇にかかえ、スポーツ刈りの顔でニコリ笑っている彼の顔がいつまでも僕の思い出から消えません。沖君の御冥福を心からお祈り致します。

同期一同にかわり

昭和五十年二月十八日

4・6 東大110 (010) 東京学芸大(東大G)

4・7 東大012 (011) 上智大(東大G)

いづれも、去年関東二部、現在東京一部の二校とやったが、学大には辛勝。上智には、ほぼ完敗といっている内容だった。

合宿休み後、二日間しか練習をしておらず、「試合をやりすぎる」との声高し。

4・18 東大111 (010) 埼玉大(東大G)

戦術的には埼玉の方が上であつた。

4・14 東大214 (211) 横河電機(東大G)

一軍半のメンバーだったが、だらしない逆転負け。

《春季対抗戦》

4・21 東大311 (011) 教育大(東伏見G)

沢野 中崎 中森 田川 藤辺 村武

吉天 田尾 山池 小野 柴荒 加山 植宮

3 C 1 3
1 0 F 1 1
5 G 1 2

雨が降り、水びたしのグラウンド。前半三四分マークのずれから、痛い失点をしたが、後半、粘り強い攻撃から官武が

二点、山辺が一点をとり、気力の逆転勝ちをおさめ、春季対抗戦初勝利をあげる。柴田をHBに下げ、滝井のマークにあてたのが成功。中盤からの早いチェックと、「雨の日

のサッカー」を心得た東大の快勝したゲームであつた。

4・28 東大010 (010) 早大(東伏見G)

沢野 田崎 中田 森川 辺村 武

吉天 柴尾 山田 小池 荒山 植宮

1 F C 3
1 8 F 1 4
4 G 1 6

先週とはうって変わった最良のグラウンドで、学生チャンピオンの早大と堂々と引分ける。田中を確井につけ、ソートの布陣で、とにかくガッチリ守り、カウンターアタックで攻める戦法でスタート。この作戦通りに試合はすすみ、後半、山辺のセンターリングを田中が見事なボレーシュートを決めたが、言われのないオフサイドをとられ、勝ちをのがす。早大のコーチも負けを認める位で、東大の会心の試合であつた。

5・3 東大111 (010) 青山学院大(東伏見G)

沢野 田崎 中森 中田 辺川 藤村 武

吉天 柴尾 山池 田小 野 荒加 植宮

5 C 1
1 1 F 9
4 G 1 4

この試合、二点差以上で負けなければ決勝トーナメント進出とあって、最初から固くなったのと、前の試合の気のゆるみから、殆どよいところがなかった。青学のスピードに

のつたドリブル攻撃と豊富な運動量にかきまわされ七一三で押される。BK陣のがんばりで、よく耐え、守っていたが、後半、正面からワントラップ・シュートを決められついに均衡を破られる。これに目覚めたか東大はすぐ反撃し、山辺一宮武とつないで一点を返し、かろうじて引分けにもつこみ初のベスト8進出に成功した。

5・6 東大 0 1 1 (0 1 1) 明大 (大宮 G) ^ 準々決勝 V

沢野	田崎	中森	崎	辺川	藤村	武		
吉天	柴尾	山田	池山	山山	荒加	植宮		
							9 C	6
							1 2 F	1 9
							9 G	1 2

東大は、例によってツートップでスタートしたが、結果的には4-3-1-3でやった方がよかったようだ。明大はさしてうまくなく、ほぼ五分五分でボールをキープできたからである。前半は神谷に右サイドを突破され、危ない形を作られたが東大も、植村が絶好調でその膝を深く曲げ重心を低くした姿勢からくりだす鋭いフェイントと持ち前のキープ力で明大のBKを翻弄し、一部にも十分通用することを実証す。東大にも再三チャンスはあったが今ひとつ「何か」が足りず、前半の唯一の失点が結局命取りとなった。

5・4 東大 1 1 5 (0 1 3) 全日本ジュニア (東大 G)
春季對抗戦中ではあったが、朴杯に参加するジュニアから

申込みがあったため、「胸を借りる」つもりでやることにした。早大の四人を含むジュニアに対して、東大ははつらつと戦ったが、技術差戦術眼の差、体力特にスピードの差はいかんともしがたく、大量五点を失い、得点は植村の一点にとどまった。

《對抗戦以後》

この頃、やや気が抜け、中だるみ気味。

5・25 東大 0 1 2 (0 1 1) 立大 (東大 G)

「五年生」二人をスタメンに加え、ST笠原をCFに使うを試みしてみたが、暑さの為か動きがにぶく、全般的に走り負けしていた。

5・26 東大 4 1 0 (2 1 0) 東大OB (東大 G) ^ 五月祭 V

6・2 東大 1 1 2 (1 1 0、0 1 2) 明大 (八幡山 G) (45分3本)

一本目はベストメンバーを組み、速藤のCKを田中が豪快にヘッドで決めた一点をどうにか守りきる。

6・8 東大 0 1 0 (0 1 0) 日体大 (東大 G)

6・15 東大 4 1 0 (2 1 0) 国士館大 (東大 G)

後半最後の方は暑さでバテ、押されつ放し。スタミナ不足。

《国公立大会》

6・16 東大 4 1 2 (2 1 0) 外語大 (電通大 G)

「来年のメンバー」でやる。二点をリードしながら、後半

苦しい戦いをしたのは(特にBKの)試合経験の不足か。

これは、一軍にもいえることだが、視野の狭いこと。自分の仕事(いるべき所、やるべき事、やれる事)がわかっていないということが目立って感じられた。

6・23 東大0-12 (0-10) 一橋大(電通大G)ハ準決勝V

「ベストメンバー」でのぞんだが、ひどい試合をやる。グラウンドが悪くてすべるのに、ボールを持ちすぎたり、「単純」に蹴ることを忘れたりし、後半FKと、BKのミスから二点を失い、完敗す。試合後、①精神面を含めた準備不足↓一橋を甘くみる。長いポイントをつけるなど。②やる気の差からくる動きの量、ボールへの寄りの速さの違い。③厳しいマークや激しい当り、ファウルに対して冷静さを欠き「熱く」なったこと。④オフフェンスではゴールへの執念、ディフェンスでは、単純さ、カバリングの不足。などが負けた原因としてあげられる。

6・30 東大2-10 (1-10) 東京学芸大(電通大G)ハ三位決定戦V

京大戦一週間前の為、前後半メンバー総入替で最後の「テストマッチ」としてやったが、浅見監督の「絶対勝て！」の至上命令のもと、全員よく動き、前半森井、後半加藤が一点ずつ決めて、快勝す。とにかく京大戦に向けて、チームのムードは上昇気流にのった。

《京大戦、遠征》

7・6 東大1-10 (1-10) 京大(京大農学部G)

沢野 田原中崎 木藤 野村 刃中 井
吉天 柴笠 山尾 佐速 牧植 山田 森
C F G

「東大の試合」で快勝。ハートの構成力では劣る為中盤ではある程度回させ、勝負はバックラインでやる。攻撃では、早めにトップにつなぐか、敵のバックラインの裏にボールを放り込み、森井のギープ力や植村のドリブル等を生かす。CK、FK(特にゴール近くの)を大切にやるやり方。この作戦が効を奏し、前半植村のCKから、ニアポストにつめた佐々木がヘッドディング・シュートし、バーに当たってはねかえるところを笠原がよくフオロし、けりこんで点をとり、これが結局、決勝点となった。京大は、SW永井が前線にフリーで攻めあがってくる時以外は攻めに迫力が感じられず、点を取られる形はほとんどなかった。

7・7 東大1-12 (0-11) 紫光クラブ(京大農学部G)

この後、姫路へ行き、新日鉄広畑の研修所に泊まり、ワートルドカップ決勝の中継を見る。

7・8 東大3-10 (1-10) 新日鉄広畑(広畑G)

この遠征で二軍は負け知らず。京大二軍に5-0、青城ク

ラブに一年主体で410、日本触媒に210といずれも無失点試合。

この後、三日間休み。

《七大戦》

七月一二日検見川集合。今回は京大、東北大を除く五校が参加。

7・13 東大310 (210) 名大(検見川C)

7・15 東大010 (010) 九大(検見川C) ^ 決勝V

(PK615)

九大は体格がよく、パワーもあったが、技術的には東大の方が上、にもかかわらず点がとれず、まずい試合をやった。

一人一人のイメージがかみあわず、コミュニケーションが足りないということが中盤でのつまらないミスパスや決定力の不足につながっていると反省された。

二軍も名大に310、九大に310で勝ち「無失点」を続けつつ優勝する。

夏休み 7・16 ~ 8・4

《夏休み以後》

今年は七大戦の主催校だったため、例年七月下旬にやっていた山中合宿をとりやめ、検見川で一次(8・9~16)二次(8・25~9・1)の二回のみ合宿をやることにした。この頃より、一、二軍間の意識の分裂が表立ってくる。

8・9 東大110 (010) 京大(検見川アメ・フット場)

一軍半程度のメンバーでやった後半の方がのびのびとやり、加藤の一点を守り切り「返り討ち」をくらわす。

8・14 東大011 (010) 富士通(検見川C)

①守備では人を押さえること、攻撃ではパスをもらう前のマークをはずす動き。②一人ひとりのやれる技術をふやしプレートの幅を拡げること。③攻守の切替。④中盤での「準備工作」としてのダイレクト・パス。が課題とされる。

8・22 東大112 (111) 中京大(東大G)

8・30 東大111 (111) 千葉教員(検見川C)

9・4 東大012 (012) 東京選抜(東大G)

9・8 東大011 (011) 東京朝鮮蹴球団(東京・朝鮮高G)

残暑の為、双方動きにぶし。きびきびした動き、気力あふれるプレーがみられない。

《天皇杯関東一次予選》

8・29 東大110 (010) 日産自動車(新子安・日産G)

沢野 田原 中崎 木藤 井辺 村武

吉天柴笠山山山	佐遠森山植宮	8 G 1 4
		1 2 C 1
2 5 F 1 3	2 5 F 1 3	1 2 5 F 1 3
		1 1 1 1

炎天下のアウトエイ・グラウンド。しかも相手は強化中の日産とあって、相当の苦戦を強いられたが、後半一分、PKが

ら佐々木―遠藤―宮武とわたり、この一点をツキヤ、相手の焦りにも恵まれて、守り切り、辛勝する。攻めではF B天野のオーバーラップなどの変化がでてきたものの全体として、暑くなるとすぐ運動量が減り、ムダな動きをせず楽をしようとするのが、CK一つに象徴的に表われているといえよう。

9・1 東大(1-0) 東邦チタニウム(東大G)

沢野 田原 中崎 森 木藤 辺野 武井	
吉天 柴笠 山山 池 佐遠 山(牧 官森)	
	5 G 1 1
	5 C 5 1 1
	2 5 F 1 1
	2 5 S 1 2

豪雨の為プールと化したグラウンドで試合は強行された。東邦チタニウムはかなり激しい当りと汚ないフアウルをくりかえし(警告四回)だが、東大は「雨の日のサッカー」のセオリー通りにすずめ、気力内容共に敵を上回り、後半十六分の宮武―柴田でもぎとつた得点に結びつけた。東大にとつてはリーグ戦の良い前哨戦であつた。

9・15 東大3-0 (2-0) 青山学院大(姉ヶ崎運動公園G)

沢野 田原 中崎 森 木藤 辺野 武井	
吉天 柴笠 山山 池 佐遠 山(牧 官森)	
	7 G 1 3
	9 C 5
	2 1 F 1 0
	1 5 S 1 2

リーグ戦一週間前で、相手は今年二部復帰を果たした強豪といわれる青学。「春」の教訓からH Bのドリブル突破に最も気を使い、「たてを押さえて入替らない」ことを中盤での守りの原則とする。

試合は、前半相手のオフサイド・トラップの逆をついた形から森井が二点決め、スタミナ切れで押された後半二七分にも逆襲からまた森井が決め、四分六分以上ボールをキープされながら「効率のいいサッカー」をして快勝す。

↑↑↑リーグ戦

9・22 東大1-2 (1-1) 拓大(東大G)

沢野 田原 中崎 森 木藤 井村 辺野 武	
吉天 柴笠 山山 池 佐遠 森植(山 官)	
	7 G 9
	8 C 4
	1 9 F 2 6
	1 6 S 1 1

初戦につきものの緊張感とOBの期待や下馬評の高さによる自信と拓大に対する苦手意識が交じりあつた感じで試合は始まる。九分、東大は佐々木のロングクロスで拓大G Kが出方を誤り、ラツキボーイ森井が楽々と決め幸運な先取点を奪つたが、十八分、東大B区の小さいクリアーを拾つた水谷のミドルシュートが、B区の足に当つてG Kの逆をついてゴールインするという不運な失点で前半は1-1で終わる。東大には、「どうしても勝たねば」という

グラウンド・コンディションは不良だったが、二点差をよ
くはねかえしこれまでの四戦中では最良の試合をやつた。
一分青学は遠藤一堀のヘッドをG Kがはじいたところを
上田がブツシュし一点、二五分にも上田がドリブルで中央を
割り、キーパーもかわして二点をリードしたが、三〇分頃
より東大ベースとなり、三分笠原のクロスボール植村
のヘッド森井のシュートがバーに当りはねかえるところ
を遠藤がブツシュし一点差で前半を終える。

後半に入つても東大は積極的に攻め、S W柴田が攻撃参
加した一五分前後は再三チャンスを作つたが、ついに四三
分、中央二五m付近、植村のFKからの混戦から柴田が蹴
り込み、同点とした。しかし、この試合に勝てなかつたた
め、上の入替戦の望みは殆ど断られた。

10・19 東大 1-4 (0-1) 国士館大 (大宮 G)

沢野	田原	中崎	木藤	崎井	野村	武			
							7	2	4
							G	C	F
							8	7	2
							1	6	2
							2	2	1

国士とはこの時点で同勝ち点だったため、結果的にはこの
ゲームに勝つた方が最後まで「上の入替」の可能性を残し
たことになった。前半二〇分位までは東大ベースで進みオ
ーブンによく球が出ていたがクロスボールが小さいか、G

Kの守備範囲かでもう少し工夫があつたらと惜しまれた。
また、二度ばかりあつた決定的チャンスをもこの時決められ
なかつたのは、試合を苦しくする大きな要因となつた。国
士は三四分G KからG Kの小さいパンチを拾つた高柳が角
度の狭い所からシュートし、カパーしていた東大B Kの体
にあたつてゴールインし、貴重なリードを奪つた。勢いづ
いた国士は、後半一四分にも鎌田のクロスボールをキーパ
ーが目測を誤つて出る所を大石がヘッドで押しこみ、二点
のリードを奪つた。東大は二七分交代出場の山崎が植村の
ドリブルシュートのはねかえりを正面から強烈に決め一点
を返したものの、以後全くリズムが好転せず、(シュート
ゼロ)逆に三三分と三九分に、ゴール前をゆさぶられて追
加点をあげられ、国士に完敗す。ゲーム後完全な動き負け、
走り込み不足が指摘され、また、チームとしての連帯感が
なく個々バラバラである、ミスに次に良いことをしようとし
ない、「東大のサッカー」を忘れてゐる等の鋭い反省。
批判が出された。

10・26 東大 0-0 (0-0) 順天堂大 (東大 G)

沢野	田原	中崎	野田	崎木	藤村	武			
							1	6	1
							G	C	F
							1	2	4
							1	4	1
							1	0	1
							2	1	2

国士戦の反戦から「ウチの試合をやるう」という決意を全員がもち布陣もツートップに改めて背水の陣をしき、「守りを固めてじっくり攻める」という作戦でのぞむ。

結果は無失点に押さえられたが無得点に終わつたということと内容としてはまあ良かったが、「良い試合をやつても勝たなければだめ」なのである。また攻撃力ということを考えるとうしてもツートップだと駒不足の感は免れ得ないだろう。

11・3 東大4-3 (2-1-2) 成城大〔東大G〕

沢野	田原	中崎	木藤	崎	武村	藤	辺				
吉天	柴笠	山尾	佐々	遠	(山)	宮植	(加)	山			
10	G	9									
2	C	9									
16	F	16									
14	S	16									

最終戦。全敗の成城に対しひどいゲームをやつた。勝つには勝つたが、良い試合をひとつやつたあとすぐこういう試合をやるのが、最近の悪いくせらしい。試合は前半一三分、佐々木のロングシュートと一六分山辺のシュートで順当に得点を重ね「楽勝」を思わせたが以後気がゆるみ二八分東大Fの不用意なパスを庄野に拾われ、ドリブルシュートで一点差、三八分にはPKでついに同点に追いつかれた。後半に入つてすぐ九分Cからのはねかえりを佐々木が強引なミドルシュートを直接決め、二九分には宮武―山

辺で二点差とし安全圏かと思われたが、四二分混戦からまた庄野に決められ、対成城最多失点三を記録する。

この試合に引き分けると一橋と順位が入替り七位になるというのに二点差がつくと安心して「守備は単純に、攻撃は複雑に」というセオリーを忘れてしまつたらしい。試合後、記念写真をとる、卒業組は来週の「学生最後の公式戦」に是非いい試合をやるうといひあう。

△天皇帝杯関東二次予選▽

11・10 東大0-1 (0-1-1) 早大〔東伏見G〕

沢野	田原	中崎	中	木崎	藤	川	村	武			
吉天	柴笠	山山	(田)	佐々	尾	遠	(荒)	植	宮		
6	G	1	2								
7	C	1									
14	F	1	2								
20	S	2									

一部リーグ三位とはいえ学生版1の呼び声高い早大を向うに回し、東大は一生懸命戦つたが意外にアツ気なく敗れ去つた。唯一の失点は前半三四分、内藤のOKをキーパーさわれず亀田に後ろへ落とされ正面から川本に強烈に決められたもの。これ以外は、圧倒的に攻められはしたが、よく守り、ボールをアウト・オブプレーにして相手の攻撃を切ることに成功していたのだが、なにはともあれ攻撃ができず、ボールがトップまで渡る回数が少なく、シュート数二に象徴されるように敗れても仕方のないゲームであつた。

〔今年度の総括・反省〕

昭和四九年度のチームをふりかえつてみるに、今年は「しりすぼみ」に終わつた、という感じがまずする。春の対抗戦の快進、京大戦勝利、七大戰優勝、天皇杯二次予選進出に比して、本番のリーグ戦は、なぜか負けが込み、二勝二分三敗で六位という去年より悪い成績に終わつてしまつた。

なぜこんな結果になつてしまつたのか、というと考えられる理由・原因はいくつかある。

第一に、本文中でも再三指摘してあつたが、「体力不足」特に「スタミナ不足」である。このことは、すでに夏の時点でもわかつていたことであり、「走り込み」が必要な事は皆知つていたはずだろうが、リーグ戦中は「疲れが残るから」という理由でダッシュを余りやらず、またやらないことに誰も文句を言わず、リーグ戦後半における試合半ばすぎの「息切れ」の原因となつた。(個人面)

第二に、チームメンバー間の「コミュニケーションの不足」である。お互いどういふサッカーをめざしているのか、漠然とは持ちながら徹底的に話し合つたりすることがなかつたと思ふ。これでは良いコンビは生まれないうし、息の合つたプレーもできない。(グループ面)

第三に「一・二軍間の意識の分裂」である。練習の効率をあげるためには、どうしても全部員を二つに分けなければな

らないが、「その時点のベストメンバーを使う」方針上、必然的にメンバーの固定化が生じる。これは致仕方のないことであるが、問題は相互の間で通じあえるものがなかつたこと、通じあおうともしなかつたことであり、また、一軍にいなながら試合に出られない連中の位置が不安定で中ぶらりんなことである。これらは、相互の努力で解消できるものと信じる。

(チーム面)

第四に、指導体制の問題がある。浅見さんひとりに、あるいは柴田ひとりに任せつ切りという意識はなかつただろうか。特に私を含めた四年生の大部分の人に猛省を促すと共に後輩諸君には以後の良き教訓としてほしい。

第五に、これらはみなつまるところ個人・個人の主体性・自主性の問題になるのではないかと思う。一人ひとりが自らの弱点をつかみ、それを改善しようと思ひ、向上心を持つて考へて練習をすれば強いチームが必ずできると思う。浅見さんもおつしやるように、「努力した人間が上から順に試合に出られれば、こんな強いチームはない。」のである。

今年のチーム自体の問題点について言えば①キープ力のないハーフ陣、②単純さを忘れたバックライン、③決定力不足のフォワード、に加えて、チームの最終的要となるべきⅡⅢの精神面での不安定感(これはチーム全体にもいえることだが・・・)、とそろえば、「実力相応」の結果が出たのも当

然のことだつたといえよう。

無論その背景には右に記した様な問題が根本的にはあつた
と思うが・・・。

来年のチームは、「今年の轍」を踏まない様にしてもらいたい。それには、実戦を数多く積む（「試合は教師」とともに、練習への取り組み方もつと自主的・能動的にし、「考える練習」態度を養い、またより高い相互理解をめざしてどんどん思つていることを討論させ「自己のサッカー」をぶつけあわせることが必要である。そして、特にレギュラートラスが率先して努力し、雑用をも厭わずやれば、一・二軍間の意識分裂も起こらず、きつと素晴らしいチームができるであらう。

サッカーは一人でやるチームゲームであり良いチームプレーは良いチームワークからしか生まれえないのであるが、良いチームワークは一人のみで作らるものではなく、全部員相互間の理解と信頼感によつてのみ形成されるものと思ふ。

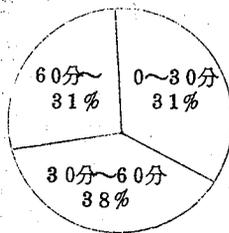
（文責・遠藤）

部員意識調査

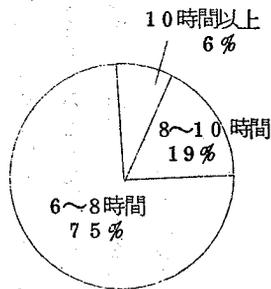
「アンケートにみるサッカー部員」

今回のこのアンケート調査は、創刊号においてなされた「部員の生活と意識に関する調査」を受けて、現在のサッカー部員がどんな生活をし、サッカーにどう取り組もうとしているかを明らかにする目的でなされたものである。この企画の動機の一つには、創刊号当時とどのように部員の生活や意識に違いがあるか比較してみようということがあり、同一の質問項目をかなり取り入れたので、比較して読まれるとおもしろいと思ふ。しかしもちろん、この調査の目的はただ単に今昔の比較などにあるのではなく、現状打開のための問題点を浮き彫りにせんがためである。このような形での調査がどれほど部員の真の姿を明らかにできるか疑問なしとしないが、とにかく、部員間の活発な議論の手掛りとしてまたOB諸氏に現役について知つて頂く一助として役に立てば幸いである。

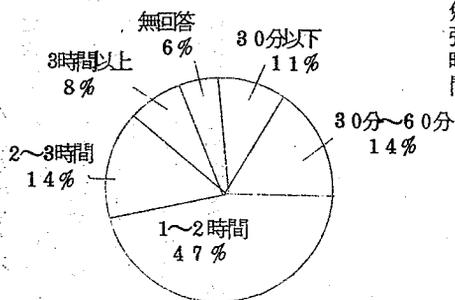
1. 生活調査
通学時間 (片道)



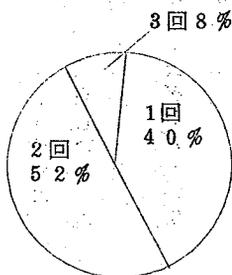
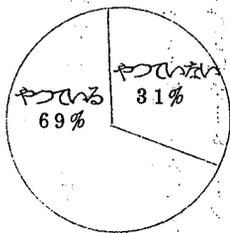
2. 睡眠時間



4. 勉強時間

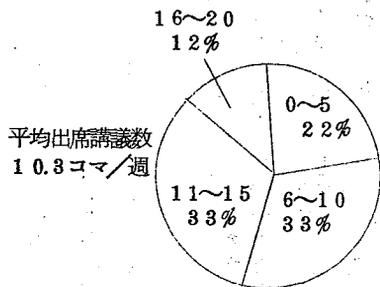


3. アルバイト



(回数 1週間)

5. 講義出席時間 (一週間)



平均出席講義数
10.3コマ/週

平均講義出席率 66.4%

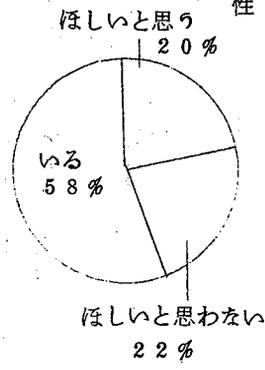
$\left(\frac{\text{実際出席講義数}}{\text{登録した講義数}} \times 100\% \right)$

6. 今ほしもの

- ① ヒマ 三一%
- ② 金 三三%
- ③ 友人 〇
- ④ 恋人 八%
- ⑤ その他 二五%
- ⑥ 無回答 三%

(スピード、テクニク、オ
ンナ感じる力、自由、翼、オ
etc)

7. 異性

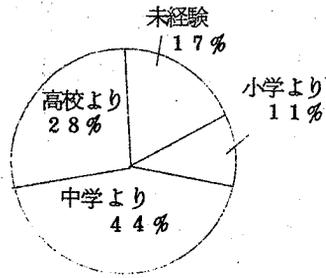


8. ヒマなとき何をしているか

- ① テレビ、ラジオ、読書、音楽鑑賞
- ② 麻雀、パチンコ、酒、おしゃべり、etc 六七%
- ③ ポケツとしている、もの思いにふける。 一七%
- ④ 何もしていない ヒマなし 八%
- ⑤ 寝ている 五%
- ⑥ サッカーをやる 三%

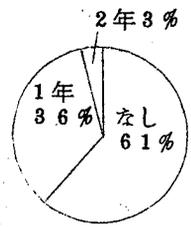
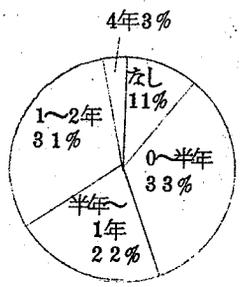
II 部員意識調査

1. サッカー経験



※但し、未経験といつても、学校のクラブでの経験がないものをさす。ひとりてボールをけつたり、仲間やつていたもの。その他はクラブでの経験者。

2. 入部までのブランク



※なしと答えた人はクラブでの経験のない人。

〔浪人年数〕
(参考)

3. 入部のきつかけ

- ① 最初から入部しようと思つていた。 五五%
- ② 何となく。 一七%
- ③ 練習をみて。 一一%
- ④ 先輩（高校の）に誘われて。 八%
- ⑤ 友人に誘われて。 六%
- ⑥ その他（良い指導者がいると聞いて、ヒマをもてあまして、シライをみて） 八%
- 無回答 三%

※重複回答なので総計は一〇〇%をこえる。以下一〇〇%をこえるところはすべて同じ。

4. 入部動機

- ① サッカーをやりたい。 九二%
- ② 部生活をやりたい。 一四%
- ③ 何となく。 八%
- ④ 体力養成のため。 五%
- ⑤ スポーツをやりたい。 三%

※重複回答なので②をあげる人でもほとんどの人が①を動機としている。創刊号の頃と比べると興味深い。

5. 入部しての感想

- ① 予想外に寮囲気が明るく、自由で 三九%
- またレベルの高いのに驚いた。 二二%
- ② 期待通り充実している。 二二%

⑧ 自分に對してもつときびしくなる必要。

- ③ (自己のプレーやその他の甘さに失望) 一七%
 - ④ 勝負第一で少し息苦しい。 一一%
 - ⑤ 寮囲気はいいが少し物足りない。 一一%
 - ⑥ その他（グラウンドや設備が悪く、先輩との交流が少く、etc） 一七%
- ※総じて部の寮囲気に関しては、予想外に明るいと感じている。しかし、レベルの高さに驚くものが多かつたのは意外な結果である。

6. 入部前の東大サッカー部についての知識

- ① よく知つていた。 六%
- ② 少し知つていた。 五五%
- ③ 全く知らなかつた。 三九%

7. 部の伝統・歴史について

- ① ただすばらしいと思う。 二五%
- ② 現在の参考にし学ぶべきところがある。 四四%
- ③ 関係ない。 三一%

※関係ないと答えた人が意外と少ない。半数近くの人が積極的に生かそうとしているが、逆にそれだけ、この伝統・歴史が昔のこととして一歩おいて考えられているといえなくもない。

8. 現在二部に居るが

- ① 実力相応 三〇%

- ② 頑張れば一部へ昇格できる。 三〇%
- ③ 現在でも苦しい。やつと維持。 二八%
- ④ その他 (リリック戦は実力だけでまわらな。優勝は充分可能。 etc) 一二%

※現状評価についてはまさに三つに分裂しているが、これは、はつきり三つに分れているというより、皆の気持ちの中で、この三つが同居しているとみていいだろう。頑張ればといつてもその内容の相当厳しく、まわりの状況がそう甘くないという認識は共通のものであろうし、また、一方、二部が限度とみるものでも皆主観的には一部をめざしている気持は同じく強い。

9. 現在の週五日制(一日二、五時間の練習

〔量的にみて〕

- ① これですよ。 八九%
- ② 不満。 一一%

多すぎるのか、少なすぎるのか？

※不満の内容は、緊張が続かない、駒場から本郷へ通るのが時間の無駄である、などで、一方、週休一日でよいという意見もあつた。また全員が毎日そろわないうちにも、いう不満があり、これでよいとする意見のうちにも、五日すべて練習するという条件で賛成するものが多い。(特に)練習を休んだものが休んだ分を自分で補おうと努力することは、当然なのだが、そうでないところ

に問題がある。
〔質的にみて〕

- ① これですよ。 一九%
- ② 不満 八一%

※質的向上のためにはやはり集中して考えながら密度の高い練習をするなどの練習への取り組み方をあげるものが一番多かつた。鬼コーチ的存在の必要を唱える意見もあつた。また、基礎的練習の徹底、個人技術の強化体力増強という意見も根強い。その他処方箋を与える、イメージが貧困だからいい試合をみる、グラウンドをよくするなどの意見があり、また向上心のないものは切り捨てるという強硬なものもあつた。

10. 強化策として週六日制をとるとしたら

- ① 必要なし。 六一%
- ② 必要だが無理。 三六%
- ③ 必要で可能 三%
- ④ 必要なし。 一一%
- ⑤ 必要だが無理。 一四%
- ⑥ 必要で可能 五八%
- ⑦ 無回答 六%

※練習日数をふやすことは実際上も無理だろうが、合宿

の強化となると、賛成が六割近くあるのだから、ふやすことを真剣に考えていいのではないか。

尚、近年は、合宿が減つてきたようで、参考までに昨年の合宿、練習の時間、日数をあげると、

合宿・・・春一回、夏二回

いずれも検見川で七、八日間、また夏の山中合宿

(四、五日)は、昨年は中止された。

練習・・・月、金を除く週五日

平日・・・3:30 / 5:30 or 6:00

土、日・・・2:00 / 5:00

冬(十二月、二月)は月、水、金を除く週四日

11. 現在のOBとの交流について

- ① もつと幅広く、親密な交流の努力を。・・・五〇%
- ② 現状でほぼ満足すべき状態にある。・・・一七%
- ③ 金は出しても口はあまり出さないでほしい。・・・一四%
- ④ あまり交流なし、仕方ない。・・・五%
- ⑤ 個人的に交流すればよい。・・・五%
- ⑥ その他。・・・五%
- ⑦ 無回答、わからない。・・・一四%

※やはり、もつと練習や試合に来て、一緒にやるなり話しあつたり、相談相手になつてほしいという声が表示は違つても圧倒的であり、OB諸氏特に若いOBにはそのこ

とを強くお願いしたいと思ひます。また一方、現役の方にも来てくれたOB諸氏に、積極的に話しかけるなどの努力が足りないという意見もあつた。その他会員制にして現役を援助する意志のないOBは切りするべきだといふ意見もあつた。

12. 自己の中に占めるサッカー部の位置

- ① 完全に生活の中心を占める。・・・五〇%
- ② 生活の中でかなり大きな割合を占めつつある。・・・二二%
- ③ 生活の中心だが、その状態に不満足。
(もつと勉強や多めに時間をかけた。)・・・一四%
- ④ 卒業しても練習に出たり応援する。・・・一四%
- ⑤ 若干束縛と感ずる。・・・三%
- ⑥ 無回答。・・・三%

※①と②の意識の断層は学年によるところが大きい。

13. 入部して自分自身何が変つたか

- ① 特別に変化なし。・・・一七%
- ② 何らかの変化があつた。・・・七五%
- ③ 無回答、わからない。・・・八%

※変化の内容は、五割のものが、自分の甘さや利己的などころを認識し、自己をみつめるようになったとか、バイタリティー忍耐力がつき、つき合いや調和に気をつける

14.

部員間の交流について

よりになつたとかあるいは、体力がついた、サッカーがうまくなつたなど何らかの形でプラスに評価している。一方残りの二割余りのものは、人が悪くなつた、下品になつた、墮落した、幼稚になつたあるいは身体がガタガタになつたなどマイナスに評価している。

① 同じ学年同士はよいが、縦の関係は薄く、表面的。

.....三一%

② サッカー以外での交流が乏しい。

.....一七%

③ 現状でよい。

.....一四%

④ 今のままでよいが、練習のときはも

.....八%

つときびしく。

.....八%

⑤ 試合の反省など、じっくり話し合

.....八%

たい。

.....八%

⑥ その他

.....二二%

※全般的に上下関係がきびしくなく、交流があると評価するものが多いが、反面不満も根強く特に上級生と下級生とのサッカー以外も含めた交流を望む者が多い。具体案としてはコンパ等をふやせ、全寮にするなどの意見があつたが上級生にもつとおこつてほしいというものと、そういう形でなく交流を望むものがあり、相反した。

15. 今年（S49）の指導方法に対する不満

① 特になし。

.....二二%

② 自らの力を過信、練習量が足りなかつた。

.....二〇%

③ 一軍、二軍の交流が少なかつた、二軍の練習をもつと充実してほしい。

.....二〇%

④ 選手（とくにレギュラー）にきびしさが足りなかつた。

.....一一%

⑤ スタッフが足りない、コーチがほしい。

.....八%

⑥ その他

.....三三%

※②の練習量の不足では夏合宿が軽く、それ以来体力的に下降線をたどつたのではというものが多かつた。また、四年生に対し、まとまりのなさ、や自主性がうすく監督に頼り過ぎという指摘があつた。その他正規の練習以外の自主的な練習がなかつた、もつと試合に出たい、メンバーが春から固定されていた感があるなどの意見があつた。

16. 指導者になつたとして強化策を考えると、

① 基礎体力、基礎技術を徹底的にやる。

.....二〇%

② コーチをおく。

.....一七%

③ 基礎体力+基礎技術プラスアタマ

.....一四%

この三つの徹底強化とくに「考える」こと。

.....一四%

④ 少数精鋭でよく。

.....八%

⑤ メンバーを固定せずレギュラー競争を激しくやる。 八%

⑥ 個性的プレイヤーを育てる。 八%

⑦ その他 (試合をやらず、スピードをあげる) 二二%
限界に挑戦する。 etc

⑧ 特になし。 一四%

※それぞれニュアンスはかなり違っているようにみえるが、強調するポイントが違うだけで、だいたい同じように考えているといつていいだろう。しかし、④の少数精鋭主義は創刊号での同じ問いに最も多数意見であつたのに比べると、このようなやり方ははや適当でないと考えられているようである。

17. 現在の部生活に対する矛盾、不満。

① 特になし。 三〇%

② クラブとしての一体感がない。 一四%

③ ぬるま湯的、なれ合い、寛大すぎる。 一四%

④ 部室等をもつと清潔に。グラウンドをよく。 一一%

⑤ もつと自分自身にきびしく。 (例えば練習時間等にルーズ) 八%

⑥ サッカーバカ、サッカーキチガイが少い。 六%

⑦ 授業で練習に出られないのが残念。 (文系の専門科目に出たい。) 六%

⑧ その他 (思いやりに欠ける サッカー以外の交流がない) 二五%
etc

※②の不满は、全力投球しているものと、そうでないものが出て、しかもそれがなれ合つていて、クラブとして一つにまとまつて戦う雰囲気のないことを指摘している。昨年 (S 49) の反省として、耳を傾ける必要があると思ふ。③や④は、工夫によつて解決可能なものであろう。全般的にやはり、一、二年生と、三、四年生では問題意識に差があり、上級生になるほどクラブ全体を考えたい発言が目立つようだ。

18. 現在感じていることを何でも。

この質問には多様な回答があり、また無回答も多かつたので、集計からは除外しますが、次のような意見があつたので参考にして下さい

「このままいけば再び今年の一軍の残りでメンバーが決まるだろう。一人の名前はほぼ決まつていといつてもいい。そこで . . . 中略 . . . 試合に出たいなら、あるいはチームを強くしたいのなら、自分のいいところをみがけということを言いたい。おれは . . . 中略 . . . もう一度やり直せるのなら、 . . . ボールを持つても一一秒台で走れるようにしたい。そうすれば必ずや出場できよう 東大のサッカー部は一技にすぐれていれば絶対やれる。」

とにかく誰にも負けたいものを身につけるといふことに努力してほしい。」もう一人、皆の耳に痛い意見を紹介すると、「東大サッカー部の今後に関してだが、現在のようなムードが続く限り、遠からず東大は関東リーグを去る日を迎えるであろう。部員の技術、経験の不足もさることながら、東大サッカー部員のサッカーへの打ち込み方は、関東リーグ、都県リーグを含めても最低の部に属するであろう。……中略……サッカーへの取組み方は同好会と変わることがない。決められた練習(週五日、一回二時間)しかやらずに、「試合に出たい」と口ぐせのようにこぼし、「試合に出られぬくらいなら部をやめる」等と言う。……中略……部員が(とりわけ試合に出ない人たちが)真剣にサッカーに取組みぬ限り、下位低迷は必至であろう。」

総括：前半の生活調査は、部員の平均的生活を知ろうとして企画されたが、ここから想像される部員の平均的な一日をやや乱暴に、描くと次のようになるだろう。睡眠を七〇八時間とり、通学に往復二時間ほどかかり、講義には平均二コマ出て、練習(約三時間)をし、勉強を一〇二時間する。そして、週に一回バイトをする。かなり忙しいという感があり、それだけに工夫して時間を使わないと、ヒマがない、何もできないという不満につながるだろう。

後半の意識調査では、まず、経験者であるが、サッカー経験について八割以上が経験者、しかもクラブで練習してきたものであることには驚く。創刊号当時と比べてむしろ経験者はふえているといつてよい。しかもブランドの長さが一年以内のものが過半数に及ぶのでかなり有利な条件のようにみえる。しかし、入部してレベルの高さに驚くものが意外と多く、また、国体、インターハイ、あるいは関東大会程度のものへの出場者が皆無に近いことを考えると、大部分経験者ではあるが、そのレベルは、決して高くないといえるだろう。だいたい県大会で多少の成績をあげたチームの選手ということになるのか。そのため、弱小校で部員だった者よりも、修道高等、サッカーの強い高校で同好会に入っていたような者の方がプレーヤーとしての能力が高い、ということが多く、前者が二軍で、後者が一軍入りというケースが珍しくない。社の、低いレベルで均質化されていることは、有利とはいえないが、決して不利な条件でなく、練習次第ではすばらしい選手になる可能性があるといえなくもない。

入部動機に関しては、創刊号においてははつきり二分されていたのに比較して、サッカーをやりたいということと一致している。また二部低迷については、ここ数年一部との入替戦をしていないことや、二部の他のチームで

も実力的に東大を上回るものがかなりあるといわれているので、現在でも苦しいという意見が約三割もあるのだらう。しかし、だからといって、二部でよいと思うものは、皆に聞いて回つたわけではないが、居ないだらう。部員は主観的にはやはり皆二部優勝、一部昇格を強く願っている。ではどうすればよいか。

練習体制については、日数、時間とも實際上現状が限度であるが、合宿は創刊号当時は年六回（全て七日間）もやつていたのに比べて、現在は半分に減っている。連休などを利用してつと頻繁に合宿することは可能だらう。

また練習内容については、その取り組み方に問題ありとする意見が多い。集中していない、考えていない、無駄が多い、情性的だ等々部員の自覚にかかわる古くて新しい課題の指摘である。このような指摘が多いということは、この問題が、わかつていても直しにくい性質のものであることを意味している。それで、その解決策として、自覚し、自己にきびしくなると同時にスタッフやコーチを増やして、その手助けをしてもらいたいという意見が出てくるのであらう。

創刊号では、強化策として、合宿寮制、小数精鋭主義があげられているが、現在このアンケートでみる限りは、

そのようなやり方は、浮んでこない。素質のあるものを残し、落されたものは愛好クラブでも作ればよいというような考え方は少なく、たとえ、下手であまり素質のないものでも、意欲があつて練習に出てくるならば、そのようなものを切り捨てるべきだなどと考える者は、いないといつてもいいだらう。

そうなると、昨年でも四〇数名いる部員をいかにレベルアップし、強いチームにしてゆくかが、問題となる。現実には、夏以降一軍、二軍に分けて練習しているが、一軍のものきびしさの欠如、メンバーが固定的で交流の少ないこと、二軍の指導者の不足等々問題は数多く横たわっている。

それらの問題は、このアンケートでも多かれ少なかれ、浮かびあがつている。それらを一つ一つ解決していくことが必要なのだが、それと同時に、部員ひとりひとりが、自分のサッカーに対する姿勢、練習への取組み方をきびしく反省し、見つめ直すことが今問われている最大の課題なのではなからうか。東大サッカー部は今一つの転換期にさしかかっている。そのことを、このアンケートは、よきにつけ、悪しきにつけ、語っているようである。

調査 尾崎、兵頭、吉沢

(文責 吉沢)

1974. 12. 4 配布 対象 … 部員全員
回収率 … 85.7%

(A)



(A) 昭和48年11月11日 西ヶ丘競技場。天皇杯二次予選法大対東大。左より尾崎，天野，植村，吉沢，高見（法大），内田，山中。

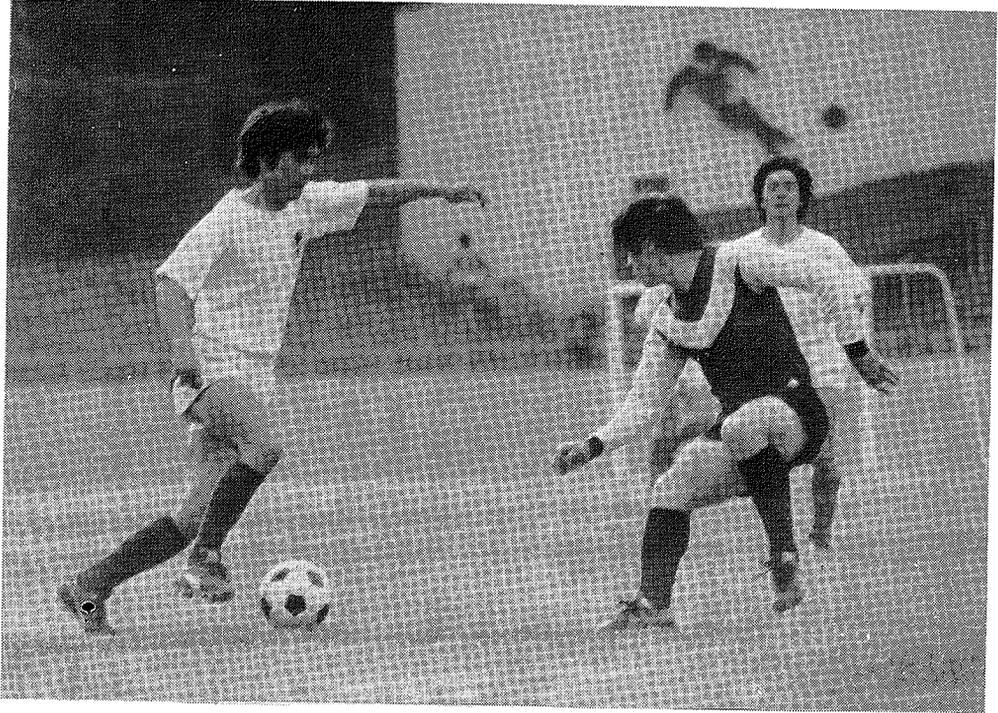
(B)



(C)



(D)



(B) 昭和48年, 9月15日 笠松運動公園にて。天皇杯一次予選, 日立水戸勝田対東大。左より2人おいて笠原, 宮武, 2人おいて田中。

(C) 後列左より谷本, 牧野, 小野田, 尾崎, 山中, 青山, 天野, 笠原, 佐々木, 磨井, 田中, 荒川, 吉沢, 南谷, 森井, 堀井, 大高。前列左より, 西山, 加藤, 植村, 宮武, 柴田, 山崎, 山辺, 遠藤。(49年11月3日リーグ戦終了後)

(D) 昭和49年5月6日 大宮サッカー場にて。春季対抗戦決勝トーナメント一回戦東大対明大。左より植村, 一人おいて山辺。 (撮影者 中根雅子)

VI 現役部員から

// サッカー部生活を終えるにあつて //

四年 佐々木 順 孝

昭和四五年三月末に、検見川合宿の最終日の紅白戦に出して
もらつてからはや五年が過ぎようとしています。この五年間は、
伝統ある東大ア式蹴球部の歴史の中でも、極めて成績不振な時
期であつたと思われれます。その原因については、現役、OB一
体となつて検討を加え、二度とこのような不振の時期を、経験
することなきよう努めることが必要だと思ひます。この努力を
重ねることが、東大ア式蹴球部員のなすべきことであり、OB
のなすべきことであると思ひます。そしてまた、私が五年間の
部生活で得たものは、現在の不振を二度と経験しないよう努力
すること、そして現実に上昇することは、後輩諸君にとつて非
常につらい課題であるけれども、やりがいのある、そして達成
可能なものだと言ひます。そして、それには今度OBとな
る小生も含めたOBの援助も必要であるといふことです。決し
て卒業して行くものの放言ではなくて、五年間で得た自信と、
悔恨の情とから言ひましたものです。

大上段に構えてしまいました。五年間を振り返つて思ひ出
すのは、三年生の夏練習試合とは言え早稲田に勝つたゲーム、
三部との入替戦での逆転勝ち、天皇杯で法政と延長の末PK合

戦で敗れたこと、そしてリーグ戦で挙げた七つのゴールのそれ
ぞれ等々です。リーグ戦の雰囲気の中で、得点した時はほんと
りになんとも言えず、今でもすべての得点の光景が頭に残つて
います。卒業間近な現在、あの感激を二度と味わうことができ
ないと思つと、なんとも言えず淋しい気持です。と同時に、下
手くそだつた私が、あの感激、様々なすばらしい経験を得るま
でに御指導して下さつた諸先輩や、それをサポートしてくれた
部員の皆さんに感謝の気持ちでいつばい。後輩の諸君が、
もつと晴れがましい舞台ですばらしい体験を得ることができ
るよう努力することを期待すると共に、私もOB一年生となつ
てそれをバックアップすることを誓つて筆を置きます。

// 背番号 2 //

四年 天 野 裕

あゝあ。今、ぼくは溜め息をついています。なぜつて、大学
でのサッカー生活に別れを告げようとしているんです。ぼくは、
卒業目前なんです。人間てやつは執着していた何かが終わるう
とする時や終わつた時、淋しさとも満足ともつかぬ溜め息を洩
らすそりです。

今、ぼくは思つています。何かに執着しているつていいなあ

つて。その中のとつても大きな一つが、ぼくの場合、サッカーだつたんです。サッカーをやつてきて、何か貴重なものが心の中に蓄積したような気もしているんです。ちよつぱり感傷的になつているんで、そんな錯覚を試みたいのかもしれない。誰かが言つていました。人間てやつは何か一つ経験すると利口になつたような気がするけれど、それほどできるいい生物じゃないつて。まづたくその通りです。ぼくも御多分にもれず、少し利口になつてもすぐ元の木阿弥なんです。でも、そんな人間だからこそ、自分が何かを学びとつたような気がしたら（これも錯覚かも？）、自分に言い聞かせるためにも（もう、元の木阿弥は御免ですから）、みんなに向かつて何か言いたいんです。ぼくは、高校、大学を通じて右のフルバックで背番号は2でした。ぼくはいろんな意味でこの2という数字に縁が深くていつのまにか2はぼくのお気に入りの数字となりました。男だつたら誰だつて、勝負には勝つて一番になりたいと思つるのは当然です。ぼくだつて、一番になりたいと願つて一人ですから。でも一番になつてしまつたら、後は追われるばかりです。相手よりまさつていゝなら、勝つのが当然で勝たねばなりません。一番を維持しようと思つて、勝たねばならないと思つて、ライバルと戦つると同時に自分自身を強力なライバルとしかねないわけです。その点、二番というのは精神的に圧迫するものがなくて気が楽です。今までは二番の地位に甘じていたけ

れども、今度こそ！とか、力は相手が少々上だけれども、思いきつてやつてみよう！という心意気は、実力以上の大きな力を引き出すことがよくあるんです。

精神的圧迫を克服して勝利する者こそ真の勝利者かもしれない。しかし、これはきれいごとでしかないような気がしてなりません。自分自身とわざわざ戦うのは、非能率であつて、戦いを避けることも自分自身を克服する有効な手段のような気がします。相手に一步譲ることによつて精神的、肉体的にリラックスすることこそ、勝利への近道のような気がします。

一番に負けたり屈辱的な二番はぼくの望むものではありません。一番の地位を虎視眈眈とねらう二番の姿勢、心構えが、ぼくは好きなんです。

今、ぼくは背番号2のユニホームを脱ぎつつ、この背番号2にぼくの斗魂を託していきます。諸君！背番号2を背に戦つてくれ！

さらば、背番号2よ！

四年 荒川吉彦

「東大へ行つてサッカーをやるう。」というのが僕の高校時

代の希望であり目標であった。夕暮れ時に家路を急ぎながら、ふど西の空を見上げると星が二つ三つまたたいている。そのうちの手頃なのを眺めては、「おお、あれが東大の星か。チクシヨーム、俺だつてそのうちあの星を、手でつかむのだ。今に見ている、俺は東大に入つてサッカーをやるのだ。」てなことを思つたものだつた。(もつとも、そのあと石ころにつまずく位がおちだつたが。今にして見れば純情な少年ではあつた。

そしてどういふわけかすんなりと合格してしまつて、更に又すんなりとサッカー部に入部することとなつた。見事に希望がかなつたわけである。これからバラ色の生活が開けるはずであつた。ところが、現実はそのうまく運ばなかつた。何のことはない、授業にしたつて、英語に加えてドイツ語なんぞというのが現われた位で、高校に毛のはえた程度に思えたり、サッカーにしても、石ころだけのひどいグラウンドで、高校の時と変わりばえのしない、いやもつと野暮つたいような練習をしているように見えた。そんなわけでガツクリしてしまつて、授業にも練習にも身の入らない状態がいくらか続いたわけである。

思えば、これは、「東大へ行つてサッカーをやる。」はよかつたが、そのあとのことは何ら考えずにいたこと、つまり、当初の希望がかなつてふわふわした気分のまま、次の段階については何ら具体策を講じなかつたことにもよるし、また、夢見がちな自分勝手な考えをめぐらす性格、更に、環境の変化とい

うか事態の変化といふか、そういうものへの対応が元来無器用な性格であることなどが災いしたと言えるのではなかつたか。(まあよくある話だと言えばそれまでだが。)

そんな時期もあつたわけだが、不思議と、サッカー部をやめるといふことは本気になつて考えたことはなかつた。自分で言ひのなんだが、熱しやすくさめやすい反面、変な事に対して、良く言えば粘り強い、悪く言えば執念深いといふか、ともかくそういう反面を持つていたのである。(矛盾に満ちた性格であることよ。)その後は再び、「俺はもつとやれるのだ。」といひ、今日の自分に妥協せず明日に向かり、いわば強い気持ちと、「ああやつぱりダメか。俺はこんなもんさ。」とくじける弱い気持ちとの葛藤みたいなものが続いていたのである。

そしていつしか四年間が過ぎてしまつたのである。(途中の次第ははしよつた。)しかしここで問題が起こつた。サッカーの面は、今述べたように、いわばジタバタしながらも続いたわけだが、学生の本分ともいふべき(?)学問の方は、その間さつぱりお留守だつたのである。そこで現在は重点を変えて、そちらの面の強化を図ろうとしているわけである。が、ここでもジタバタが続くような気配である。まあ、このジタバタといふものは、僕にずっと付きまといつて離れないものではないか、なにと勝手に考へている。ともかくも、希望の星は、やはりいつもかなたにあるわけだ。しかし、僕の心の中には、また例の、

「○○へ行つて○○をやろう。」という望みが起こりつつあるのだ。(留年の身ゆえ大きな事は言えないこのつらさよ。)またぞろ「チクショーめ、俺はあの星をこの手でつかむのだ。今に見ているよ。」なのである。そしてまた石ころにつまずくのがおちなのだが。

(この歯切れの悪い拙文も、一人のヒヨツ子が一つの転機を向かえた時の産物と思つて御宥恕のほどを。)

四年 磨 井 祥 夫

四年間もサッカーをやつていれば、サッカーに対する考え方が変わつてくるだろう。重要なことは、その変化が常に一歩一歩の前進であることだと思ふ。

サッカーが終つてからは、サッカーで得たものを日常生活でも実践するべきである。サッカーで得たものがサッカーだけにしか通用しないのであるとしたらおもしろくない。

サッカーと私

四年 遠 藤 謙

第一章 東大サッカー部に入るまで

私がサッカーを始めたのは、中学一年の時だつた。兄がサッカー部に入つていて「お前もやるのだろう。」と当然の事のよりに言つたので、何ということもなく入つたのが病みつききの始まりであつた。中学の時は、同じ東原中出身の上妻さん(昭和四十八年卒、当時高校生)が、コーチに来てくれて、私たちはいろいろ教えてもらつたり、ゲームをやつたりした。その中で、私は、サッカーとはどういふものかを何となく体で感じ、またサッカーの楽しさを知つていつたように思う。

高校に入り、即座にサッカー部に入つた私は、もう一度基礎からやり直そうと決心し、サイドキック、トラップなどの基本的技術を毎日のように練習した。また、壁に向つてボールを蹴ることも非常に効果があつた。高校では、これといつた成績を上げることができなかつたが、我々の代の最後の試合、対中大付属戦だけは忘れられない。この試合、私がまぐれ当たりで二点を決め引分けたのだが、一番嬉しかつたのはこの得点のことではない。それは、十一人が一丸となつて戦つたといふことであり、チームの「勝つ」といふ意志がひしひしと感じられたといふことである。その意志が二点を生んだといつても過言ではないだろう。この時私は、サッカーといふチーム・ゲームの素晴らしさを身にしみて感じ、また本当にサッカーをやつていて良かった、と思つたのである。

第二章 東大サッカー部に入つて

東大に入学してもやはりサッカーの魅力から離れることができず、また上妻さんも「待つていて」下さつたのでサッカー部でやることにした。一年の時は、「一応の事はできるからあとは体を作れ。」というふうなことを言われ、特に弱かつた上半身を鍛える為、ベンチプレスを毎日のようにやつたり、二学期の体育実技にトレーニングをとつてみたりした。

二年になり四年生が上妻さん一人という苦しい状況のもとで一応レギュラーとなつたが、この年は自分でも不思議な位、つまらない事で怪我をし、(都合三回)体力―特に循環器系の衰えて苦しい思いをし、また京大戦等に出られず、リーグ戦も最後の二試合にしか出られず(しかも結果は負け)、全くつらい不意なシーズンを送つた。教訓としては、以後ちよつとした怪我にも神経質になり、早期治療を心掛けるようになったことである。「この年の入替戦は実にスリルがあつた。まさにドラマであつた。」

三年の時は、私にとつてベスト・シーズンだつたと言えよう。「去年の分も働いてやるう。」という気持ちも大いにあつたし、実際無我夢中でやつたというイメージが最も強い。山下で泣いたことや、法政戦でPKをはずしたことも今となつては良き思い出である。今、ふりかえつて思うにつけ一般に三年の時が一番余計な事も考えずに、一生懸命プレーできるのではないか、という気がする。「三年生にレギュラーの多いチームが強い。」

というのもあながち偶然ではないように思う。

第三章 いち・四年生としての反省

去年度の「失敗」の原因については、いろいろな意見があると思うが、ここでは今年のチーム及びクラブの問題と自己の部意識について私なりの所感を述べてみたい。

まず自分についてであるが、三年の時レギュラーであつた為か、最高学年になつたせいにか、急に意識過剰となり、「一軍だから」「四年だから」ということで、クラブ内の雑用等を目を向けず、ひたすら球を蹴り、自分さえ試合に出られれば良い、又、試合に勝てばそれで事足れりとする傾向があつたと思う。

これは他の多少の四年生にも見うけられたことのように思うが、指導的立場に立つべき最上級生のこのような態度が、下の者に信頼感・やる気をなくさせ、ひいては一・二軍間の意識上の分裂を招いたのではないかと、と昨今つくづく反省している。反例として、一年の時キャプテンであつた黒沢さんが率先してグラウンドを引つかき、石を拾うのを見て、私はこのクラブの雰囲気というものがわかつたし、「俺もやらねば」という気持ちを強く起こさせられたのを覚えている。リーダーたるものはサッカーだけ上手であればよいのではない、ということを指導的立場に立つものは心に刻んでほしいと思う。先輩チームの轍を踏まないように、と思ひ一念から敢えて恥をさらした次第である。

第四章 今年への期待と抱負

さて、今年のチームへの要望であるが、留年し諸君に「指導・助言」する立場の私としては、まず何よりも「自分の頭で思考し、判断し、意欲し」てほしいと思う。サッカーは大まかに

言つて、技術・戦術・体力・精神力の四要素から成り立つと思つて、各人が自己の現状を分析し、足りない点を意識し、自らそれを克服し向上しようという意図をもつて練習に取組んでほしい。そうすれば各人のレベルは必ずアップするだろう。また、もつとお互いに「言い合つ」てほしい。その場で言えなかつたら練習後でも部日誌にでも書けばよい。そうすれば相互理解・相互信頼が生まれ、いわゆる「息の合つたコンビプレー」ができるようになるだろう。それからもつと、全人格的につきあえ、といたい。それが無理なら少なくともサッカーの面だけでも自分の全てをぶつけ合え。そしてお互いにもつと厳しくなれ。そうすれば、快い緊張感が生まれ、部の雰囲気もよくなり、チームワークも自然と結実し、「良いチーム」ができることだろう。

以上、やや分析的に述べたが、サッカーという球技は、基本的にチームゲームであると同時に各プレイヤーの自主性・創造性が重んぜられるスポーツである。従つて、プレイヤーの個性を考えないチームはだめであり、逆にチームの事を考えないプレイヤーもだめなのである。チームと選手との関係はこのように相互的矛盾(?)の関係にあり、両者を弁証法的に統一(?)

してこそ、良いチームが生まれる!というよりなことを最近考え始めた小生である。

具体的には、もつと「練習と試合とを結合」させ、実戦的練習をしたら・・・、とか、もつと「激しい試合経験」を積んだら・・・とか、体力及び精神力のトレーニングが足りないのでは・・・とかいろいろあるが、これらは現役の諸君とグラウンドであるいは一杯飲み屋で話しあいたいと思つている。

(昭和五十年三月一日)

卒業するにあつて思ふ事

四年 大 高 松 男

思えば四六年四月桜吹雪舞う頃東大に入学し、即座にこの伝統と栄光に輝く東大サッカー部に入部し、途中挫折することはありましたが、四年間というものは、今思えばほんの一瞬でしかなくつたよな気がします。喜びよりも苦難の多い歳月でしたが、今にして思えば、それもさわやかな思い出になつています。それはなぜかと言えば、自分なりにやるだけやつたと思えるから。

ぼくは、サッカーも好きですが野球も好きですから、その野球にたとえて言いますと、この四年間というものは多摩川で過ぎ

てしまいました。いつの日か後樂園のひのき舞台でプレーする
というのを悲願として、それこそ風の日も雨の日も、夏の陽
の照りつける日も、あるいはみんなが帰つた暗やみの中で、練
習に励みました。おそらく、四年生の中でぼくが一番練習量が
多かつたと思います。その質はどうかわかりませんが。しかし、
遂に悲願は実らなかつた。後樂園の壁は高く厚かつた。それで
も何度か、その壁をよじ登り、もう少しで越えようかという所
まで行つたこともありましたが、運命の女神のいたずらか、す
べて足を踏みはずしてしまつた。それ以後は、壁は遠のくばか
りだつた。なぜ巨人の星をつかむことができなかつたかとい
うと、おこがましく聞こえるかもしれませんが、迷いがあつたか
らと言えます。迷いとは、自分のプレーに対する迷いであり、
サッカー以外の事に対する迷いでもあります。つまり、自分に負
けたと言えます。

もう一度、青春が繰り返せるのなら、自分の足の速さをみ
ぐのに全力を傾けてみたい。後輩諸君も、オールラウンドプレ
ーヤーをめざすのもけつこうだが、自分の良い所を徹底的にみ
がいてみてはどうか。足の速さとか、キック力とか、タツクル
の強さとか。

青春時代、他に遊びたいこともあるのに、サッカーに情熱を
注ぐというのは、そこに喜びを見出ししているからであらう。
一つの事に没頭することは、犠牲を要求する。そこに自分との

戦いがある。どれだけ、自分に勝てたか、つまりどれだけ犠牲
にできたか、それがスポーツの苦しみであり喜びであり、そ
うして初めて栄光がある。

さて、秋のリーグ戦が終わつてから、新チームのゲームを数
試合見てきたが、正直言つてかなり弱体化したように思う。全
くチームの和がなく、肝腎のチームのかなめもない。早くチ
ームをリードしていく人物が現われないことには強くなるまい。
主将の奮気を望む。

現役を退いた今、気になるのはこれからの東大サッカー部が
二部でどうやつていくかということです。今のところ、二部
下の方に名を連ねているが、酷なようだが、一部は無理だろ
うから、せめて二部の上の方に連ねて欲しい。

最後に、東大サッカー部が不死鳥のように大空高くはばたく
ことを期待します。青春を賭けたサッカー部よ、さらば！

四年 尾崎 哲 男

オレはネ、試合の前の晩が一番好きだつたんだ。リーグ戦の
メンバー表見てね、明日誰れが出てくるか考えるんだ。一人一
人の顔を思い出す。とくに自分のマーク相手のやつ顔を、体
つきを。そうすると頭の中でそいつがプレーしだすんだ。ゲー
ムを見ててそいつのプレーだいたい憶えてるし、あとは勝手に

プレーさせるんだ。そして、この時はこうプレーしよう、こんなボールが来たら大きくクリアだ、こいつは足が速いから早めに体をとつちやおうとか。そいつにいろんなプレーをやらせ、それを全部オレがとめる自信ができるまで、アレコレと考えるんだ。

そうすると、明日は絶対大丈夫つて気になるんだ。

攻める方はあまり考えなかつたな。オレ出来ること決つてたろ、オープンへ出てボールもらおうとだけ考えたんだ。

それが終わつたら即寝る、

相手が予想どおりプレーしたこと実際には少なかつたな。オレも考えたよりには動けなかつたし。でも自己暗示つていうのかな、自分のプレーになんか自信がつくんだ。だから毎試合やつてたんだ。

昭和四九年度王将 柴田敏之

四年間のサッカー部生活を終えて、今はやはり、ほつとしたというのが実感であろう。自分の生活の中の大きな部分を占めていたものが突然ぽつかりと抜けて、その穴りめを一生懸命しているという状態である。

四十六年入学と同時に入部した。国立立戦からレギュラーに選ばれ、あの暑いさなかの京大戦にもフル出場させてもらい、リーグ戦も全試合フルタイム出場した。あれからもう四年近い年

月が流れた。本当に今になつてみると短かい四年間だつたと思う。

四十八年秋、我々が三年生の時のリーグ戦、天皇杯予選が終つた時点で我々の代が最上級生となつた。初めて本格的に年間計画をたてたり、練習内容等について *discussion* がなされた。

我々の代の前半、即ち京大戦までの目標は、先ず春の対抗戦では予選リーグを勝ち抜き決勝トーナメントに勝ち進むこと、そして京大戦で京大をうちのめすことにあつた。春期対抗戦は我々が入学した年から始まつた企画であつたが、これまで常に予選リーグで敗退していた。しかし今年はず早大・教育大・青学を相手に、一勝二引分としベスト八入りして決勝トーナメントに出場し、惜しくも第一戦明治に1-0で敗れたが例年と比べるとまあまあの出だしであつた。

前半の目標の京大戦は京大を徹底的にいためつける予定であつたが、予定が崩れて1-0の辛勝であつた。ここまでの所、今年のチーム試合内容などを見てもまあまあの上りといえたいと思う。

約三週間の休みの後、あの炎天下の検見川で、一六日間に渡る合宿を行ない、天皇杯予選等の試合を経て、得点力に若干の不安を残すものの守備は安定し（天皇杯予選三試合無失点）リーグ戦に臨む体制は十分に整えられた。

このようにリーグ戦に突入するまでは一応予定通りであつた。こうしてリーグ戦が始まつた。

第一戦対拓大、前半早いうちに先取点をとり心秘かに今年の好成績を思つたものだつた。しかし前半終りに相手のシュートがバックスの足に当つて入るというSHIBUKOYAの失点があり幸運の女神は我が東大のFLOORから遠ざかつてしまつた。以後東大は得点することができず、結局1―2で敗れた。一試合勝点一を目標にして、これまで三年間殆ど先行したことがなかつたのを今年第一戦に勝つて調子にのつてつき進もうとしていたのが、第一戦からつまづいてしまつた。第二戦は日大であつた。

日大は第一戦に相手が成城とはいへ9―0で勝つている手強い相手である。前半は一点を先取されたが同点のチャンスもあり好試合を展開したが、最後に逆襲から二点目を取られ、後半にも一点を追加され3―0で完敗した。この試合も決めるべき所で決めるという決定力の弱さを痛感した試合であつた。第三戦一橋大には2―0で勝つたものの、第四戦青学大には2―2の引分け、それも二点を前半先行され、タイムアップ数分前にやつと二点目をかえすというきわどい試合であつた。この時点で上への望みは現実的には消えてしまつた。第五戦対国士館、前半開始から二〇分間攻めに攻めるが点がとれずバックス陣も自然に前に前にと体重がかかる。そこで逆襲一発点をとられた。この試合に敗れたら完全に上位は望めない、ますますバックス

陣の前傾姿勢は強まる。その背後をつかれ、結局1―4で破れてしまつた。一勝三敗一分、勝点三である。下の心配をしなくてはならない状態である。しかも第六戦はあの快進撃を続けていた日大に土をつけた順天である。この試合を前にバックス陣は話し合ひ、「初心に戻ろう」「リーグ戦突入前の失点の少なかつた状態に戻そう」と確認しあつた。果して結果は0―0の引き分けであつた。この試合も惜しいチャンスを逃がすこと数度であつた。最終戦、八位は成城が決定しており七位は東大と一橋が候補であつた。一橋はすでに全日程を終了しており東大が成城に勝てば一橋、勝てないと東大が七位になる所であつた。実力を出せば楽勝のはずの成城相手に皆ガチガチとなり、結局4―3で勝ち入替戦はまぬがれた。

このように今年は六位という不成績に終つた。リーグ戦突入の時の予想とはとつてもかけはなれた結果だつた。つくづくリーグ戦、サッカーというものの難しさを再認識した一年であつた。せめてものなぐさめは、リーグ戦後の天皇杯予選で早大と戦ひ、0―1で敗けはしたもののリーグ戦前のような姿を最後に再びみせられたことであつた。かえすがえすもこのような試合をリーグ戦でできなかったことが残念である。

反省

昭和四九年度主務 兵頭圭介

肉体的な素質と運動神経に恵まれなかつたせいか、「試合に出る事」よりも、「試合のためのライン引きをする事」とか、「選手の使う水をくるんでくる事」等が、東大サッカー部における四年間の自分の主な仕事だつた。そのためか、一年下に谷本というマネージャーの素質のある人間がいたにもかかわらず、自分が主務をやるという事に對し、部内の抵抗はあまりなかつた。

主務を谷本に引継ぐにあたり、自分はやはり主務として失格であつたと思う。服装や、生活面でのだらしなさ、緻密な思考力の欠如、テリカシーのなさ等がその理由として挙げられるだろう。こういつたことよりも、リーグ戦に勝つて良い成績を挙げるのが部の大ききな目的であり、その目的達成に協力するのがマネージャーの仕事であるのだから、選手の粒が揃い、OBからも期待された今年のリーグ戦の成績が芳しくなかつた事実が、主務としての自分のやり方がよくなかつたことの証拠であろう。東大のように、個人技、体力の面で劣るチームにとつて、チームのまとまりは成績を左右する大きな要素である。今年のチームはその面で欠陥があつたようだ。一人のプレーヤーがミスをする、他のプレーヤーがそれをなじる、という場面が繰返

された後に失点が生まれ、負ける、というケースが多かつたようだ。

リーグ戦の前の練習試合では、同程度のレベルのチームに對しては勝つ事が多かつたし、自分達よりレベルの高いチームに對しても、僅差で敗れる場合が多く、自分としては、チームの調整は順調にいつていると思つていた。しかし、「健闘した」試合が多かつたためにかえてチームの長所・欠点がはつきりつかめなかつたのではないだろうか。「このままでよいのだ」という自信、悪く言えば増長のよりなものチームにとつてマイナスになつたのだろう。

自分のだらしなさが他のチームメイトにも伝染したのか、部屋はかつてない程に乱雑な状態であり、リーグ戦中の相手チームのスカウティング（情報集め）もうまくゆかず、残念であつた。

自分としては一生懸命やつたつもりであつたが、それがチームのために良い結果をもたらさなかつたことは、チームメイトに對しても申し訳ないし、自分にとつても残念なことである。しかし、運動会の仕事や、学連の運営を手伝えたことは、自分にとつて貴重な経験であつた。主務の仕事をさせてくれたチームメイトやOB諸氏、とりわけいつも手助けをしてくれた谷本、茅野、西山の三氏には、心から感謝の意を捧げると共に、色々迷惑をかけたことを申し訳なく思つてゐる。

今思うこと

四年 山 中 馨

四年間最後の公式戦が昨年十一月一〇日に終わつてから三ヶ月余り。明日はもう追出しコンパだという。まあいろんな意味で区切りは大切だ。

今何枚かの写真を見ている。試合や練習の或る瞬間だ。これに頼りに色々なことを想い出そうとするのだが、記憶力が弱いのか、どうもはつきりしない。一年前位迄がせいじつばいだ。特に試合のこととなるとブランクばかりだ。言葉では覚えている。しかしこれは、父母から話された言葉で自分の子供の頃の事を覚えていると感じているのと大して変わらないようだ。実感が残っているのはほんの瞬間のことだけ。それも試合開始前のこととか、終わつてから酒を飲んで大騒ぎした時のことなど、馬鹿げたことばかり。もしかしたら、試合に出ている者にとつて、試合は緊張の連続で、感激している余裕も無いのかもしれない。

四年間の戦績は二部四位が最高で、二年の時は部史上初の、下の入替戦を経験した。低迷の四年間だった。結果は小気味良し。毎年毎年一部の学校相手の試合では、結構まともな成績が残っている。全日本チームと似たようなものだ。ところがリーグ戦の成績はどうだ。多くの仲間が、もう少ししてきたはずなのにという感想を持つていてのではないか。しかしそれも四年間

続けば、実力として評価されることになる。実力というものをすべての総合と考えるなら、この成績に現れたのがまさに実力なのかもしれない。技術、体力、精神力、及びその他の要素がからみ合つて、しかもそれが個人としてでなく、チームとして一つ現れるのだから、もう複雑怪奇。結果こそ正確で、実力相応として諒解すべきなのだろう。しかし僕の心には確かに、いまだに幾分かの残念さが残つている。何といつたところで勝たなければ駄目だと、やはり思う。

チームは精神面の弱さをよく指摘された。いざとなるとかたくなつて力を出せない、などといつも言われたし、自分達もそう感じていた。自分の精神面の弱さは解るような気がする。僕はサッカーが生活に占める割合を小さくしようとした。「きよりの練習はこれで終わり。」の一言で、その日のサッカーは終わり、もうサッカーの時間ではないのだ。サッカーの雑誌は読まない。試合も余り見ない。試合の中継放送も特別なもの以外は見ないし、要するに、サッカーなんて好きじゃないつていう人のような生活をしていた。それでもしないと段々重くなつて、動きがとれなくなつてしまうような気がした。ところが、そんな抵抗も空しく、というより、かえつてなおさら、サッカーは深く浸み込んできて、がんじがらめ。リーグ初戦の前夜などまさに恐怖。眼が醒えて、足の裏が汗ばんで、何度も水飲みに立つたり。相手チームのこ

とをあれやこれやと考えているのが、本当にいやだった。口では生意気なこと言いながら、何ともはや弱々しいとよく思つたものだ。

先日、元横綱の大鵬が、ここ一番の大事な勝負でいつも負ける大関を見て、「もつと馬鹿にならにやいかん。」と云つていた。重い言葉だと思つた。だけど・・・たやすくはないな。あれやこれやと考え込んでしまふ人間に「一生懸命やればいいんだ。」と云つても、その言葉は結局のところ真実ではあるけれど、たいした力を持たない。

サッカーに關することを最も単純な形、勝ち負けという点に絞つてしまつて、勝つ為にどうすればいいかだけを考へてみること、恐らくそんな考へ方のできるものが、精神面の強さなのかもしれないと今、思う。しかし言葉で納得しても、それだけではどうにもならない。四年の時、特に夏になつてから、リーグ戦のことを考へていて、あれこれ思ひめぐらすうちに頭全体が入り乱れてどうしていいか解らなくなつてしまつた。だから、どうしても勝つことが必要をよりだ。

四年 山 辺 福二郎

四年の間に必ず東大を一部に入れてやろうと思つていたのですが、やつぱりダメでした。今思うことは、サッカーは本當に

なかなかうまくならないものだということです。その主たる原因は、自分が毎日氣を入れて練習してはなかつたことで、わかつていても実行できない自分が齒痒くて仕方ありませんでした。テレテレ練習していたのではなかなかうまくありません。実感です。サッカーに對する闘志がムラムラとわいてくる瞬間、これを忘れないことが重要なことだと思ひます。

私は就職してもサッカーはもつとうまくなりたいと思つています。中学の頃から、コバカバーナの浜辺でボールを蹴るのが夢でしたが、この夢も是非近いうちに実現したいと思つています。

// 言わずにこしたこと //

四年 吉 沢 伸 明

過ぎ去つた日々は、思ひ返すほど早くかつ悔いの多いものよりであります。一年生のとき、何となく駒場の居こちが悪く、フラッと御殿下へ来て入部して以来、四年生のサッカーへの真摯な態度に驚くと共に心を動かされたのが運のつきで、夢中で過した四年間でした。

勝負を思うと齒ぎしりし、プレーを思うとああすればよかつ

たと悔い、練習を思ふともつときびしくと反省するばかりですが、それなりに楽しく充実した四年間であつたと思ひます。

一年生のとき、四年生のまとまりのなさ、チームの精神面の弱さを見て、まとまりのあるクラブにしたいと思つた初志は、買き通せなかつたようです。自己の怠惰と無力をかみしめつつ、そりいわざるをえないのは悲しいことです。この四年間の苦しい練習は何であつたのか。我々のチームとは何なのか、東大サッカー部とは何か。そして何より部員としての己れとは一体何か。このような疑問に答えることは、今の私にはできません。あまり生々しく、きびしい問いかけだからです。生活の何パーセントかを否ぼとんどを賭してやつてきたものを問い返すなどという作業は、苦しくもあり、自己正当化の危険もあります。だからその感情に従えば、ここで筆を置くのが筋の通つたやり方なのでしょうが、どうしてもひとこと言つておきたいことがあつて、それを書かないと胸のつかえ棒がありません。敢えて書きます。妄執か、心の迷いかとにかく、恥かしさも自己欺瞞も度外視して、書くことにします。

部員であることは一体なんなのであろうか。部費を払つてゐるから、名簿に載つてゐるから、好きなきに練習に出てくるから、あるいはウマク練習しなくても試合に出られるから部員であるのか。答えは否である。部員であること、それは日々の練習を共にすることなのである。もちろん、サッカーに対する

熱い情熱は、いわずもがなのことである。しかし、それだけでは、試合はできない。あの御殿下の、半地下の薄よごれた部屋に集り、石コロだらけのグラウンドで一筋に苦しい練習をすること以外、サッカー部員としての共通項が一体どこにあるというのか。これは極く当たり前のことである。しかしここから出発し、これを起点として考えなければ、現状打開の道はないと思う。肝心なところで勝てない、精神的弱さ、チームのまとまりのなさ等々、よく耳にする批判である。確かに、現在二部で、東大がどうしても勝てないと思うチームなど居ない。いやおそらく一部にも居ないだろう。しかし、全敗の可能性も充分にある。その壁をどうのりこえるか。

これから東大のチームが生き残る方向として考えられるのは、基礎技術と基礎体力の徹底強化とその上でアタマで勝負する、サッカーを知り考えることを有利とするやり方だと思ふ。昨年はこのうち基礎体力に大きな禍根を残した。今年はまだ全般にわたつて問題がある。特に、鍵となるサッカーへの理解においては、甚だ心もとない。

しかし、このやり方には異論もあろう。方法は無数であり、メンバーにあつたやり方を選ばばよい。しかしそれにしても、どのようなやり方にも最低限チームとしてのまとまりは必要である。チームとして戦ふことなくして、勝つことができないのはサッカーに関しては真理であらう。

ではチームとは何か。チームワークとは何か。チームの心は一つに結ばれていなければならぬのか。メンバーの心の連帯なくしては真のチームワークは成り立たぬのか。難問すぎるが、あえて今解答を求めるとすればそのような確かな精神的紐帯なくしてもチームは可能であり、勝利のためのチームワークは得られると答えたい。もちろん一人のなかに確固とした連帯が作られ、すばらしいチームができれば、それは理想である。

私としてそれを切望し、無駄な努力を繰り返してきた。しかし、あえてそのような連帯は、砂上の楼閣、白昼夢に過ぎないのではないかと、いわざるをえない。決してベシミスでも性悪説でもないが、一年から四年までいて、しかもそれぞれ或る程度自我の形成を終つた半大人たちが一年間の練習でそこまで確かな精神的結びつきを作り出せるかどうか、懐疑的たらざるをえない。

であるなら、いかにしてチームを作り出せるか。それは、仲間を理解するといつても、サッカー選手としてのあいつであり、チームワークといつてもサッカーに関してのものなのである。ここで彼にパスにすべきか否か、あるいはカバーすべきか否かは、チームメイトとの心のつながりの深さによつてではなく、(もちろんそれもひとつの条件ではあるが、ポイントではない) それはその選手の技術、体力あるいは戦術、戦略眼等によつて決まつてくるべきものである。そういう意味で、私も我々のチ

ームもチームを作ることに努力が足りなかつた。きびしさが足りなかつた。心の交流は必要だが、それですべてをカバーできるわけではない。サッカーのチームを作りたかつたら、サッカーを知り、プレーの上で連帯しなければならぬ。そしてプレー上の連帯は、心の連帯を必要最小限要求するがそれとは別の次元の、サッカーという次元での努力によつてこそえられるものなのだろう。

しかし、そのような努力ですべて解決されるのかといへば、再び否といわざるをえない。「サッカーは科学ではない。」とは一年のときのキャプテンの名言であるが、その言葉通り、純粹にサッカーだけをとりだすことは実際上不可能であろう。サッカーが一人の人間によつて戦われる以上、人間的要素が複雑にからみあつてくることは避けられない。

しかしであるなら尚さら、我々部員とは一体何かという最初の問いに立ち返らざるをえない。練習を共にするといういわば部員の原点に立ち返つて、そこを基盤としてひとりひとりがそこにこだわり責任をもとうとしてほしい。そして、そのような日常的な練習を平凡に、しかし懸命にやるところに、あるいは、勝敗を越えた何か、我々の目標とするに足るものがあるのかもしれないが、とにかくそのような「責任をもつた」、「誠実な」態度で日々の練習に取組むるとき、真に強いチームができるのであろう。部員であることの共通項は何か。共にグラウンドで苦

しい練習を日々行ふこと、それ以外にはない。そこにこだわつてほしい。それが壁を突破する道であると思う。

長々と、駄文を書き綴りましたが、この四年間ともかくも充実したサッカー生活が送れたのは、監督、OB諸氏、現役諸君のおかげです。とくに、浅見監督、古村さんにはきびしく指導していただきました。それに報いるだけの成績があげられなかつたことが残念でなりません。ありがとうございました。OBとなつてしまふ今は、ただ今年の活躍を祈るのみです。

現役よがんばれ!!

ある無名選手の思い出と決意

新主将 池 森 俊 文

新キャプテンとして、もつと適当なチームがあるだろうが、相互理解を深める為、敢えて大学までの知られざる過去を公開しようと思う。

私が球を蹴り始めたのは、小学校の五年生の時、折りしも東京オリンピック後の、所謂サッカーブームが始まる頃だつた。希望者が参加する「サッカー教室」で、日曜日に集まつて東洋工業の選手などに指導してもらつたのだ。しかし、毎週は開かれなかつた。そして、放課後には野球をやつた。

中学は広島大付属中に入学した。そのサッカー部は伝統があり、当時もまだ、広島ではトップクラスだつた。「新親」な友達からサッカー部の練習の恐ろしさを知らされて、何となくサッカー部を避けていたが、或る日昼休みに、木造校舎の二階の窓から、ひとりの先輩が、声をかけてくれた。「サッカー部に入らないか。」空自そのニコニコした笑顔が、春のやわらかい日差しを受けて、とてもやさしそうに見えたので、あの友達の忠告を無視してサッカー部に入学してしまつた。あの笑顔が買だつたのだ。ここから人生が狂つた。(新入生の勧誘は効果有り!)

練習は予想以上に苦しかつた。夏には合宿もあつた。が、結構友達と仲良く楽しくやつていた。ところが、二年の時、友達が春の公式戦で初めて使われた。その時まで、二年生はまだ試合には出られないと思つていたし、試合に出場できる時は、みんな一緒だと思つていた。だが実は上手なら誰でも出られ、その為部内での競争があつたのだ。それに気付き、三日後から、朝早く学校へ行つて練習することにした。(二日間は、その時のくやしさと、何もする気がしなかつたので。。。)この抜け駆け的行為は効果があつた。一月月ぐらい続くと、何となく自信がついた。そして、この甲斐があつて、秋の公式戦では、試合に使つてもらえた。しかし、ここで満足して、この早朝練習をやめてしまつたところは、流石無名選手。

高校は、そのまま広島大付属高校に入學。しかし、サッカー部へは「そのまま」ではなかつた。何しろ、「泣く子も黙る」高校サッカー部だつたから。だが結局入部してしまつた。

一年生の時がいちばん苦しかつた。毎日、昼休みに部室へ行つて、ボールに油を塗つてから空気を入れる。練習前には、グランド整備・ライン引き・ゴールネット張りなどをする。練習後にはあとかた付け。これを全部、一年生がやつた。また、練習中には、「一年生は体力がないから」といつて、特別サービスのトレーニングが課せられた。本當にどうなつてゐるのか。毎日毎日、今日こそやめてやろうと思つたものだ。(中学三年の終り頃から多小貧血ぎみだつたこともあつて。)しかし、苦しくてやめるのは、何となく後ろめたさを感じた。これは、監督の福原先生の影響が大きい。

この先生は、きびしかつたが、立派な人だつた。よく、「サッカーは人生の縮図だ。」とか「サッカーをやりながら、自分の哲学を作れ。」とか言われた。また、「試合では、自分の相手と命を賭けて勝負しなければならぬ。」というのが、試合に対する思想だつたと思われる。その影響で、私もしばらくの間、この思想に浴つてサッカーを続けた。ところが、この先生は、高一の冬に亡くなられた。その為か、これらの言葉を思い出すと、ズシンと心に響いてくる。

あの頃から、既に五年もたつてしまつた。その間に全国大会

に出場したり、学問を志してサッカー部を一時やめたりで、いろいろな事があつたが、結局、現在もサッカーをやつてゐる。この間に、自分としては、いろいろな面で成長したと思う。特に精神的には、少なからず穏やかになつたようだ。だが、これは、少なくともサッカーをするうえで、成長なのだろうか。試合に出られなくても「下手なんだからしかたがない。」と諦める心が、くやしさを押し殺してしまふ。だから、早く来て練習したり、遅くまで残つて練習することはあつても中途半端だ。また、試合中に目の前でボールを蹴られると思わず顔をそむけてしまふ。あの高校時代の試合に対する心の激しさは、何処へ行つてしまつたのか。当時は体を張る事では負けないう自身があつた。しかし今は何も誇れるものはない。

大学も遂に四年目になる。これが、サッカーをする最後の年になるかも知れない。ここでもう一度、あの情熱をよみがえらせることができればと、若干の失なわれた時へのノスタルジアを伴つて、思つてゐる。

(この作品はノンフィクションであり、登場する人物・団体は、実在のそれと全く関係ありません。)

三年 植村 祐幸

僕がサッカーを始めたのは、中学一年の頃であるから、九年

V サッカー部この一年

昭和四九年度サッカー部活動報告

〈新チーム発足〉

昭和四八年十一月三日、「山下」に新最上級生が集まり、今年目標Ⅱ上の入替戦に出場し、一部に復帰するⅡを決め、同一四日合宿所での新四年生のミーティングで柴田主将、山中副主将を承認する。今年はず年のレギュラーから抜けるのが実質的に一人しかいないので、目標達成に大いに期待をかけられ、我々もまた張り切って練習にのぞんだ。

11・16 東大2-1-0 (0-1-0) 鉄門(東大G)

11・17 東大1-1-3 (0-1-0) 東京学芸大(東大G)

下の入替戦出場の学大とのやる気の差で敗れたが、殆どベストメンバーでやったにも拘らず、まずい試合であった。

11・25 東大4-1-1 (0-1-1) FC青山(東大G)

12・1 東大2-1-1 (1-1-1) 駒沢大(砧本村・駒大G)

12・8 東大2-1-1 (1-1-0) 埼玉大(東大G)

12・9 東大10-1-1 (2-1-0) 東大OB(東大G)△納会V

このところ若手OBチームが現役に全く勝てない。奮起を期待する。

〈74年春〉

一月一九日練習再開。週四日の練習にウエイト、インターバル、一二分走をとり入れる。また、駒場体育科の生田氏の協力で、ランニング・フォームの指導を受ける。試験近し。練習をサボる部員が多くなる。

1・26 東大3-1-3 (3-1-0) 横浜国立大(東大G)

1・27 東大1-1-1 (0-1-1) Y.O.A.C(Y.O.A.C.G)

2・16 東大1-1-0 (0-1-0) 読売クラブ(若手)(読売ランド・サッカー場)

3・2 東大6-1-2 (5-1-1) 自由学園(東大G)△追いコンV

春休み(3・3~3・11)

3・17 東大0-1-1 (0-1-1) 三共(東大G)

3・21 東大1-1-0 (0-1-0) 成城大(東大G)

3・24 東大3-1-1 (1-1-1) 新日鉄広畑(東大G)

この日の午後より、春合宿入り。(3・30)

3・29 東大0-1-2 (0-1-0) 関東学生選抜(検見川A)

3・30 東大1-1-1 (0-1-0) 順天堂大(検見川A)

合宿中は雨などがよく降り、三日間延べ四回の練習は体育館でミニゲームなどを一時間程すつやだったので、大して、きつい合宿にはならなかった。学生選抜には、まあ善戦。順天は、技術はうまかったが、強さ恐さは感じられなかった。

4・6 東大110 (010) 東京学芸大(東大G)

4・7 東大012 (011) 上智大(東大G)

いづれも、去年関東二部、現在東京一部の二校とやったが、学大には辛勝。上智には、ほぼ完敗といっている内容だった。

合宿休み後、二日間しか練習をしておらず、「試合をやりすぎる」との声高し。

4・18 東大111 (010) 埼玉大(東大G)

戦術的には埼玉の方が上であつた。

4・14 東大214 (211) 横河電機(東大G)

一軍半のメンバーだったが、だらしない逆転負け。

《春季対抗戦》

4・21 東大311 (011) 教育大(東伏見G)

沢野 中崎 中森 田川 藤辺 村武

吉天 田尾 山池 小野 柴荒 加山 植宮

3 C 1 3
1 0 F 1 1
5 G 1 2

のサッカー」を心得た東大の快勝したゲームであつた。

4・28 東大010 (010) 早大(東伏見G)

沢野 田崎 中田 森川 辺村 武

吉天 柴尾 山田 小池 荒山 植宮

1 F C 3
1 8 F 1 4
4 G 1 6

先週とはうって変わった最良のグラウンドで、学生チャンピオンの早大と堂々と引分ける。田中を確井につけ、ソートップの布陣で、とにかくガッチリ守り、カウンターアタックで攻める戦法でスタート。この作戦通りに試合はすすみ、後半、山辺のセンターリングを田中が見事なボレーシュートを決めたが、言われのないオフサイドをとられ、勝ちをのがす。早大のコーチも負けを認める位で、東大の会心の試合であつた。

5・3 東大111 (010) 青山学院大(東伏見G)

沢野 田崎 中森 中田 辺川 藤村 武

吉天 柴尾 山池 田小 野 荒加 植宮

5 C 1
1 1 F 9
4 G 1 4

雨が降り、水びたしのグラウンド。前半三四分マークのずれから、痛い失点をしたが、後半、粘り強い攻撃から官武が

二点、山辺が一点をとり、気力の逆転勝ちをおさめ、春季

対抗戦初勝利をあげる。柴田をHBに下げ、滝井のマークにあてたのが成功。中盤からの早いチェックと、「雨の日

この試合、二点差以上で負けなければ決勝トーナメント進出とあって、最初から固くなったのと、前の試合の気のゆるみから、殆どよいところがなかった。青学のスピードに

のつたドリブル攻撃と豊富な運動量にかきまわされ七一三で押される。BK陣のがんばりで、よく耐え、守っていたが、後半、正面からワントラップ・シュートを決められついに均衡を破られる。これに目覚めたか東大はすぐ反撃し、山辺一宮武とつないで一点を返し、かろうじて引分けにもつこみ初のベスト8進出に成功した。

5・6 東大 0 1 1 (0 1 1) 明大 (大宮 G) ^ 準々決勝 V

沢野	田崎	中森	崎	辺川	藤村	武		
吉天	柴尾	山田	池山	山山	荒加	植宮		
							9 C	6
							1 2 F	1 9
							9 G	1 2

東大は、例によってツートップでスタートしたが、結果的には4-3-1-3でやった方がよかったようだ。明大はさしてうまくなく、ほぼ五分五分でボールをキープできたからである。前半は神谷に右サイドを突破され、危ない形を作られたが東大も、植村が絶好調でその膝を深く曲げ重心を低くした姿勢からくりだす鋭いフェイントと持ち前のキープ力で明大のBKを翻弄し、一部にも十分通用することを実証す。東大にも再三チャンスはあったが今ひとつ「何か」が足りず、前半の唯一の失点が結局命取りとなった。

5・4 東大 1 1 5 (0 1 3) 全日本ジュニア (東大 G)
春季対抗戦中ではあったが、朴杯に参加するジュニアから

申込みがあったため、「胸を借りる」つもりでやることにした。早大の四人を含むジュニアに対して、東大ははつらつと戦ったが、技術差戦術眼の差、体力特にスピードの差はいかんともしがたく、大量五点を失い、得点は植村の一点にとどまった。

《対抗戦以後》

この頃、やや気が抜け、中だるみ気味。

5・25 東大 0 1 2 (0 1 1) 立大 (東大 G)

「五年生」二人をスタメンに加え、ST笠原をCFに使うを試みしてみたが、暑さの為か動きがにぶく、全般的に走り負けしていた。

5・26 東大 4 1 0 (2 1 0) 東大OB (東大 G) ^ 五月祭 V

6・2 東大 1 1 2 (1 1 0、0 1 2) 明大 (八幡山 G) (45分3本)

一本目はベストメンバーを組み、速藤のCKを田中が豪快にヘッドで決めた一点をどうにか守りきる。

6・8 東大 0 1 0 (0 1 0) 日体大 (東大 G)

6・15 東大 4 1 0 (2 1 0) 国士館大 (東大 G)

後半最後の方は暑さでバテ、押されつ放し。スタミナ不足。

《国公立大会》

6・16 東大 4 1 2 (2 1 0) 外語大 (電通大 G)

「来年のメンバー」でやる。二点をリードしながら、後半

苦しい戦いをしたのは(特にBKの)試合経験の不足か。

これは、一軍にもいえることだが、視野の狭いこと。自分の仕事(いるべき所、やるべき事、やれる事)がわかっていないということが目立って感じられた。

6・23 東大0-12 (0-10) 一橋大(電通大G) 入準決勝V

「ベストメンバー」でのぞんだが、ひどい試合をやる。グラウンドが悪くてすべるのに、ボールを持ちすぎたり、「単純」に蹴ることを忘れたりし、後半FKと、BKのミスから二点を失い、完敗す。試合後、①精神面を含めた準備不足↓一橋を甘くみる。長いポイントをつけるなど。②やる気の差からくる動きの量、ボールへの寄りの速さの違い。③厳しいマークや激しい当り、ファウルに対して冷静さを欠き「熱く」なったこと。④オフフェンスではゴールへの執念、ディフェンスでは、単純さ、カバリングの不足。などが負けた原因としてあげられる。

6・30 東大2-10 (1-10) 東京学芸大(電通大G) 入三位決定戦V

京大戦一週間前の為、前後半メンバー総入替で最後の「テストマッチ」としてやったが、浅見監督の「絶対勝て！」の至上命令のもと、全員よく動き、前半森井、後半加藤が一点ずつ決めて、快勝す。とにかく京大戦に向けて、チームのムードは上昇気流にのった。

《京大戦、遠征》

7・6 東大1-10 (1-10) 京大(京大農学部G)

沢野 田原 中崎 木藤 野村 刃中 井
吉天 柴笠 山尾 佐速 牧植 山田 森
C F G

「東大の試合」で快勝。ハレブの構成力では劣る為中盤ではある程度回させ、勝負はバックラインでやる。攻撃では、早めにトップにつなぐか、敵のバックラインの裏にボールを放り込み、森井のギープ力や植村のドリブル等を生かす。CK、FK(特にゴール近くの)を大切にやるやり方。この作戦が効を奏し、前半植村のCKから、ニアポストにつめた佐々木がヘッドディング・シュートし、バーに当たってはねかえるところを笠原がよくフオロし、けりこんで点をとり、これが結局、決勝点となった。京大は、SW永井が前線にフリーで攻めあがってくる時以外は攻めに迫力が感じられず、点を取られる形はほとんどなかった。

7・7 東大1-12 (0-11) 紫光クラブ(京大農学部G)

この後、姫路へ行き、新日鉄広畑の研修所に泊まり、ワートルドカップ決勝の中継を見る。

7・8 東大3-10 (1-10) 新日鉄広畑(広畑G)

この遠征で二軍は負け知らず。京大二軍に5-0、青城ク

ラブに一年主体で410、日本触媒に210といずれも無失点試合。

この後、三日間休み。

《七大戦》

七月一二日検見川集合。今回は京大、東北大を除く五校が参加。

7・13 東大310 (210) 名大(検見川C)

7・15 東大010 (010) 九大(検見川C) ^ 決勝V

(PK615)

九大は体格がよく、パワーもあったが、技術的には東大の方が上、にもかかわらず点がとれず、まずい試合をやった。

一人一人のイメージがかみあわず、コミュニケーションが足りないということが中盤でのつまらないミスパスや決定力の不足につながっていると反省された。

二軍も名大に310、九大に310で勝ち「無失点」を続けつつ優勝する。

夏休み 7・16 ~ 8・4

《夏休み以後》

今年は七大戦の主催校だったため、例年七月下旬にやっていた山中合宿をとりやめ、検見川で一次(8・9~16)二次(8・25~9・1)の二回のみ合宿をやることにした。この頃より、一、二軍間の意識の分裂が表立ってくる。

8・9 東大110 (010) 京大(検見川アメ・フット場)

一軍半程度のメンバーでやった後半の方がのびのびとやり、加藤の一点を守り切り「返り討ち」をくらわす。

8・14 東大011 (010) 富士通(検見川C)

①守備では人を押さえること、攻撃ではパスをもらう前のマークをはずす動き。②一人ひとりのやれる技術をふやしプレートの幅を拡げること。③攻守の切替。④中盤での「準備工作」としてのダイレクト・パス。が課題とされる。

8・22 東大112 (111) 中京大(東大G)

8・30 東大111 (111) 千葉教員(検見川C)

9・4 東大012 (012) 東京選抜(東大G)

9・8 東大011 (011) 東京朝鮮蹴球団(東京・朝鮮高G)

残暑の為、双方動きにぶし。きびきびした動き、気力あふれるプレーがみられない。

《天皇杯関東一次予選》

8・29 東大110 (010) 日産自動車(新子安・日産G)

沢野 田原 中崎 木藤 井辺 村武

吉天柴笠山山山	佐遠森山植宮	8 G 1 4
		1 2 C 1
2 5 F 1 3	2 5 F 1 3	1 2 5 F 1 3
		1 1 1 1

炎天下のアウトエイ・グラウンド。しかも相手は強化中の日産とあって、相当の苦戦を強いられたが、後半一分、PKが

ら佐々木―遠藤―宮武とわたり、この一点をツキヤ、相手の焦りにも恵まれて、守り切り、辛勝する。攻めではF B天野のオーバーラップなどの変化がでてきたものの全体として、暑くなるとすぐ運動量が減り、ムダな動きをせず楽をしようとするのが、CK一つに象徴的に表われているといえよう。

9・1 東大(1-0) 東邦チタニウム(東大G)

沢野 田原 中崎 森 木藤 辺野 武井	
吉天 柴笠 山山 池 佐遠 山(牧 官森)	
	5 G 1 1
	5 C 5 1 1
	2 5 F 1 1
	2 5 S 1 2

豪雨の為プールと化したグラウンドで試合は強行された。東邦チタニウムはかなり激しい当りと汚ないフアウルをくりかえし(警告四回)だが、東大は「雨の日のサッカー」のセオリー通りにすすめ、気力内容共に敵を上回り、後半十六分の宮武―柴田でもぎとつた得点に結びつけた。東大にとつてはリーグ戦の良い前哨戦であつた。

9・15 東大 3-0 (2-0) 青山学院大(姉ヶ崎運動公園G)

沢野 田原 中崎 森 木藤 辺野 武井	
吉天 柴笠 山山 池 佐遠 山(牧 官森)	
	7 G 1 3
	9 C 5
	2 1 F 1 0
	1 5 S 1 2

リーグ戦一週間前で、相手は今年二部復帰を果たした強豪といわれる青学。「春」の教訓からH Bのドリブル突破に最も気を使い、「たてを押さえて入替らない」ことを中盤での守りの原則とする。

試合は、前半相手のオフサイド・トラップの逆をついた形から森井が二点決め、スタミナ切れで押された後半二七分にも逆襲からまた森井が決め、四分六分以上ボールをキープされながら「効率のいいサッカー」をして快勝す。

↑リーグ戦

9・22 東大 1-2 (1-1) 拓大(東大G)

沢野 田原 中崎 森 木藤 井村 辺野 武	
吉天 柴笠 山山 池 佐遠 森植(山 官)	
	7 G 9
	8 C 4
	1 9 F 2 6
	1 6 S 1 1

初戦につきものの緊張感とOBの期待や下馬評の高さによる自信と拓大に対する苦手意識が交じりあつた感じで試合は始まる。九分、東大は佐々木のロングクロスで拓大G Kが出方を誤り、ラツキーボーイ森井が楽々と決め幸運な先取点を奪つたが、十八分、東大B区の小さいクリアーを拾つた水谷のミドルシュートが、B区の足に当つてG Kの逆をついてゴールインするという不運な失点で前半は1-1で終わる。東大には、「どうしても勝たねば」という

意識のみが強く、やや攻め焦りの感がみえてきた後半三四分、東大の選手交代で生じたわずかの流れの変化をとらえて、拓大は水谷のCKのこぼれ球からヘッドでつなぎ、最後は大地がヘッドで決め、決勝点をあげる。

敗因はやはり、自信と意誠過剰の為「東大のサッカー」をやらす実力不相応の事をやろうとしたことであろう。

9・29 東大 0-3 (0-2) 日大 (幡ヶ谷教大 G)

沢野	田原	中崎	藤井	崎	武村		
吉天	柴笠	小山	佐々	山	遠	森	(尾宮植)
						9 G	1 2
						5 C	5
						9 F	1 6
						2 8 S	1 3

優勝候補の日大に対して、立上りから積極的に攻め、三分には惜しいチャンスを逸し、逆に六分二五m付近のFKからほぼ直接決められ出鼻をくじられる。しかし、その後もよく攻め、一〇分五分と決定的チャンスを作るが、いずれもあと一步のところまで得点できず、終了間際、相手陣内の不用意なスローインから一気に速攻をかけられ、痛い二点目を失う。後半に入り二〇分ゴール前でゆさぶられたあと、ニアポストで決められたあと、柴田をトップにあげて一点でも返そうとしたが、時すでに遅かった。山中をチャンスメイカ酒井につける作戦でやつたが、日大が久保田と植木のシュートでやつてきたため、HB佐々木が余

り上がれず、結果的には六人がデイフェンシブになり、中盤がうすくなり、攻撃力も弱まるということになってしまった。確かに力量差はあつたがチャンスの数はそう大して違わず、結局は決定力の差ということであろう。

10・5 東大 2-0 (2-0) 一橋大 (浦和駒場 G)

沢野	田原	中崎	藤井	刃	村武		
吉天	(小野)	柴笠	山尾	佐々	山	植	宮
						7 G	7 8
						7 C	2 3
						7 F	1 6
						1 9 S	1 5

一橋も二連敗したあとのこの一戦、東大は前半から気合が入り、七・三で押し、一三分佐々木―天野―官武で一点、一六分にもCKから植村―官武で決め、早くも二点のリードを奪つた。しかし、その後たみかけるどころか逆に攻められ始め、後半は三・七で押される程であつた。デイフェンスの良さ・強さや相手の決定力不足に救われ、失点こそしなかつたが内容の悪さはほめられたものではなかつた。

10・12 東大 2-2 (1-2) 青山学院大 (東大 G)

沢野	田原	中崎	木崎	藤井	中	村武	
吉天	柴笠	山尾	佐々	山	遠	森	(田植宮)
						9 G	3
						1 0 C	6
						1 1 F	7
						1 2 S	1 5

グラウンド・コンディションは不良だったが、二点差をよ
くはねかえしこれまでの四戦中では最良の試合をやつた。
一分青学は遠藤一堀のヘッドをG Kがはじいたところを
上田がブツシュし一点、二五分にも上田がドリブルで中央を
割り、キーパーもかわして二点をリードしたが、三〇分頃
より東大ベースとなり、三分笠原のクロスボール植村
のヘッド森井のシュートがバーに当りはねかえるところ
を遠藤がブツシュし一点差で前半を終える。

後半に入つても東大は積極的に攻め、S W柴田が攻撃参
加した一五分前後は再三チャンスを作つたが、ついに四三
分、中央二五m付近、植村のFKからの混戦から柴田が蹴
り込み、同点とした。しかし、この試合に勝てなかつたた
め、上の入替戦の望みは殆ど断られた。

10・19 東大 1-4 (0-1) 国士館大 (大宮 G)

沢野	田原	中崎	木藤	崎井	野村	武	7	G	7
吉天	柴笠	山尾	佐々	速	山森	(牧植)	2	G	2
							4	F	2
							1	S	2
							2	S	2

国士とはこの時点で同勝ち点だつたため、結果的にはこの
ゲームに勝つた方が最後まで「上の入替」の可能性を残し
たことになつた。前半二〇分位までは東大ベースで進みオ
ーブンによく球が出ていたがクロスボールが小さいか、G

Kの守備範囲かでもう少し工夫があつたらと惜しまれた。
また、二度ばかりあつた決定的チャンスをとの時決められ
なかつたのは、試合を苦しくする大きな要因となつた。国
士は三四分G KからG Kの小さいパンチを拾つた高柳が角
度の狭い所からシュートし、カパーしていた東大B Kの体
にあたつてゴールインし、貴重なリードを奪つた。勢いづ
いた国士は、後半一四分にも鎌田のクロスボールをキーパ
ーが目測を誤つて出る所を大石がヘッドで押しこみ、二点
のリードを奪つた。東大は二七分交代出場の山崎が植村の
ドリブルシュートのはねかえりを正面から強烈に決め一点
を返したものの、以後全くリズムが好転せず、(シュート
ゼロ)逆に三三分と三九分に、ゴール前をゆさぶられて追
加点をあげられ、国士に完敗す。ゲーム後完全な動き負け、
走り込み不足が指摘され、また、チームとしての連帯感が
なく個々バラバラである、ミスの方に良いことをしようとし
ない、「東大のサッカー」を忘れてゐる等の鋭い反省。
批判が出された。

10・26 東大 0-0 (0-0) 順天堂大 (東大 G)

沢野	田原	中崎	野田	崎木	藤村	武	1	G	6
吉天	柴笠	山山	(小野)	尾々	佐々	速植)	4	G	4
							1	F	10
							1	S	12
							1	S	10

国士戦の反戦から「ウチの試合をやるう」という決意を全員がもち布陣もツートップに改めて背水の陣をしき、「守りを固めてじっくり攻める」という作戦でのぞむ。

結果は無失点に押さえられたが無得点に終わつたということと内容としてはまあ良かったが、「良い試合をやつても勝たなければだめ」なのである。また攻撃力ということを考えるとうしてもツートップだと駒不足の感は免れ得ないだろう。

11・3 東大4-3 (2-1-2) 成城大〔東大G〕

沢野	田原	中崎	木藤	崎	武村	藤	辺				
吉天	柴笠	山尾	佐々	遠	(山)	宮植	(加)	山			
10	G	9									
2	C	9									
16	F	16									
14	S	16									

最終戦。全敗の成城に対しひどいゲームをやつた。勝つには勝つたが、良い試合をひとつやつたあとすぐこういう試合をやるのが、最近の悪いくせらしい。試合は前半三分、佐々木のロングシュートと一六分山辺のシュートで順当に得点を重ね「楽勝」を思わせたが以後気がゆるみ二八分東大Fの不用意なパスを庄野に拾われ、ドリブルシュートで一点差、三八分にはPKでついに同点に追いつかれた。後半に入つてすぐ九分Cからのはねかえりを佐々木が強引なミドルシュートを直接決め、二九分には宮武―山

辺で二点差とし安全圏かと思われたが、四二分混戦からまた庄野に決められ、対成城最多失点三を記録する。

この試合に引き分けると一橋と順位が入替り七位になるというのに二点差がつくと安心して「守備は単純に、攻撃は複雑に」というセオリーを忘れてしまつたらしい。試合後、記念写真をとる、卒業組は来週の「学生最後の公式戦」に是非いい試合をやるうといひあう。

△天皇杯関東二次予選▽

11・10 東大0-1 (0-1-1) 早大〔東伏見G〕

沢野	田原	中崎	中	木崎	藤	川	村	武			
吉天	柴笠	山山	(田)	佐々	尾	遠	(荒)	植	宮		
6	G	1	2								
7	C	1									
14	F	1	2								
2	S	2									

一部リーグ三位とはいえ学生版1の呼び声高い早大を向うに回し、東大は一生懸命戦つたが意外にアツ気なく敗れ去つた。唯一の失点は前半三四分、内藤のOKをキーパーさわれず亀田に後ろへ落とされ正面から川本に強烈に決められたもの。これ以外は、圧倒的に攻められはしたが、よく守り、ボールをアウト・オブプレーにして相手の攻撃を切ることに成功していたのだが、なにはともあれ攻撃ができず、ボールがトップまで渡る回数が少なく、シュート数二に象徴されるように敗れても仕方のないゲームであつた。

〔今年度の総括・反省〕

昭和四九年度のチームをふりかえつてみるに、今年は「しりすぼみ」に終わつた、という感じがまずする。春の対抗戦の快進、京大戦勝利、七大戰優勝、天皇杯二次予選進出に比して、本番のリーグ戦は、なぜか負けが込み、二勝二分三敗で六位という去年より悪い成績に終わつてしまつた。

なぜこんな結果になつてしまつたのか、というと考えられる理由・原因はいくつかある。

第一に、本文中でも再三指摘してあつたが、「体力不足」特に「スタミナ不足」である。このことは、すでに夏の時点でもわかつていたことであり、「走り込み」が必要な事は皆知つていたはずだろうが、リーグ戦中は「疲れが残るから」という理由でダッシュを余りやらず、またやらないことに誰も文句を言わず、リーグ戦後半における試合半ばすぎの「息切れ」の原因となつた。(個人面)

第二に、チームメンバー間の「コミュニケーションの不足」である。お互いどういふサッカーをめざしているのか、漠然とは持ちながら徹底的に話し合つたりすることがなかつたと思ふ。これでは良いコンビは生まれないうし、息の合つたプレーもできない。(グループ面)

第三に「一・二軍間の意識の分裂」である。練習の効率をあげるためには、どうしても全部員を二つに分けなければな

らないが、「その時点のベストメンバーを使う」方針上、必然的にメンバーの固定化が生じる。これは致仕方のないことであるが、問題は相互の間で通じあえるものがなかつたこと、通じあおうともしなかつたことであり、また、一軍にいなながら試合に出られない連中の位置が不安定で中ぶらりんなことである。これらは、相互の努力で解消できるものと信じる。

(チーム面)

第四に、指導体制の問題がある。浅見さんひとりに、あるいは柴田ひとりに任せつ切りという意識はなかつただろうか。特に私を含めた四年生の大部分の人に猛省を促すと共に後輩諸君には以後の良き教訓としてほしい。

第五に、これらはみなつまるところ個人・個人の主体性・自主性の問題になるのではないかと思う。一人ひとりが自らの弱点をつかみ、それを改善しようと思ひ、向上心を持つて考へて練習をすれば強いチームが必ずできると思う。浅見さんもおつしやるように、「努力した人間が上から順に試合に出られれば、こんな強いチームはない。」のである。

今年のチーム自体の問題点について言えば①キープ力のないハーフ陣、②単純さを忘れたバックライン、③決定力不足のフォワード、に加えて、チームの最終的要となるべきⅡⅢの精神面での不安定感(これはチーム全体にもいえることだが・・・)、とそろえば、「実力相応」の結果が出たのも当

然のことだつたといえよう。

無論その背景には右に記した様な問題が根本的にはあつた
と思うが・・・。

来年のチームは、「今年の轍」を踏まない様にしてもらいたい。それには、実戦を数多く積む（「試合は教師」とともに、練習への取り組み方もつと自主的・能動的にし、「考える練習」態度を養い、またより高い相互理解をめざしてどんどん思つていることを討論させ「自己のサッカー」をぶつけあわせることが必要である。そして、特にレギュラートラスが率先して努力し、雑用をも厭わずやれば、一・二軍間の意識分裂も起こらず、きつと素晴らしいチームができるであらう。

サッカーは一人でやるチームゲームであり良いチームプレーは良いチームワークからしか生まれえないのであるが、良いチームワークは一人のみで作らるものではなく、全部員相互間の理解と信頼感によつてのみ形成されるものと思ふ。

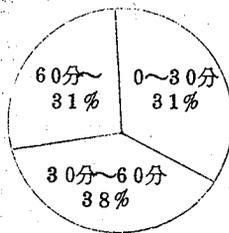
（文責・遠藤）

部員意識調査

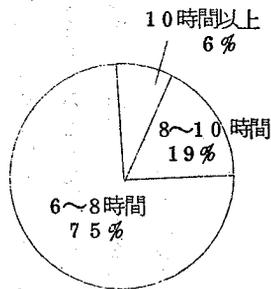
「アンケートにみるサッカー部員」

今回のこのアンケート調査は、創刊号においてなされた「部員の生活と意識に関する調査」を受けて、現在のサッカー部員がどんな生活をし、サッカーにどう取り組もうとしているかを明らかにする目的でなされたものである。この企画の動機の一つには、創刊号当時とどのように部員の生活や意識に違いがあるか比較してみようということがあるが、同一の質問項目をかなり取り入れたので、比較して読まれるとおもしろいと思ふ。しかしもちろん、この調査の目的はただ単に今昔の比較などにあるのではなく、現状打開のための問題点を浮き彫りにせんがためである。このような形での調査がどれほど部員の真の姿を明らかにできるか疑問なしとしないが、とにかく、部員間の活発な議論の手掛りとしてまたOB諸氏に現役について知つて頂く一助として役に立てば幸いである。

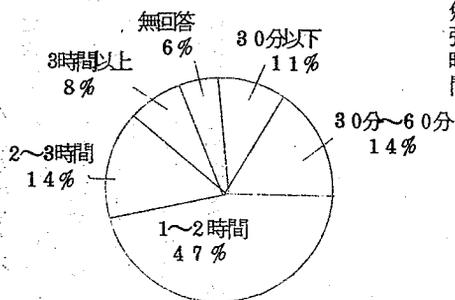
1. 生活調査
通学時間 (片道)



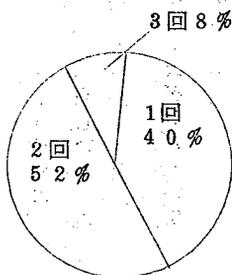
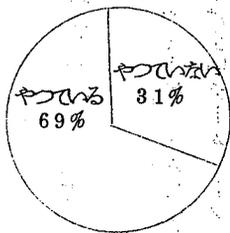
2. 睡眠時間



4. 勉強時間

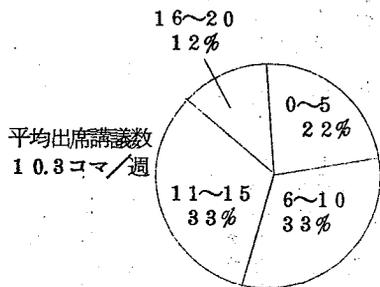


3. アルバイト



(回数 1週間)

5. 講義出席時間 (一週間)



平均出席講義数
10.3コマ/週

平均講義出席率 66.4%

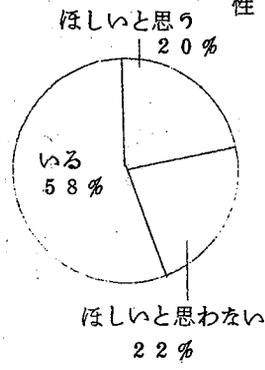
$\left(\frac{\text{実際出席講義数}}{\text{登録した講義数}} \times 100\% \right)$

6. 今ほしもの

- ① ヒマ 三一%
- ② 金 三三%
- ③ 友人 〇
- ④ 恋人 八%
- ⑤ その他 二五%
- ⑥ 無回答 三%

（スピード、テクニク、オ
ンナ感じる力、自由、翼、オ
etc）

7. 異性

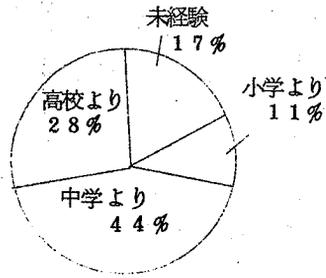


8. ヒマなとき何をしているか

- ① テレビ、ラジオ、読書、音楽鑑賞
- ② 麻雀、パチンコ、酒、おしゃべり、etc 六七%
- ③ ポケツとしている、もの思いにふける。 一七%
- ④ 何もしていない ヒマなし 八%
- ⑤ 寝ている 五%
- ⑥ サツカーをやる 三%

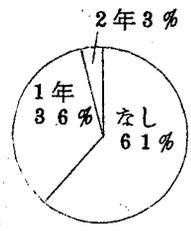
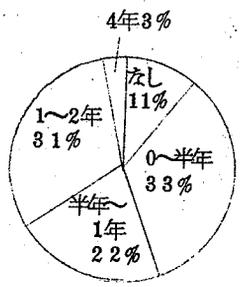
II 部員意識調査

1. サツカー経験



※但し、未経験といつても、学校のクラブでの経験がないものをさす。ひとりてボールをけつたり、仲間やつていたもの。その他はクラブでの経験者。

2. 入部までのブランク



※なしと答えた人はクラブでの経験のない人。

〔浪人年数〕
(参考)

3. 入部のきつかけ

- ① 最初から入部しようと思つていた。 五五%
- ② 何となく。 一七%
- ③ 練習をみて。 一一%
- ④ 先輩（高校の）に誘われて。 八%
- ⑤ 友人に誘われて。 六%
- ⑥ その他（良い指導者がいると聞いて、ヒマをもてあまして、シライをみて） 八%
- 無回答 三%

※重複回答なので総計は一〇〇%をこえる。以下一〇〇%をこえるところはすべて同じ。

4. 入部動機

- ① サッカーをやりたい。 九二%
- ② 部生活をやりたい。 一四%
- ③ 何となく。 八%
- ④ 体力養成のため。 五%
- ⑤ スポーツをやりたい。 三%

※重複回答なので②をあげる人でもほとんどの人が①を動機としている。創刊号の頃と比べると興味深い。

5. 入部しての感想

- ① 予想外に寮囲気が明るく、自由で 三九%
- またレベルの高いのに驚いた。 二二%
- ② 期待通り充実している。 二二%

⑧ 自分に対してもつときびしくなる必要。

- ③ (自己のプレーやその他の甘さに失望) 一七%
 - ④ 勝負第一で少し息苦しい。 一一%
 - ⑤ 寮囲気はいいが少し物足りない。 一一%
 - ⑥ その他（グラウンドや設備が悪く先輩との交流が少く、etc） 一七%
- ※総じて部の寮囲気に関しては、予想外に明るいと感じている。しかし、レベルの高さに驚くものが多かつたのは意外な結果である。

6. 入部前の東大サッカー部についての知識

- ① よく知つていた。 六%
- ② 少し知つていた。 五五%
- ③ 全く知らなかつた。 三九%

7. 部の伝統・歴史について

- ① ただすばらしいと思う。 二五%
- ② 現在の参考にし学ぶべきところがある。 四四%
- ③ 関係ない。 三一%

※関係ないと答えた人が意外と少ない。半数近くの人が積極的に生かそうとしているが、逆にそれだけ、この伝統・歴史が昔のこととして一歩おいて考えられているといえなくもない。

8. 現在二部に居るが

- ① 実力相応 三〇%

- ② 頑張れば一部へ昇格できる。 三〇%
- ③ 現在でも苦しい。やつと維持。 二八%
- ④ その他 (リレー戦は実力だけでまわらない。優勝は充分可能。 etc) 一二%

※現状評価についてはまさに三つに分裂しているが、これは、はつきり三つに分れているというより、皆の気持ちの中で、この三つが同居しているとみていいだろう。頑張ればといつてもその内容の相当厳しく、まわりの状況がそう甘くないという認識は共通のものであろうし、また、一方、二部が限度とみるものでも皆主観的には一部をめざしている気持は同じく強い。

9. 現在の週五日制一日二、五時間の練習

〔量的にみて〕

- ① これですよ。 八九%
- ② 不満。 一一%

多すぎるのか、少なすぎるのか？

※不満の内容は、緊張が続かない、駒場から本郷へ通るのが時間の無駄である、などで、一方、週休一日でよいという意見もあつた。また全員が毎日そろわないうちにも、いう不満があり、これでよいとする意見のうちにも、五日すべて練習するという条件で賛成するものが多い。(特に)練習を休んだものが休んだ分を自分で補おうと努力することは、当然なのだが、そうでないところ

に問題がある。
〔質的にみて〕

- ① これですよ。 一九%
- ② 不満 八一%

※質的向上のためにはやはり集中して考えながら密度の高い練習をするなどの練習への取り組み方をあげるものが一番多かつた。鬼コーチ的存在の必要を唱える意見もあつた。また、基礎的練習の徹底、個人技術の強化体力増強という意見も根強い。その他処方箋を与える、イメージが貧困だからいい試合をみる、グラウンドをよくするなどの意見があり、また向上心のないものは切り捨てるという強硬なものもあつた。

10. 強化策として週六日制をとるとしたら

- ① 必要なし。 六一%
- ② 必要だが無理。 三六%
- ③ 必要で可能 三%
- ④ 必要なし。 一一%
- ⑤ 必要だが無理。 一四%
- ⑥ 必要で可能 五八%
- ⑦ 無回答 六%

※練習日数をふやすことは実際上も無理だろうが、合宿

の強化となると、賛成が六割近くあるのだから、ふやすことを真剣に考えていいのではないか。

尚、近年は、合宿が減つてきたようで、参考までに昨年の合宿、練習の時間、日数をあげると、

合宿・・・春一回、夏二回

いずれも検見川で七、八日間、また夏の山中合宿

(四、五日)は、昨年は中止された。

練習・・・月、金を除く週五日

平日・・・3:30 / 5:30 or 6:00

土、日・・・2:00 / 5:00

冬(十二月、二月)は月、水、金を除く週四日

11. 現在のOBとの交流について

- ① もつと幅広く、親密な交流の努力を。・・・五〇%
- ② 現状でほぼ満足すべき状態にある。・・・一七%
- ③ 金は出しても口はあまり出さないでほしい。・・・一四%
- ④ あまり交流なし、仕方ない。・・・五%
- ⑤ 個人的に交流すればよい。・・・五%
- ⑥ その他。・・・五%
- ⑦ 無回答、わからない。・・・一四%

※やはり、もつと練習や試合に来て、一緒にやるなり話しあつたり、相談相手になつてほしいという声が表示は違つても圧倒的であり、OB諸氏特に若いOBにはそのこ

とを強くお願いしたいと思ひます。また一方、現役の方にも来てくれたOB諸氏に、積極的に話しかけるなどの努力が足りないという意見もあつた。その他会員制にして現役を援助する意志のないOBは切りするべきだといふ意見もあつた。

12. 自己の中に占めるサッカー部の位置

- ① 完全に生活の中心を占める。・・・五〇%
- ② 生活の中でかなり大きな割合を占めつつある。・・・二二%
- ③ 生活の中心だが、その状態に不満足。
(もつと勉強や多めに時間をかけた。)・・・一四%
- ④ 卒業しても練習に出たり応援する。・・・一四%
- ⑤ 若干束縛と感ずる。・・・三%
- ⑥ 無回答。・・・三%

※①と②の意識の断層は学年によるところが大きい。

13. 入部して自分自身何が変つたか

- ① 特別に変化なし。・・・一七%
- ② 何らかの変化があつた。・・・七五%
- ③ 無回答、わからない。・・・八%

※変化の内容は、五割のものが、自分の甘さや利己的などころを認識し、自己をみつめるようになったとか、バイタリティー忍耐力がつき、つき合いや調和に気をつける

14.

部員間の交流について

よりになつたとかあるいは、体力がついた、サッカーがうまくなつたなど何らかの形でプラスに評価している。一方残りの二割余りのものは、人が悪くなつた、下品になつた、墮落した、幼稚になつたあるいは身体がガタガタになつたなどマイナスに評価している。

① 同じ学年同士はよいが、縦の関係は薄く、表面的。

.....三一%

② サッカー以外での交流が乏しい。

.....一七%

③ 現状でよい。

.....一四%

④ 今のままでよいが、練習のときはも

.....八%

つときびしく。

⑤ 試合の反省など、じっくり話し合

.....八%

たい。

⑥ その他

.....二二%

※全般的に上下関係がきびしくなく、交流があると評価するものが多いが、反面不満も根強く特に上級生と下級生とのサッカー以外も含めた交流を望む者が多い。具体案としてはコンパ等をふやせ、全寮にするなどの意見があつたが上級生にもつとおこつてほしいというものと、そういう形でなく交流を望むものがあり、相反した。

15. 今年（S49）の指導方法に対する不満

① 特になし。

.....二二%

② 自らの力を過信、練習量が足りなかつた。

.....二〇%

③ 一軍、二軍の交流が少なかつた、二軍の練習をもつと充実してほしい。

.....二〇%

④ 選手（とくにレギュラー）にきびしさが足りなかつた。

.....一一%

⑤ スタッフが足りない、コーチがほしい。

.....八%

⑥ その他

.....三三%

※②の練習量の不足では夏合宿が軽く、それ以来体力的に下降線をたどつたのではというものが多かつた。また、四年生に対し、まとまりのなさ、や自主性がうすく監督に頼り過ぎという指摘があつた。その他正規の練習以外の自主的な練習がなかつた、もつと試合に出たい、メンバーが春から固定されていた感があるなどの意見があつた。

16. 指導者になつたとして強化策を考えると、

① 基礎体力、基礎技術を徹底的にやる。

.....二〇%

② コーチをおく。

.....一七%

③ 基礎体力+基礎技術プラスアタマ

.....一四%

④ 少数精鋭でよく。

.....八%

⑤ メンバーを固定せずレギュラー競争を激しくやる。 八%

⑥ 個性的プレイヤーを育てる。 八%

⑦ その他 (試合をややスピードをあげる) 二二%
限界に挑戦する etc

⑧ 特になし。 一四%

※それぞれニュアンスはかなり違っているようにみえるが、強調するポイントが違うだけで、だいたい同じように考えているといつていいだろう。しかし、④の少数精鋭主義は創刊号での同じ問いに最も多数意見であつたのに比べると、このようなやり方ははや適当でないと考えられているようである。

17. 現在の部生活に対する矛盾、不満。

① 特になし。 三〇%

② クラブとしての一体感がない。 一四%

③ 部室等をもつと清潔に。グラウンドをよく。 一一%

④ もつと自分自身にきびしく。 八%

⑤ サッカーバカ、サッカーキチガイが少い。 六%

⑥ 授業で練習に出られないのが残念。 六%

⑦ (文系の専門科目に出たい。) 六%

⑧ その他 (思いやりに欠ける サッカー以外の交流がな) 二五%
etc

※②の不满は、全力投球しているものと、そうでないものが出て、しかもそれがなれ合つていて、クラブとして一つにまとまつて戦う雰囲気のないことを指摘している。昨年(S49)の反省として、耳を傾ける必要があると思ふ。③や④は、工夫によつて解決可能なものであろう。全般的にやはり、一、二年生と、三、四年生では問題意識に差があり、上級生になるほどクラブ全体を考えたい発言が目立つようだ。

18. 現在感じていることを何でも。

この質問には多様な回答があり、また無回答も多かつたので、集計からは除外しますが、次のような意見があつたので参考にして下さい

「このままいけば再び今年の一軍の残りでメンバーが決まるだろう。一人の名前はほぼ決まつていといつてもいい。そこで . . . 中略 . . . 試合に出たいなら、あるいはチームを強くしたいのなら、自分のいいところをみがけということを言いたい。おれは . . . 中略 . . . もう一度やり直せるのなら、 . . . ボールを持つても一一秒台で走れるようにしたい。そうすれば必ずや出場できよう 東大のサッカー部は一技にすぐれていれば絶対やれる。」

とにかく誰にも負けたいものを身につけるといふことに努力してほしい。」もう一人、皆の耳に痛い意見を紹介すると、「東大サッカー部の今後に関してだが、現在のようなムードが続く限り、遠からず東大は関東リーグを去る日を迎えるであろう。部員の技術、経験の不足もさることながら、東大サッカー部員のサッカーへの打ち込み方は、関東リーグ、都県リーグを含めても最低の部に属するであろう。……中略……サッカーへの取組み方は同好会と変わることがない。決められた練習（週五日、一回二時間）しかやらずに、「試合に出たい」と口ぐせのようにこぼし、「試合に出られぬくらいなら部をやめる」等と言う。……中略……部員が（とりわけ試合に出ない人たちが）真剣にサッカーに取組みぬ限り、下位低迷は必至であろう。」

総括：前半の生活調査は、部員の平均的生活を知ろうとして企画されたが、ここから想像される部員の平均的な一日をやや乱暴に、描くと次のようになるだろう。睡眠を七〜八時間とり、通学に往復二時間ほどかかり、講義には平均二コマ出て、練習（約三時間）をし、勉強を一〜二時間する。そして、週に一回バイトをする。かなり忙しいという感があり、それだけに工夫して時間を使わないと、ヒマがない、何もできないという不満につながるだろう。

後半の意識調査では、まず、経験者であるが、サッカー経験について八割以上が経験者、しかもクラブで練習してきたものであることには驚く。創刊号当時と比べてむしろ経験者はふえているといつてよい。しかもブランドの長さが一年以内のものが過半数に及ぶのでかなり有利な条件のようにみえる。しかし、入部してレベルの高さに驚くものが意外と多く、また、国体、インターハイ、あるいは関東大会程度のものへの出場者が皆無に近いことを考えると、大部分経験者ではあるが、そのレベルは、決して高くないといえるだろう。だいたい県大会で多少の成績をあげたチームの選手ということになるだろうか。そのため、弱小校で部員だった者よりも、修道高等、サッカーの強い高校で同好会に入っていたような者の方がプレーヤーとしての能力が高い、ということが多く、前者が二軍で、後者が一軍入りというケースが珍しくない。社の、低いレベルで均質化されていることは、有利とはいえないが、決して不利な条件でなく、練習次第ではすばらしい選手になる可能性があるといえなくもない。

入部動機に関しては、創刊号においてははつきり二分されていたのに比較して、サッカーをやりたいということと一致している。また二部低迷については、ここ数年一部との入替戦をしていないことや、二部の他のチームで

も実力的に東大を上回るものがかなりあるといわれているので、現在でも苦しいという意見が約三割もあるのだらう。しかし、だからといって、二部でよいと思うものは、皆に聞いて回つたわけではないが、居ないだらう。部員は主観的にはやはり皆二部優勝、一部昇格を強く願っている。ではどうすればよいか。

練習体制については、日数、時間とも實際上現状が限度であるが、合宿は創刊号当時は年六回（全て七日間）もやつていたのに比べて、現在は半分に減っている。連休などを利用してつと頻繁に合宿することは可能だらう。

また練習内容については、その取り組み方に問題ありとする意見が多い。集中していない、考えていない、無駄が多い、情性的だ等々部員の自覚にかかわる古くて新しい課題の指摘である。このような指摘が多いということは、この問題が、わかつていても直しにくい性質のものであることを意味している。それで、その解決策として、自覚し、自己にきびしくなると同時にスタッフやコーチを増やして、その手助けをしてもらいたいという意見が出てくるのであらう。

創刊号では、強化策として、合宿寮制、小数精鋭主義があげられているが、現在このアンケートでみる限りは、

そのようなやり方は、浮んでこない。素質のあるものを残し、落されたものは愛好クラブでも作ればよいというような考え方は少なく、たとえ、下手であまり素質のないものでも、意欲があつて練習に出てくるならば、そのようなものを切り捨てるべきだなどと考える者は、いないといつてもいいだらう。

そうなると、昨年でも四〇数名いる部員をいかにレベルアップし、強いチームにしてゆくかが、問題となる。現実には、夏以降一軍、二軍に分けて練習しているが、一軍のものきびしさの欠如、メンバーが固定的で交流の少ないこと、二軍の指導者の不足等々問題は数多く横たわっている。

それらの問題は、このアンケートでも多かれ少なかれ、浮かびあがつている。それらを一つ一つ解決していくことが必要なのだが、それと同時に、部員ひとりひとりが、自分のサッカーに対する姿勢、練習への取組み方をきびしく反省し、見つめ直すことが今問われている最大の課題なのではなからうか。東大サッカー部は今一つの転換期にさしかかっている。そのことを、このアンケートは、よきにつけ、悪しきにつけ、語っているようである。

調査 尾崎、兵頭、吉沢

(文責 吉沢)

1974. 12. 4 配布 対象 … 部員全員
回収率 … 85.7 %

(A)



(A) 昭和48年11月11日 西ヶ丘競技場。天皇杯二次予選法大対東大。左より尾崎，天野，植村，吉沢，高見（法大），内田，山中。

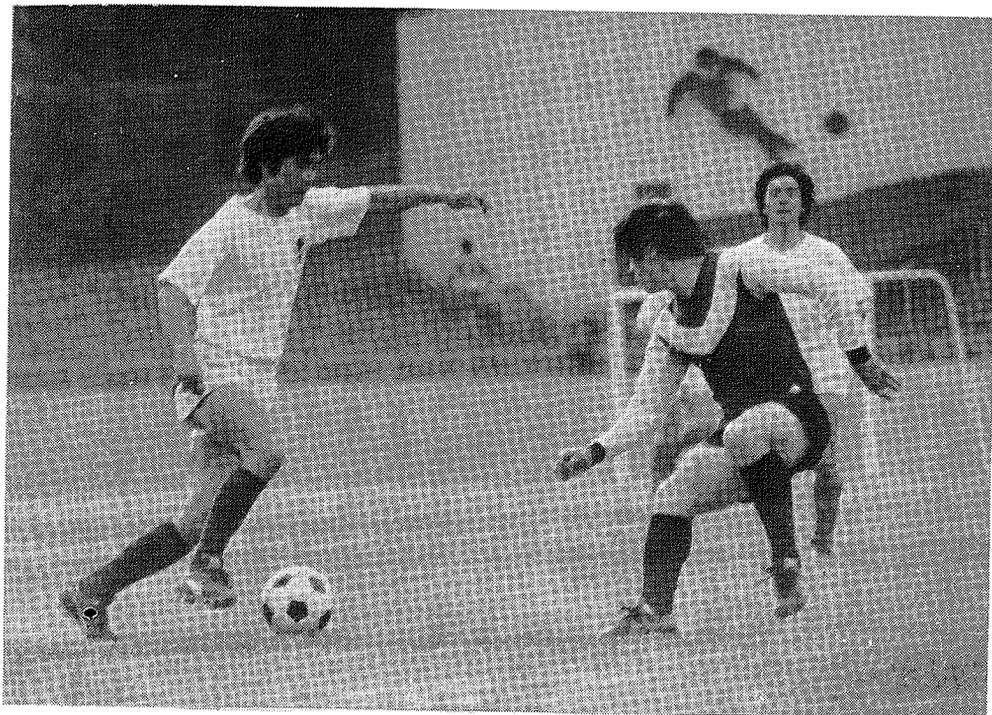
(B)



(C)



(D)



(B) 昭和48年, 9月15日 笠松運動公園にて。天皇杯一次予選, 日立水戸勝田対東大。左より2人おいて笠原, 宮武, 2人おいて田中。

(C) 後列左より谷本, 牧野, 小野田, 尾崎, 山中, 青山, 天野, 笠原, 佐々木, 磨井, 田中, 荒川, 吉沢, 南谷, 森井, 堀井, 大高。前列左より, 西山, 加藤, 植村, 宮武, 柴田, 山崎, 山辺, 遠藤。(49年11月3日リーグ戦終了後)

(D) 昭和49年5月6日 大宮サッカー場にて。春季対抗戦決勝トーナメント一回戦東大対明大。左より植村, 一人おいて山辺。 (撮影者 中根雅子)

VI 現役部員から

// サッカー部生活を終えるにあつて //

四年 佐々木 順 孝

昭和四五年三月末に、検見川合宿の最終日の紅白戦に出して
もらつてからはや五年が過ぎようとしています。この五年間は、
伝統ある東大ア式蹴球部の歴史の中でも、極めて成績不振な時
期であつたと思われれます。その原因については、現役、OB一
体となつて検討を加え、二度とこのような不振の時期を、経験
することなきよう努めることが必要だと思ひます。この努力を
重ねることが、東大ア式蹴球部員のなすべきことであり、OB
のなすべきことであると思ひます。そしてまた、私が五年間の
部生活で得たものは、現在の不振を二度と経験しないよう努力
すること、そして現実に上昇することは、後輩諸君にとつて非
常につらい課題であるけれども、やりがいのある、そして達成
可能なものだと言ひます。そして、それには今度OBとな
る小生も含めたOBの援助も必要であるといふことです。決し
て卒業して行くものの放言ではなくて、五年間で得た自信と、
悔恨の情とから言ひましたものです。

大上段に構えてしまいましたが、五年間を振り返つて思ひ出
すのは、三年生の夏練習試合とは言え早稲田に勝つたゲーム、
三部との入替戦での逆転勝ち、天皇杯で法政と延長の末PK合

戦で敗れたこと、そしてリーグ戦で挙げた七つのゴールのそれ
ぞれ等々です。リーグ戦の雰囲気の中で、得点した時はほんと
りになんとも言えず、今でもすべての得点の光景が頭に残つて
います。卒業間近な現在、あの感激を二度と味わうことができ
ないと思つと、なんとも言えず淋しい気持です。と同時に、下
手くそだつた私が、あの感激、様々なすばらしい経験を得るま
でに御指導して下さつた諸先輩や、それをサポートしてくれた
部員の皆さんに感謝の気持ちでいつばいです。後輩の諸君が、
もつと晴れがましい舞台ですばらしい体験を得ることができ
るよう努力することを期待すると共に、私もOB一年生となつ
てそれをバックアップすることを誓つて筆を置きます。

// 背番号 2 //

四年 天 野 裕

あゝあ。今、ぼくは溜め息をついています。なぜつて、大学
でのサッカー生活に別れを告げようとしているんです。ぼくは、
卒業目前なんです。人間てやつは執着していた何かが終わるう
とする時や終わつた時、淋しさとも満足ともつかぬ溜め息を洩
らすそりです。

今、ぼくは思つています。何かに執着しているつていいなあ

つて。その中のとつても大きな一つが、ぼくの場合、サッカーだつたんです。サッカーをやつてきて、何か貴重なものが心の中に蓄積したような気もしているんです。ちよつぱり感傷的になつているんで、そんな錯覚を試みたいのかもしれない。誰かが言つていました。人間てやつは何か一つ経験すると利口になつたような気がするけれど、それほどできるいい生物じゃないつて。まづたくその通りです。ぼくも御多分にもれず、少し利口になつてもすぐ元の木阿弥なんです。でも、そんな人間だからこそ、自分が何かを学びとつたような気がしたら（これも錯覚かも？）、自分に言い聞かせるためにも（もう、元の木阿弥は御免ですから）、みんなに向かつて何か言いたいんです。ぼくは、高校、大学を通じて右のフルバックで背番号は2でした。ぼくはいろんな意味でこの2という数字に縁が深くていつのまにか2はぼくのお気に入りの数字となりました。男だつたら誰だつて、勝負には勝つて一番になりたいと思つるのは当然です。ぼくだつて、一番になりたいと願つて一人ですから。でも一番になつてしまつたら、後は追われるばかりです。相手よりまさつていゝなら、勝つのが当然で勝たねばなりません。一番を維持しようと思つること、勝たねばならないと思つることとは、ライバルと戦つると同時に自分自身を強力なライバルとしかねないわけです。その点、二番というのは精神的に圧迫するものがなくて気が楽です。今までは二番の地位に甘じていたけ

れども、今度こそ！とか、力は相手が少々上だけれども、思いきつてやつてみよう！という心意気は、実力以上の大きな力を引き出すことがよくあるんです。

精神的圧迫を克服して勝利する者こそ眞の勝利者かもしれない。しかし、これはきれいごとでしかないような気がしてなりません。自分自身とわざわざ戦うのは、非能率であつて、戦いを避けることも自分自身を克服する有効な手段のような気がします。相手に一步譲ることによつて精神的、肉体的にリラックスすることこそ、勝利への近道のような気がします。

一番に負けたり屈辱的な二番はぼくの望むものではありません。一番の地位を虎視眈眈とねらう二番の姿勢、心構えが、ぼくは好きなんです。

今、ぼくは背番号2のユニホームを脱ぎつつ、この背番号2にぼくの斗魂を託していきます。諸君！背番号2を背に戦つてくれ！

さらば、背番号2よ！

四年 荒川吉彦

「東大へ行つてサッカーをやるう。」というのが僕の高校時

代の希望であり目標であった。夕暮れ時に家路を急ぎながら、ふど西の空を見上げると星が二つ三つまたたいている。そのうちの手頃なのを眺めては、「おお、あれが東大の星か。チクシヨーム、俺だつてそのうちあの星を、手でつかむのだ。今に見ている、俺は東大に入つてサッカーをやるのだ。」てなことを思つたものだつた。(もつとも、そのあと石ころにつまずく位がおちだつたが。今にして見れば純情な少年ではあつた。

そしてどういふわけかすんなりと合格してしまつて、更に又すんなりとサッカー部に入部することとなつた。見事に希望がかなつたわけである。これからバラ色の生活が開けるはずであつた。ところが、現実はそのうまく運ばなかつた。何のことはない、授業にしたつて、英語に加えてドイツ語なんぞというものが現われた位で、高校に毛のはえた程度に思えたり、サッカーにしても、石ころだけのひどいグラウンドで、高校の時と変わりばえのしない、いやもつと野暮つたいような練習をしているように見えた。そんなわけでガツクリしてしまつて、授業にも練習にも身の入らない状態がいくらか続いたわけである。

思えば、これは、「東大へ行つてサッカーをやる。」はよかつたが、そのあとのことは何ら考えずにいたこと、つまり、当初の希望がかなつてふわふわした気分のまま、次の段階については何ら具体策を講じなかつたことにもよるし、また、夢見がちな自分勝手な考えをめぐらす性格、更に、環境の変化とい

うか事態の変化といふか、そういうものへの対応が元来無器用な性格であることなどが災いしたと言えるのではなかつたか。(まあよくある話だと言えばそれまでだが。)

そんな時期もあつたわけだが、不思議と、サッカー部をやめるといふことは本気になつて考えたことはなかつた。自分で言ひのなんだが、熱しやすくさめやすい反面、変な事に対して、良く言えば粘り強い、悪く言えば執念深いといふか、ともかくそういう反面を持つていたのである。(矛盾に満ちた性格であることよ。)その後は再び、「俺はもつとやれるのだ。」といひ、今日の自分に妥協せず明日に向かり、いわば強い気持ちと、「ああやつぱりダメか。俺はこんなもんさ。」とくじける弱い気持ちとの葛藤みたいなものが続いていたのである。

そしていつしか四年間が過ぎてしまつたのである。(途中の次第ははしよつた。)しかしここで問題が起こつた。サッカーの面は、今述べたように、いわばジタバタしながらも続いたわけだが、学生の本分ともいふべき(?)学問の方は、その間さつぱりお留守だつたのである。そこで現在は重点を変えて、そちらの面の強化を図ろうとしているわけである。が、ここでもジタバタが続くような気配である。まあ、このジタバタといふものは、僕にずっと付きまといつて離れないものではないか、なにと勝手に考へている。ともかくも、希望の星は、やはりいつもかなたにあるわけだ。しかし、僕の心の中には、また例の、

「○○へ行つて○○をやる。」という望みが起こりつつあるのだ。(留年の身ゆえ大きな事は言えないこのつらさよ。)またぞろ「チクショーめ、俺はあの星をこの手でつかむのだ。今に見ているよ。」なのである。そしてまた石ころにつまずくのがおちなのだが。

(この歯切れの悪い拙文も、一人のヒヨツ子が一つの転機を向かえた時の産物と思つて御宥恕のほどを。)

四年 磨 井 祥 夫

四年間もサッカーをやつていれば、サッカーに対する考え方が変わつてくるだろう。重要なことは、その変化が常に一歩一歩の前進であることだと思ふ。

サッカーが終つてからは、サッカーで得たものを日常生活でも実践するべきである。サッカーで得たものがサッカーだけにしか通用しないのであるとしたらおもしろくない。

サッカーと私

四年 遠 藤 謙

第一章 東大サッカー部に入るまで

私がサッカーを始めたのは、中学一年の時だつた。兄がサッカー部に入つていて「お前もやるのだろう。」と当然の事のよりに言つたので、何ということもなく入つたのが病みつききの始まりであつた。中学の時は、同じ東原中出身の上妻さん(昭和四十八年卒、当時高校生)が、コーチに来てくれて、私たちはいろいろ教えてもらつたり、ゲームをやつたりした。その中で、私は、サッカーとはどういふものかを何となく体で感じ、またサッカーの楽しさを知つていつたように思う。

高校に入り、即座にサッカー部に入つた私は、もう一度基礎からやり直そうと決心し、サイドキック、トラップなどの基本的技術を毎日のように練習した。また、壁に向つてボールを蹴ることも非常に効果があつた。高校では、これといつた成績を上げることができなかつたが、我々の代の最後の試合、対中大付属戦だけは忘れられない。この試合、私がまぐれ当たりで二点を決め引分けたのだが、一番嬉しかつたのはこの得点のことではない。それは、十一人が一丸となつて戦つたといふことであり、チームの「勝つ」といふ意志がひしひしと感じられたといふことである。その意志が二点を生んだといつても過言ではないだろう。この時私は、サッカーといふチーム・ゲームの素晴らしさを身にしみて感じ、また本当にサッカーをやつていて良かった、と思つたのである。

第二章 東大サッカー部に入つて

東大に入学してもやはりサッカーの魅力から離れることができず、また上妻さんも「待つていて」下さつたのでサッカー部でやることにした。一年の時は、「一応の事はできるからあとは体を作れ。」というふうなことを言われ、特に弱かつた上半身を鍛える為、ベンチプレスを毎日のようにやつたり、二学期の体育実技にトレーニングをとつてみたりした。

二年になり四年生が上妻さん一人という苦しい状況のもとで一応レギュラーとなつたが、この年は自分でも不思議な位、つまらない事で怪我をし、(都合三回)体力―特に循環器系の衰えて苦しい思いをし、また京大戦等に出られず、リーグ戦も最後の二試合にしか出られず(しかも結果は負け)、全くつらい不意なシーズンを送つた。教訓としては、以後ちよつとした怪我にも神経質になり、早期治療を心掛けるようになったことである。「この年の入替戦は実にスリルがあつた。まさにドラマであつた。」

三年の時は、私にとつてベスト・シーズンだつたと言えよう。「去年の分も働いてやるう。」という気持ちも大いにあつたし、実際無我夢中でやつたというイメージが最も強い。山下で泣いたことや、法政戦でPKをはずしたことも今となつては良き思い出である。今、ふりかえつて思うにつけ一般に三年の時が一番余計な事も考えずに、一生懸命プレーできるのではないか、という気がする。「三年生にレギュラーの多いチームが強い。」

というのもあながち偶然ではないように思う。

第三章 いち・四年生としての反省

去年度の「失敗」の原因については、いろいろな意見があると思うが、ここでは今年のチーム及びクラブの問題と自己の部意識について私なりの所感を述べてみたい。

まず自分についてであるが、三年の時レギュラーであつた為か、最高学年になつたせいにか、急に意識過剰となり、「一軍だから」「四年だから」ということで、クラブ内の雑用等に目を向けず、ひたすら球を蹴り、自分さえ試合に出られれば良い、又、試合に勝てばそれで事足れりとする傾向があつたと思う。

これは他の多少の四年生にも見うけられたことのように思うが、指導的立場に立つべき最上級生のこのような態度が、下の者に信頼感・やる気をなくさせ、ひいては一・二軍間の意識上の分裂を招いたのではないかと、と昨今つくづく反省している。反例として、一年の時キャプテンであつた黒沢さんが率先してグラウンドを引つかき、石を拾うのを見て、私はこのクラブの雰囲気というものがわかつたし、「俺もやらねば」という気持ちを強く起こさせられたのを覚えている。リーダーたるものはサッカーだけ上手であればよいのではない、ということを指導的立場に立つものは心に刻んでほしいと思う。先輩チームの轍を踏まないように、と思ひ一念から敢えて恥をさらした次第である。

第四章 今年への期待と抱負

さて、今年のチームへの要望であるが、留年し諸君に「指導・助言」する立場の私としては、まず何よりも「自分の頭で思考し、判断し、意欲し」てほしいと思う。サッカーは大まかに

言つて、技術・戦術・体力・精神力の四要素から成り立つと思つて、各人が自己の現状を分析し、足りない点を意識し、自らそれを克服し向上しようという意図をもつて練習に取組んでほしい。そうすれば各人のレベルは必ずアップするだろう。また、もつとお互いに「言い合つ」てほしい。その場で言えなかつたら練習後でも部日誌にでも書けばよい。そうすれば相互理解・相互信頼が生まれ、いわゆる「息の合つたコンビプレー」ができるようになるだろう。それからもつと、全人格的につきあえ、といいたい。それが無理なら少なくともサッカーの面だけでも自分の全てをぶつけ合え。そしてお互いにもつと厳しくなれ。そうすれば、快い緊張感が生まれ、部の雰囲気もよくなり、チームワークも自然と結実し、「良いチーム」ができることだろう。

以上、やや分析的に述べたが、サッカーという球技は、基本的にチームゲームであると同時に各プレイヤーの自主性・創造性が重んぜられるスポーツである。従つて、プレイヤーの個性を考えないチームはだめであり、逆にチームの事を考えないプレイヤーもだめなのである。チームと選手との関係はこのように相互的矛盾(?)の関係にあり、両者を弁証法的に統一(?)

してこそ、良いチームが生まれる!というよりなことを最近考え始めた小生である。

具体的には、もつと「練習と試合とを結合」させ、実戦的練習をしたら・・・、とか、もつと「激しい試合経験」を積んだら・・・とか、体力及び精神力のトレーニングが足りないのでは・・・とかいろいろあるが、これらは現役の諸君とグラウンドであるいは一杯飲み屋で話しあいたいと思つている。

(昭和五十年三月一日)

卒業するにあつて思ふ事

四年 大 高 松 男

思えば四六年四月桜吹雪舞う頃東大に入学し、即座にこの伝統と栄光に輝く東大サッカー部に入部し、途中挫折することはありましたが、四年間というものは、今思えばほんの一瞬でしかなくつたよな気がします。喜びよりも苦難の多い歳月でしたが、今にして思えば、それもさわやかな思い出になつていきます。それはなぜかと言えば、自分なりにやるだけやつたと思えるから。

ぼくは、サッカーも好きですが野球も好きですから、その野球にたとえて言いますと、この四年間というものは多摩川で過ぎ

てしまいました。いつの日か後樂園のひのき舞台でプレーする
というのを悲願として、それこそ風の日も雨の日も、夏の陽
の照りつける日も、あるいはみんなが帰つた暗やみの中で、練
習に励みました。おそらく、四年生の中でぼくが一番練習量が
多かつたと思います。その質はどうかわかりませんが。しかし、
遂に悲願は実らなかつた。後樂園の壁は高く厚かつた。それで
も何度か、その壁をよじ登り、もう少しで越えようかという所
まで行つたこともありましたが、運命の女神のいたずらか、す
べて足を踏みはずしてしまつた。それ以後は、壁は遠のくばか
りだつた。なぜ巨人の星をつかむことができなかつたかとい
うと、おこがましく聞こえるかもしれませんが、迷いがあつたか
らと言えます。迷いとは、自分のプレーに対する迷いであり、
サッカー以外の事に対する迷いでもあります。つまり、自分に負
けたと言えます。

もう一度、青春が繰り返せるのなら、自分の足の速さをみか
くのに全力を傾けてみたい。後輩諸君も、オールラウンドプレ
ーヤーをめざすのもけつこうだが、自分の良い所を徹底的にみ
がいてみてはどうか。足の速さとか、キック力とか、タツクル
の強さとか。

青春時代、他に遊びたいこともあるのに、サッカーに情熱を
注ぐというのは、そこに喜びを見出ししているからであらう。
一つの事に没頭することは、犠牲を要求する。そこに自分との

戦いがある。どれだけ、自分に勝てたか、つまりどれだけ犠牲
にできたか、それがスポーツの苦しみであり喜びであり、そ
うして初めて栄光がある。

さて、秋のリーグ戦が終わつてから、新チームのゲームを数
試合見てきたが、正直言つてかなり弱体化したように思う。全
くチームの和がなく、肝腎のチームのかなめもない。早くチ
ームをリードしていく人物が現われないことには強くなるまい。
主将の奮気を望む。

現役を退いた今、気になるのはこれからの東大サッカー部が
二部でどうやつていくかということです。今のところ、二部の
下の方に名を連ねているが、酷なようだが、一部は無理だろう
から、せめて二部の上の方に連ねて欲しい。

最後に、東大サッカー部が不死鳥のように大空高くはばたく
ことを期待します。青春を賭けたサッカー部よ、さらば！

四年 尾崎 哲 男

オレはネ、試合の前の晩が一番好きだつたんだ。リーグ戦の
メンバー表見てね、明日誰れが出てくるか考えるんだ。一人一
人の顔を思い出す。とくに自分のマーク相手のやつ顔を、体
つきを。そうすると頭の中でそいつがプレーしだすんだ。ゲー
ムを見ててそいつのプレーだいたい憶えてるし、あとは勝手に

プレーさせるんだ。そして、この時はこうプレーしよう、こんなボールが来たら大きくクリアだ、こいつは足が速いから早めに体をとつちやおうとか。そいつにいろんなプレーをやらせ、それを全部オレがとめる自信ができるまで、アレコレと考えるんだ。

そうすると、明日は絶対大丈夫つて気になるんだ。

攻める方はあまり考えなかつたな。オレ出来ること決つてたろ、オープンへ出てボールもらおうとだけ考えたんだ。

それが終わつたら即寝る、

相手が予想どおりプレーしたこと実際には少なかつたな。オレも考えたよりには動けなかつたし。でも自己暗示つていうのかな、自分のプレーになんか自信がつくんだ。だから毎試合やつてたんだ。

昭和四九年度王将 柴田敏之

四年間のサッカー部生活を終えて、今はやはり、ほつとした、というのが実感であろう。自分の生活の中の大きな部分を占めていたものが突然ぽつかりと抜けて、その穴りめを一生懸命しているという状態である。

四十六年入学と同時に入部した。国立立戦からレギュラーに選ばれ、あの暑いさなかの京大戦にもフル出場させてもらい、リーグ戦も全試合フルタイム出場した。あれからもう四年近い年

月が流れた。本当に今になつてみると短かい四年間だつたと思う。

四十八年秋、我々が三年生の時のリーグ戦、天皇杯予選が終つた時点で我々の代が最上級生となつた。初めて本格的に年間計画をたてたり、練習内容等について *discussion* がなされた。

我々の代の前半、即ち京大戦までの目標は、先ず春の対抗戦では予選リーグを勝ち抜き決勝トーナメントに勝ち進むこと、そして京大戦で京大をうちのめすことにあつた。春期対抗戦は我々が入学した年から始まつた企画であつたが、これまで常に予選リーグで敗退していた。しかし今年は早大・教育大・青学を相手に、一勝二引分としベスト八入りして決勝トーナメントに出場し、惜しくも第一戦明治に1-0で敗れたが例年と比べるとまあまあの出だしであつた。

前半の目標の京大戦は京大を徹底的にいためつける予定であつたが、予定が崩れて1-0の辛勝であつた。ここまでの所、今年のチーム試合内容などを見てもまあまあの上りといえたいと思う。

約三週間の休みの後、あの炎天下の検見川で、一六日間に渡る合宿を行ない、天皇杯予選等の試合を経て、得点力に若干の不安を残すものの守備は安定し（天皇杯予選三試合無失点）リーグ戦に臨む体制は十分に整えられた。

このようにリーグ戦に突入するまでは一応予定通りであつた。こうしてリーグ戦が始まつた。

第一戦対拓大、前半早いうちに先取点をとり心秘かに今年の好成績を思つたものだつた。しかし前半終りに相手のシュートがバックスの足に当つて入るというSHIBUKOYAの失点があり幸運の女神は我が東大のFLOORから遠ざかつてしまつた。以後東大は得点することができず、結局1―2で敗れた。一試合勝点一を目標にして、これまで三年間殆ど先行したことがなかつたのを今年第一戦に勝つて調子にのつてつき進もうとしていたのが、第一戦からつまづいてしまつた。第二戦は日大であつた。日大は第一戦に相手が成城とはいへ9―0で勝つている手強い相手である。前半は一点を先取されたが同点のチャンスもあり好試合を展開したが、最後に逆襲から二点目を取られ、後半にも一点を追加され3―0で完敗した。この試合も決めるべき所で決めるという決定力の弱さを痛感した試合であつた。第三戦一橋大には2―0で勝つたものの、第四戦青学大には2―2の引分け、それも二点を前半先行され、タイムアップ数分前にやつと二点目をかえすというきわどい試合であつた。この時点で上への望みは現実的には消えてしまつた。第五戦対国士館、前半開始から二〇分間攻めに攻めるが点がとれずバックス陣も自然に前に前にと体重がかかる。そこで逆襲一発点をとられた。この試合に敗れたら完全に上位は望めない、ますますバックス

陣の前傾姿勢は強まる。その背後をつかれ、結局1―4で破れてしまつた。一勝三敗一分、勝点三である。下の心配をしなくてはならない状態である。しかも第六戦はあの快進撃を続けていた日大に土をつけた順天である。この試合を前にバックス陣は話し合ひ、「初心に戻ろう」「リーグ戦突入前の失点の少なかつた状態に戻そう」と確認しあつた。果して結果は0―0の引き分けであつた。この試合も惜しいチャンスを逃がすこと数度であつた。最終戦、八位は成城が決定しており七位は東大と一橋が候補であつた。一橋はすでに全日程を終了しており東大が成城に勝てば一橋、勝てないと東大が七位になる所であつた。実力を出せば楽勝のはずの成城相手に皆ガチガチとなり、結局4―3で勝ち入替戦はまぬがれた。

このように今年は六位という不成績に終つた。リーグ戦突入の時の予想とはとつてもかけはなれた結果だつた。つくづくリーグ戦、サッカーというものの難しさを再認識した一年であつた。せめてものなぐさめは、リーグ戦後の天皇杯予選で早大と戦ひ、0―1で敗けはしたもののリーグ戦前のような姿を最後に再びみせられたことであつた。かえすがえすもこのような試合をリーグ戦でできなかったことが残念である。

反省

昭和四九年度主務 兵頭圭介

肉体的な素質と運動神経に恵まれなかつたせいか、「試合に出る事」よりも、「試合のためのライン引きをする事」とか、「選手の使う水をくるんでくる事」等が、東大サッカー部における四年間の自分の主な仕事だつた。そのためか、一年下に谷本というマネージャーの素質のある人間がいたにもかかわらず、自分が主務をやるという事に對し、部内の抵抗はあまりなかつた。

主務を谷本に引継ぐにあたり、自分はやはり主務として失格であつたと思う。服装や、生活面でのだらしなさ、緻密な思考力の欠如、テリカシーのなさ等がその理由として挙げられるだろう。こういつたことよりも、リーグ戦に勝つて良い成績を挙げるのが部の大ききな目的であり、その目的達成に協力するのがマネージャーの仕事であるのだから、選手の粒が揃い、OBからも期待された今年のリーグ戦の成績が芳しくなかつた事実が、主務としての自分のやり方がよくなかつたことの証拠であろう。東大のように、個人技、体力の面で劣るチームにとつて、チームのまとまりは成績を左右する大きな要素である。今年のチームはその面で欠陥があつたようだ。一人のプレーヤーがミスをする、他のプレーヤーがそれをなじる、という場面が繰返

された後に失点が生まれ、負ける、というケースが多かつたようだ。

リーグ戦の前の練習試合では、同程度のレベルのチームに對しては勝つ事が多かつたし、自分達よりレベルの高いチームに對しても、僅差で敗れる場合が多く、自分としては、チームの調整は順調にいつていると思つていた。しかし、「健闘した」試合が多かつたためにかえてチームの長所・欠点がはつきりつかめなかつたのではないだろうか。「このままでよいのだ」という自信、悪く言えば増長のよりなものチームにとつてマイナスになつたのだろう。

自分のだらしなさが他のチームメイトにも伝染したのか、部屋はかつてない程に乱雑な状態であり、リーグ戦中の相手チームのスカウティング（情報集め）もうまくゆかず、残念であつた。

自分としては一生懸命やつたつもりであつたが、それがチームのために良い結果をもたらさなかつたことは、チームメイトに對しても申し訳ないし、自分にとつても残念なことである。しかし、運動会の仕事や、学連の運営を手伝えたことは、自分にとつて貴重な経験であつた。主務の仕事をさせてくれたチームメイトやOB諸氏、とりわけいつも手助けをしてくれた谷本、茅野、西山の三氏には、心から感謝の意を捧げると共に、色々迷惑をかけたことを申し訳なく思つてゐる。

今思うこと

四年 山 中 馨

四年間最後の公式戦が昨年十一月一〇日に終わつてから三ヶ月余り。明日はもう追出しコンパだという。まあいろんな意味で区切りは大切だ。

今何枚かの写真を見ている。試合や練習の或る瞬間だ。これに頼りに色々なことを想い出そうとするのだが、記憶力が弱いのか、どうもはつきりしない。一年前位迄がせいじつばいだ。特に試合のこととなるとブランクばかりだ。言葉では覚えている。しかしこれは、父母から話された言葉で自分の子供の頃の事を覚えていると感じているのと大して変わらないようだ。実感が残っているのはほんの瞬間のことだけ。それも試合開始前のこととか、終わつてから酒を飲んで大騒ぎした時のことなど、馬鹿げたことばかり。もしかしたら、試合に出ている者にとつて、試合は緊張の連続で、感激している余裕も無いのかもしれない。

四年間の戦績は二部四位が最高で、二年の時は部史上初の、下の入替戦を経験した。低迷の四年間だった。結果は小気味良し。毎年毎年一部の学校相手の試合では、結構まともな成績が残っている。全日本チームと似たようなものだ。ところがリーグ戦の成績はどうだ。多くの仲間が、もう少ししてきたはずなのにという感想を持つていてのではないか。しかしそれも四年間

続けば、実力として評価されることになる。実力というものをすべての総合と考えるなら、この成績に現れたのがまさに実力なのかもしれない。技術、体力、精神力、及びその他の要素がからみ合つて、しかもそれが個人としてでなく、チームとして一つ現れるのだから、もう複雑怪奇。結果こそ正確で、実力相応として諒解すべきなのだろう。しかし僕の心には確かに、いまだに幾分かの残念さが残つている。何といつたところで勝たなければ駄目だと、やはり思う。

チームは精神面の弱さをよく指摘された。いざとなるとかたくなつて力を出せない、などといつも言われたし、自分達もそう感じていた。自分の精神面の弱さは解るような気がする。僕はサッカーが生活に占める割合を小さくしようとした。「きよりの練習はこれで終わり。」の一言で、その日のサッカーは終わり、もうサッカーの時間ではないのだ。サッカーの雑誌は読まない。試合も余り見ない。試合の中継放送も特別なもの以外は見ないし、要するに、サッカーなんて好きじゃないつていう人のような生活をしていた。それでもしないと段々重くなつて、動きがとれなくなつてしまふような気がした。ところが、そんな抵抗も空しく、というより、かえつてなおさら、サッカーは深く浸み込んできて、がんじがらめ。リーグ初戦の前夜などまさに恐怖。眼が醒えて、足の裏が汗ばんで、何度も水飲みに立つたり。相手チームのこ

とをあれやこれやと考えているのが、本当にいやだった。口では生意気なこと言いながら、何ともはや弱々しいとよく思つたものだ。

先日、元横綱の大鵬が、ここ一番の大事な勝負でいつも負ける大関を見て、「もつと馬鹿にならにやいかん。」と云つていた。重い言葉だと思つた。だけど・・・たやすくはないな。あれやこれやと考え込んでしまふ人間に「一生懸命やればいいんだ。」と云つても、その言葉は結局のところ真実ではあるけれど、たいした力を持たない。

サッカーに關することを最も単純な形、勝ち負けという点に絞つてしまつて、勝つ為にどうすればいいかだけを考へてみることに、恐らくそんな考へ方のできることに、精神面の強さなのかもしれないと今、思う。しかし言葉で納得しても、それだけではどうにもならない。四年の時、特に夏になつてから、リーグ戦のことを考へていて、あれこれ思ひめぐらすうちに頭全体が入り乱れてどうしていいか解らなくなつてしまつた。だから、どうしても勝つことが必要をよりだ。

四年 山 辺 福二郎

四年の間に必ず東大を一部に入れてやろうと思つていたのですが、やつぱりダメでした。今思うことは、サッカーは本当に

なかなかうまくならないものだということです。その主たる原因は、自分が毎日氣を入れて練習していきなかつたことで、わかつていても実行できない自分が齒痒くて仕方ありませんでした。テレテレ練習していたのではなかなかうまくありません。実感です。サッカーに對する闘志がムラムラとわいてくる瞬間、これを忘れないことが重要なことだと思ひます。

私は就職してもサッカーはもつととうまくなりたいと思つています。中学の頃から、コバカバーナの浜辺でボールを蹴るのが夢でしたが、この夢も是非近いうちに実現したいと思つています。

// 言わずにこしたこと //

四年 吉 沢 伸 明

過ぎ去つた日々は、思ひ返すほど早くかつ悔いの多いものよりであります。一年生のとき、何となく駒場の居こちが悪く、フラツと御殿下へ来て入部して以来、四年生のサッカーへの真摯な態度に驚くと共に心を動かされたのが運のつきで、夢中で過した四年間でした。

勝負を思うと齒ぎしりし、プレーを思うとああすればよかつ

たと悔い、練習を思ふともつときびしくと反省するばかりですが、それなりに楽しく充実した四年間であつたと思ひます。

一年生のとき、四年生のまとまりのなさ、チームの精神面の弱さを見て、まとまりのあるクラブにしたいと思つた初志は、買き通せなかつたようです。自己の怠惰と無力をかみしめつつ、そりいわざるをえないのは悲しいことです。この四年間の苦しい練習は何であつたのか。我々のチームとは何なのか、東大サッカー部とは何か。そして何より部員としての己れとは一体何か。このような疑問に答えることは、今の私にはできません。あまり生々しく、きびしい問いかけだからです。生活の何パーセントかを否ぼとんどを賭してやつてきたものを問い返すなどという作業は、苦しくもあり、自己正当化の危険もあります。だからその感情に従えば、ここで筆を置くのが筋の通つたやり方なのでしょうが、どうしてもひとこと言つておきたいことがあつて、それを書かないと胸のつかえ棒がありません。敢えて書きます。妄執か、心の迷いかとにかく、恥かしさも自己欺瞞も度外視して、書くことにします。

部員であることは一体なんなのであろうか。部費を払つてゐるから、名簿に載つてゐるから、好きなきに練習に出てくるから、あるいはウマク練習しなくても試合に出られるから部員であるのか。答えは否である。部員であること、それは日々の練習を共にすることなのである。もちろん、サッカーに対する

熱い情熱は、いわずもがなのことである。しかし、それだけでは試合はできない。あの御殿下の、半地下の薄よごれた部屋に集り、石コロだらけのグラウンドで一筋に苦しい練習をすること以外、サッカー部員としての共通項が一体どこにあるというのか。これは極く当たり前のことである。しかしここから出発し、これを起点として考えなければ、現状打開の道はないと思う。肝心なところで勝てない、精神的弱さ、チームのまとまりのなさ等々、よく耳にする批判である。確かに、現在二部で、東大がどうしても勝てないと思うチームなど居ない。いやおそらく一部にも居ないだろう。しかし、全敗の可能性も充分にある。その壁をどうのりこえるか。

これから東大のチームが生き残る方向として考えられるのは、基礎技術と基礎体力の徹底強化とその上でアタマで勝負する、サッカーを知り考えることを有利とするやり方だと思ふ。昨年はこのうち基礎体力に大きな禍根を残した。今年はまだ全般にわたつて問題がある。特に、鍵となるサッカーへの理解においては、甚だ心もとない。

しかし、このやり方には異論もあろう。方法は無数であり、メンバーにあつたやり方を選ばばよい。しかしそれにしても、どのようなやり方にも最低限チームとしてのまとまりは必要である。チームとして戦ふことなくして、勝つことができないのはサッカーに関しては真理であらう。

ではチームとは何か。チームワークとは何か。チームの心は一つに結ばれていなければならぬのか。メンバーの心の連帯なくしては真のチームワークは成り立たぬのか。難問すぎるが、あえて今解答を求めるとすればそのような確かな精神的紐帯なくしてもチームは可能であり、勝利のためのチームワークは得られると答えたい。もちろん一人のなかに確固とした連帯が作られ、すばらしいチームができれば、それは理想である。

私としてそれを切望し、無駄な努力を繰り返してきた。しかし、あえてそのような連帯は、砂上の楼閣、白昼夢に過ぎないのではないかと、いわざるをえない。決してベシミスでも性悪説でもないが、一年から四年までいて、しかもそれぞれ或る程度自我の形成を終つた半大人たちが一年間の練習でそこまで確かな精神的結びつきを作り出せるかどうか、懐疑的たらざるをえない。

であるなら、いかにしてチームを作り出せるか。それは、仲間を理解するといつても、サッカー選手としてのあいつであり、チームワークといつてもサッカーに関してのものなのである。ここで彼にパスにすべきか否か、あるいはカバーすべきか否かは、チームメイトとの心のつながりの深さによつてではなく、(もちろんそれもひとつの条件ではあるが、ポイントではない) それはその選手の技術、体力あるいは戦術、戦略眼等によつて決まつてくるべきものである。そういう意味で、私も我々のチ

ームもチームを作ることに努力が足りなかつた。きびしさが足りなかつた。心の交流は必要だが、それですべてをカバーできるわけではない。サッカーのチームを作りたかつたら、サッカーを知り、プレーの上で連帯しなければならぬ。そしてプレー上の連帯は、心の連帯を必要最小限要求するがそれとは別の次元の、サッカーという次元での努力によつてこそえられるものなのだろう。

しかし、そのような努力ですべて解決されるのかといへば、再び否といわざるをえない。「サッカーは科学ではない。」とは一年のときのキャプテンの名言であるが、その言葉通り、純粹にサッカーだけをとりだすことは実際上不可能であろう。サッカーが一人の人間によつて戦われる以上、人間的要素が複雑にからみあつてくることは避けられない。

しかしであるなら尚さら、我々部員とは一体何かという最初の問いに立ち返らざるをえない。練習を共にするといひわば部員の原点に立ち返つて、そこを基盤としてひとりひとりがそこにこだわり責任をもとうとしてほしい。そして、そのような日常的な練習を平凡に、しかし懸命にやるところに、あるいは、勝敗を越えた何か、我々の目標とするに足るものがあるのかもしれないが、とにかくそのような「責任をもつた」、「誠実な」態度で日々の練習に取組むるとき、真に強いチームができるのであろう。部員であることの共通項は何か。共にグラウンドで苦

しい練習を日々行ふこと、それ以外にはない。そこにこだわつてほしい。それが壁を突破する道であると思う。

長々と、駄文を書き綴りましたが、この四年間ともかくも充実したサッカー生活が送れたのは、監督、OB諸氏、現役諸君のおかげです。とくに、浅見監督、古村さんにはきびしく指導していただきました。それに報いるだけの成績があげられなかつたことが残念でなりません。ありがとうございました。OBとなつてしまふ今は、ただ今年の活躍を祈るのみです。

現役よがんばれ!!

ある無名選手の思い出と決意

新主将 池 森 俊 文

新キャプテンとして、もつと適当なチームがあるだろうが、相互理解を深める為、敢えて大学までの知られざる過去を公開しようと思う。

私が球を蹴り始めたのは、小学校の五年生の時、折りしも東京オリンピック後の、所謂サッカーブームが始まる頃だつた。希望者が参加する「サッカー教室」で、日曜日に集まつて東洋工業の選手などに指導してもらつたのだ。しかし、毎週は開かれなかつた。そして、放課後には野球をやつた。

中学は広島大付属中に入学した。そのサッカー部は伝統があり、当時もまだ、広島ではトップクラスだつた。「新親」な友達からサッカー部の練習の恐ろしさを知らされて、何となくサッカー部を避けていたが、或る日昼休みに、木造校舎の二階の窓から、ひとりの先輩が、声をかけてくれた。「サッカー部に入らないか。」空自そのニコニコした笑顔が、春のやわらかい日差しを受けて、とてもやさしそうに見えたので、あの友達の忠告を無視してサッカー部に入学してしまつた。あの笑顔が買だつたのだ。ここから人生が狂つた。(新入生の勧誘は効果有り!)

練習は予想以上に苦しかつた。夏には合宿もあつた。が、結構友達と仲良く楽しくやつていた。ところが、二年の時、友達が春の公式戦で初めて使われた。その時まで、二年生はまだ試合には出られないと思つていたし、試合に出場できる時は、みんな一緒だと思つていた。だが実は上手なら誰でも出られ、その為部内での競争があつたのだ。それに気付き、三日後から、朝早く学校へ行つて練習することにした。(二日間は、その時のくやしさと、何もする気がしなかつたので……)この抜け駆け的行為は効果があつた。一月月ぐらい続くと、何となく自信がついた。そして、この甲斐があつて、秋の公式戦では、試合に使つてもらえた。しかし、ここで満足して、この早朝練習をやめてしまつたところは、流石無名選手。

高校は、そのまま広島大付属高校に入學。しかし、サッカー部へは「そのまま」ではなかつた。何しろ、「泣く子も黙る」高校サッカー部だつたから。だが結局入部してしまつた。

一年生の時がいちばん苦しかつた。毎日、昼休みに部室へ行つて、ボールに油を塗つてから空気を入れる。練習前には、グランド整備・ライン引き・ゴールネット張りなどをする。練習後にはあとかた付け。これを全部、一年生がやつた。また、練習中には、「一年生は体力がないから」といつて、特別サービスのトレーニングが課せられた。本当にどうなつてゐるのか。毎日毎日、今日こそやめてやろうと思つたものだ。(中学三年の終り頃から多小貧血ぎみだつたこともあつて。)しかし、苦しくてやめるのは、何となく後ろめたさを感じた。これは、監督の福原先生の影響が大きい。

この先生は、きびしかつたが、立派な人だつた。よく、「サッカーは人生の縮図だ。」とか「サッカーをやりながら、自分の哲学を作れ。」とか言われた。また、「試合では、自分の相手と命を賭けて勝負しなければならぬ。」というのが、試合に対する思想だつたと思われる。その影響で、私もしばらくの間、この思想に浴つてサッカーを続けた。ところが、この先生は、高一の冬に亡くなられた。その為か、これらの言葉を思い出すと、ズシンと心に響いてくる。

あの頃から、既に五年もたつてしまつた。その間に全国大会

に出場したり、学問を志してサッカー部を一時やめたりで、いろいろな事があつたが、結局、現在もサッカーをやつてゐる。この間に、自分としては、いろいろな面で成長したと思う。特に精神的には、少なからず穏やかになつたようだ。だが、これは、少なくともサッカーをするうえで、成長なのだろうか。試合に出られなくても「下手なんだからしかたがない。」と諦める心が、くやしさを押し殺してしまふ。だから、早く来て練習したり、遅くまで残つて練習することはあつても中途半端だ。また、試合中に目の前でボールを蹴られると思わず顔をそむけてしまふ。あの高校時代の試合に対する心の激しさは、何処へ行つてしまつたのか。当時は体を張る事では負けないう自身があつた。しかし今は何も誇れるものはない。

大学も遂に四年目になる。これが、サッカーをする最後の年になるかも知れない。ここでもう一度、あの情熱をよみがえらせることができればと、若干の失なわれた時へのノスタルジアを伴つて、思つてゐる。

(この作品はノンフィクションであり、登場する人物・団体は、実在のそれと全く関係ありません。)

三年 植村 祐幸

僕がサッカーを始めたのは、中学一年の頃であるから、九年